

昭和 63 年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

中耕地・西通・東通遺跡

1989

埼玉県熊谷市教育委員会

昭和63年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

な か ご う ち に し ど お り ひ が し ど お り い せ き
中耕地・西通・東通遺跡

1989

埼玉県熊谷市教育委員会

序 文

熊谷市北西部の奈良地区には市指定文化財の横塚山古墳があり、多くの古墳が存在することが知られています。

同地区において、東京電力株式会社の富士通熊谷線の工事が実施されることとなり、本市教育委員会は、東京電力株式会社から委託を受けて発掘調査を実施しました。

遺跡は、貴重な文化遺産として、後世に残すことが第一に計られるべきですが、工事の性格上やむを得ず、記録保存の方策をとることとなったのです。

本書は、昭和62年度に発掘調査を実施して得られた成果を昭和63年度にまとめて報告するものです。

本書が郷土の歴史を語るうえで、また、学術研究のうえで活用されるものであれば、幸いに思います。

最後になりましたが、東京電力株式会社埼玉支店ならびに地元奈良地区の方々を初め多くの方々からご指導・ご協力をいただきましたことに対しまして、深く感謝の意を表します。

平成元年3月31日

熊谷市教育委員会

教育長 関根幸夫

例 言

- 1 本書は、埼玉県熊谷市大字上奈良102-1他に所在する中耕地遺跡・熊谷市奈良新田311-7他に所在する東通遺跡・熊谷市奈良新田43-1他に所在する西通遺跡の発掘調査報告である。
- 2 文化庁の通知は、昭和63年7月8日付け63委保記第2-41号である。
- 3 本調査は、東京電力株式会社の鉄塔建設（富士通供給工事）に伴う事前記録保存のための発掘調査である。
- 4 発掘調査期間は、昭和62年9月21日から12月29日であり、整理調査期間は昭和63年4月1日から平成元年3月31日である。
- 5 発掘調査の担当、本書の執筆・編集は金子正之が行った。
- 6 発掘調査の組織は、次のとおりである。

調査主体者	熊谷市教育委員会教育長	関根幸夫
調査担当者	社会教育課主任	金子正之
事務局	課長	茂木 優（昭和62年度）
〃	課長	高田普通（昭和62年度は課長補佐）
〃	課長補佐	小林武夫（昭和63年度）
〃	係長	北 俊明
〃	主査	森田博明（昭和62年度は主任）
〃	主任	平井加余子（昭和62年度）
〃	〃	米澤ひろみ
〃	主事	権田宣行（昭和63年度）

- 7 埼玉県北部地域試料胎土重鉱物分析報告は、バリノサーヴェイ株式会社に委託して調査した報告である。
- 8 中耕地遺跡I区の基準点の座標は、A1はX:21009.00m、Y:-42214.000m、A2はX:21087.00m、Y:-42214.000mである。
- 9 遺構図の中で、住居跡はH、土器集中遺構はT、配石遺構はS、溝跡はM、土坑はD、ピットはPと記号化した。遺物は、土器は●、土錘は○、石製品は□、鉄製品は▲と記号化した。
- 10 遺物実測図の中心線は、遺物を回転させず実測したものは実線、180°回転させたものは一点鎖線を用いた。
- 11 遺構図と写真図版の遺物番号は、挿図番号を示す。例えば、1-1は、挿図の第1図の1の遺物を示す。
- 12 本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会で保管する。

目 次

序文

例言

目次

挿図目次

表目次

図目次

図版目次

I 発掘調査に至るまでの経過	1
II 発掘調査・報告書作成の経過	1
III 遺跡の立地と環境	2
IV 中耕地遺跡	4
1 遺跡の概観	4
2 遺構と遺物	4
V 西通遺跡	36
1 遺跡の概観	36
2 遺構と遺物	36
VI 東通遺跡	38
1 遺跡の概観	38
2 遺構と遺物	38
VII 埼玉県北部地域試料胎土重鉍物分析報告	42
1 はじめに	42
2 分析方法	42
3 分析結果	43
4 考察	43
5 まとめ	45

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	2
第2図	遺跡位置図	3
第3図	中耕地遺跡Ⅰ区全測図	5
第4図	1号住居跡	6
第5図	1号住居跡カマド	6
第6図	1号住居跡出土遺物	7
第7図	2号住居跡	8
第8図	2号住居跡カマド	8
第9図	2号住居跡出土遺物	9
第10図	3号住居跡	10
第11図	3号住居跡出土遺物	10
第12図	1号土坑	10
第13図	1号土坑出土遺物	10
第14図	2号土坑	11
第15図	1～4号ピット	11
第16図	Ⅰ区遺構外出土遺物	11
第17図	Ⅱ区全測図(1)	12
第18図	Ⅱ区全測図(2)	13
第19図	4号住居跡出土遺物	13
第20図	4号住居跡	14
第21図	5・6号住居跡	14
第22図	5号住居跡カマド	15
第23図	5号住居跡出土遺物(1)	16
第24図	5号住居跡出土遺物(2)・6号住居跡出土遺物	17
第25図	1号土器集中遺構	18
第26図	1号土器集中遺構出土遺物	19
第27図	2号土器集中遺構	20
第28図	2号土器集中遺構出土遺物	20
第29図	3号土器集中遺構	20
第30図	3号土器集中遺構出土遺物	20
第31図	1号配石遺構	21
第32図	1号配石遺構出土遺物	21
第33図	1号溝跡	22

第34図	1号溝跡出土遺物	22
第35図	2～6号溝跡	23
第36図	2～6号溝跡出土遺物(1)	24
第37図	2～6号溝跡出土遺物(2)	25
第38図	2～6号溝跡出土遺物(3)	26
第39図	7号溝跡	27
第40図	7号溝跡出土遺物	27
第41図	3号土坑	27
第42図	3号土坑出土遺物	27
第43図	4号土坑	27
第44図	5・6号ピット	27
第45図	Ⅱ区遺構外出土遺物(1)	28
第46図	Ⅱ区遺構外出土遺物(2)	29
第47図	Ⅲ区全測図	30
第48図	7号住居跡	31
第49図	7号住居跡カマド	31
第50図	7号住居跡出土遺物(1)	32
第51図	7号住居跡出土遺物(2)	33
第52図	4号土器集中遺構	33
第53図	8号溝跡	34
第54図	8号溝跡出土遺物	34
第55図	Ⅲ区遺構外出土遺物(1)	34
第56図	4号土器集中遺構出土遺物・Ⅲ区遺構外出土遺物(2)	35
第57図	1号溝跡、1・2号土坑、1～3号ピット	36
第58図	西通遺跡全測図	37
第59図	3号土坑	38
第60図	東通遺跡全測図	39
第61図	西通遺跡・東通遺跡出土遺物	41

表 目 次

表1	埼玉県北部地域関連胎土分析試料表	46
表2	埼玉県北部地域試料胎土重鉍物組成	47

図 目 次

図1	埼玉県北部地域試料胎土重鉍物組成ダイアグラム	48
図2	埼玉県北部地域試料胎土重鉍物組成ダイアグラム(グループ別)	49

図版目次

5号住居跡カマド遺物出土状態	15
図版1 中耕地遺跡・西通遺跡・東通遺跡空中写真	
図版2 中耕地遺跡空中写真	
図版3-1 中耕地遺跡遠景(西から)	
2 中耕地遺跡遠景(南から)	
図版4-1 1区全景	
2 1号住居跡	
図版5-1 1号住居跡	
2 2号住居跡	
図版6-1 3号住居跡遺物出土状態	
2 3号住居跡	
図版7-1 1号土坑	
2 1号ビット	
図版8-1 2・3号ビット	
2 4号ビット	
図版9-1 5・6号住居跡	
2 4号住居跡カマド	
図版10-1 5号住居跡カマド	
2 5号住居跡カマド	
図版11-1 1号土器集中遺構	
2 1号土器集中遺構	
図版12-1 2号土器集中遺構	
2 3号土器集中遺構	
図版13-1 1号溝跡遺物出土状態	
2 1号溝跡	
図版14-1 1号溝跡遺物出土状態	
2 2～6号溝跡遺物出土状態	
図版15-1 2～6号溝	
2 5号溝跡遺物出土状態	
図版16-1 7号溝跡	
2 6号ビット	
図版17-1 7号住居跡遺物出土状態	
2 7号住居跡遺物出土状態	

- 図版18-1 4号土器集中遺構
2 4号土器集中遺構
- 図版19-1 8号溝跡
2 8号溝跡遺物出土状態
- 図版20-1 西通遺跡遠景(北西から)
2 西通遺跡遠景(東から)
- 図版21-1 1号溝跡
2 2号溝跡
- 図版22-1 1号土坑
2 2号土坑
- 図版23-1 3号土坑
2 東通遺跡遠景(西から)
- 図版24-1 東通遺跡遠景(南から)
2 東通遺跡全景
- 図版25-1 1・2号溝跡、3・4号ピット
2 2号溝跡、3号ピット
- 図版26-1 3号土坑
2 6号ピット
- 図版27 1・2号住居跡出土遺物
- 図版28 3～5号住居跡・I区遺構外出土遺物
- 図版29 1～3号土器集中遺構・1号配石遺構・1号溝跡出土遺物
- 図版30 2・4～6号溝跡出土遺物
- 図版31 7号溝跡・3号土坑・II区遺構外出土遺物
- 図版32 7号住居跡・4号土器集中遺構出土遺物
- 図版33 III区遺構外・8号溝跡・西通遺跡・東通遺跡出土遺物
- 図版34 胎土重鉍物分析試料写真 (I～IIIグループ)
- 図版35 胎土重鉍物分析試料写真 (IV～VIグループ)

I 発掘調査に至るまでの経過

東京電力株式会社埼玉支店から、昭和62年3月16日付けで、市内大字上奈良・中奈良・奈良新田に所在する送電線路新設工事地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会があった。熊谷市教育委員会は、当該地は埋蔵文化財の所在する可能性が高い地域であり、試掘調査を実施する必要がある旨の回答をした。

昭和62年5月6日付で東京電力から試掘調査の依頼を受け、教育委員会は速やかに試掘調査を実施した。その結果、埋蔵文化財が確認されたので、その旨を東京電力へ回答するとともに、現状保存の可能性をも含めた保存に関する協議を実施した。しかし、事業の性格等から記録保存の措置もやむを得ないとの結論に達し、発掘調査の実施が具体的に計画された。

発掘調査は、熊谷市教育委員会が昭和62年9月から11月までに実施するという事で双方が合意し、東京電力株式会社埼玉支店長から文化財保護法57条の2第1項に基づく発掘届出が、熊谷市教育委員会教育長からは文化財保護法第98条の2第1項に基づく発掘通知がそれぞれ文化庁長官あて提出された。

昭和62年9月18日、熊谷市と東京電力株式会社で埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書を締結し、発掘調査は昭和62年9月21日から開始された。文化庁からの通知は、昭和63年7月8日付け63委保記第2-41号であった。

II 発掘調査・報告書作成の経過

鉄塔No.1は西通遺跡、鉄塔No.2は東通遺跡にそれぞれ含まれ、鉄塔No.4とNo.4甲とNo.4乙は中耕地遺跡に含まれていた。中耕地遺跡は、No.4甲をI区・No.4をII区・No.4乙をIII区として調査を実施した。

それぞれ、重機により表土剥ぎを行ってから、5m間隔のグリッド設定をして、遺構の精査を実施した。遺構が確認されたところは、手掘りによって掘り下げた。遺構を掘り下げながら、遺物の出土状況の実測を行い、出土状態の良好なものは写真撮影を実施してから、遺物の取り上げを行った。

掘り終わった遺構は、実測・写真撮影を実施した。

昭和62年11月の段階で、当初予定したものより遺構・遺物が多量に出土したため、教育委員会と東京電力で協議して、期間を12月末まで延長することとした。

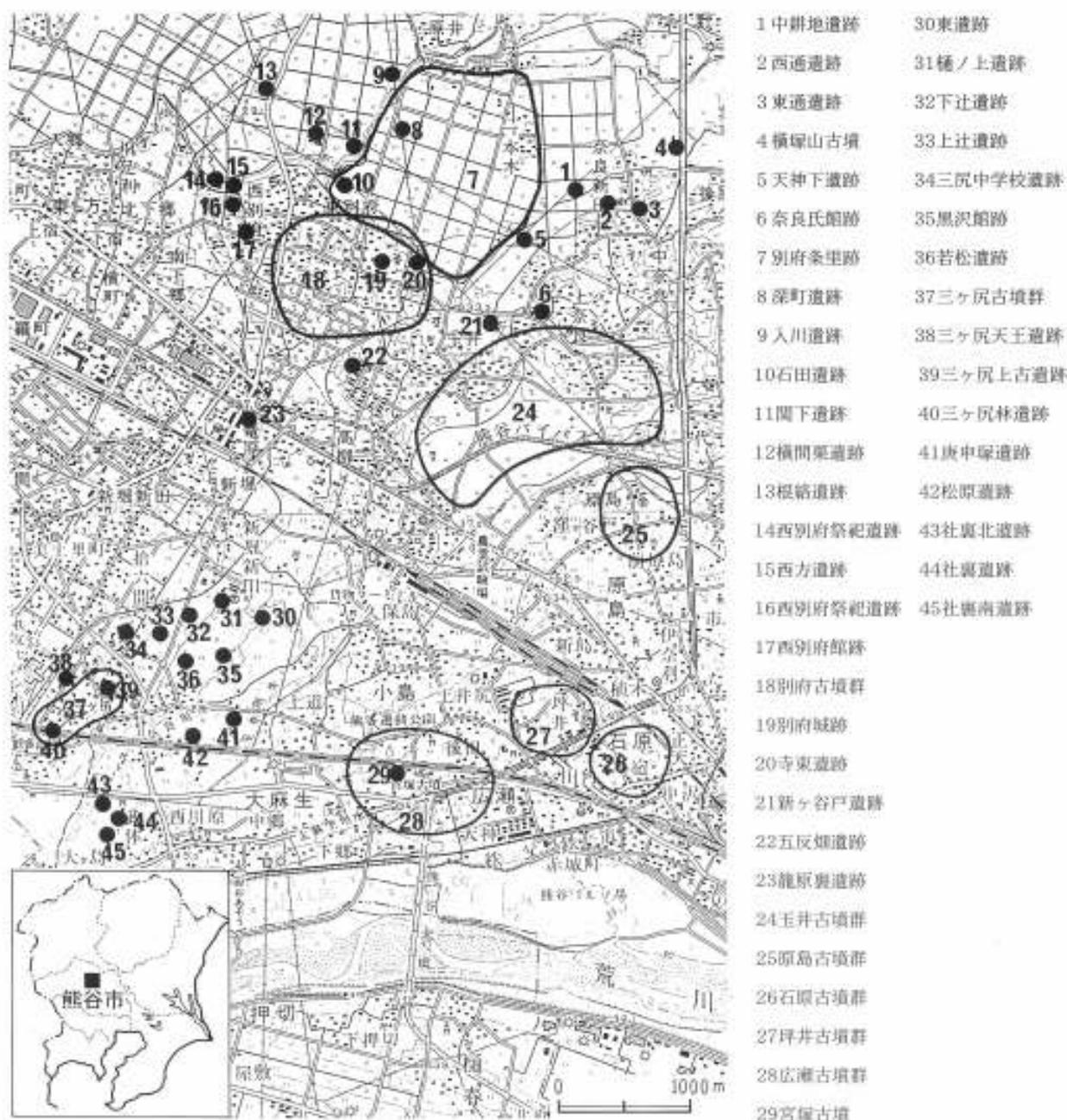
各鉄塔ごとに、全体測量及び写真撮影を行い、空中写真撮影も実施し、12月29日に調査は終了した。

整理・報告書作成作業は、昭和63年度に実施し、遺物の洗浄・注記・復元・拓本取り・実測・写真撮影を行った。遺構の図面整理、遺構・遺物のトレース、遺構図・遺物図の版組みを行い、原稿執筆・割付をして、報告書を刊行した。

Ⅲ 遺跡の立地と環境

中耕地遺跡は、熊谷市大字上奈良字中耕地地内、西通遺跡は、熊谷市大字奈良新田字西通地内、東通遺跡は、熊谷市大字奈良新田字東通地内にそれぞれ所在している。各遺跡は、熊谷市の北西にあたり、J R熊谷駅の北西約6.3km に位置し、荒川から北へ約5.3km、利根川から南へ約5 km の所にある。

標高は約29m前後、地目は水田であり、荒川と利根川の乱流によって形成された沖積地の自然堤防上に立地している。



第1図 周辺遺跡分布図

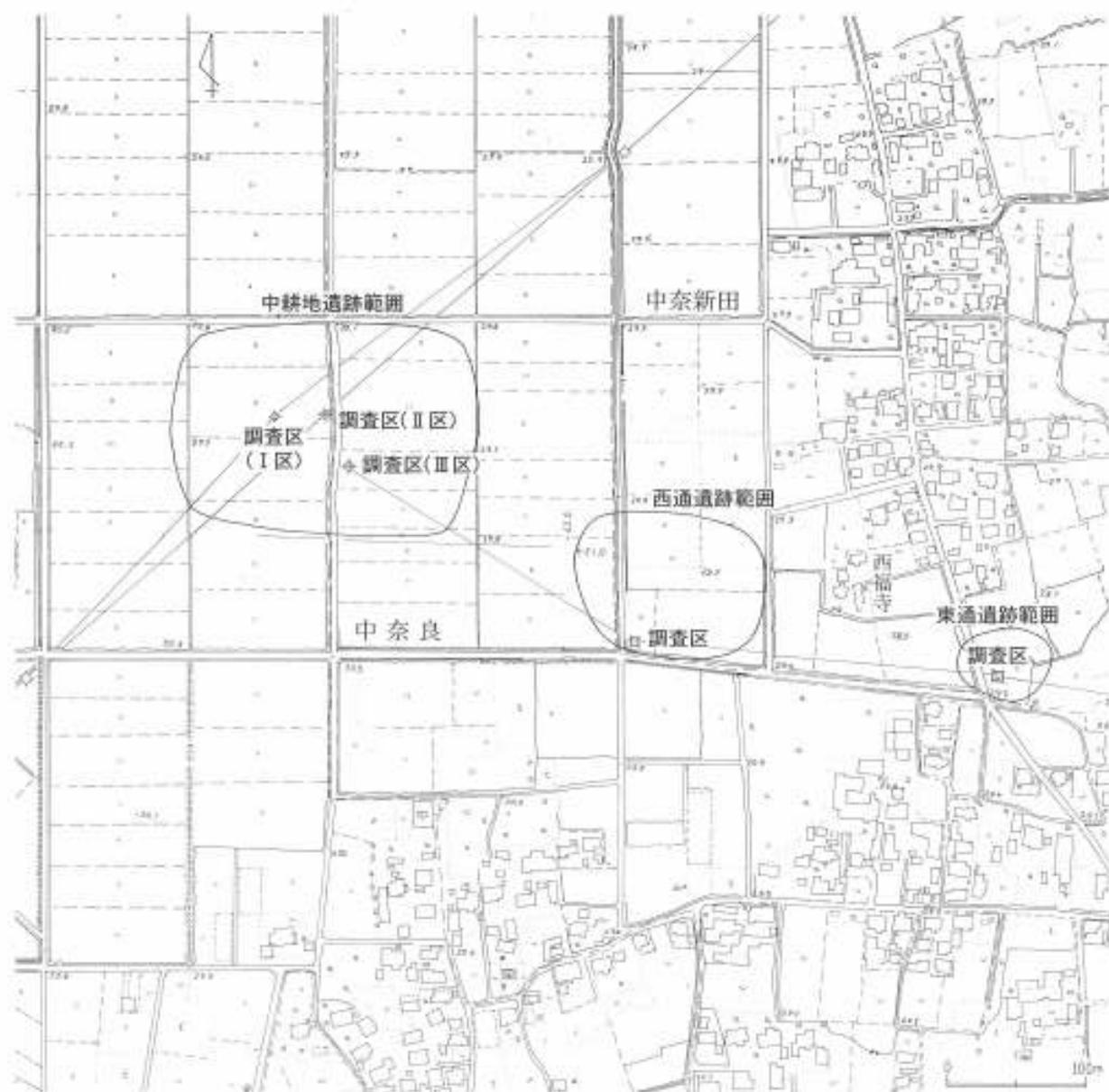
周辺には、市指定史跡横塚山古墳(4)、別府古墳群(8)、玉井古墳群(20)があり、多くの古墳が分布している。

本遺跡周辺の熊谷西部地区における、古墳時代から平安時代にかけての遺跡について概観する。

古墳時代の集落跡としては、前期においては別府地区の低地部分に深町遺跡(8)・入川遺跡(9)・石田遺跡(10)・横間栗遺跡(12)・根絡遺跡(13)で、住居跡等が検出されている。

中期は、三ヶ尻地区の上辻遺跡(33)から住居跡1軒と別府地区の石田遺跡(10)の埋没河川から土器が出土しているのみである。

後期は、奈良地区においては中耕地遺跡・天神下遺跡(5)・新ヶ谷戸遺跡(21)、別府地区は深町遺跡・入川遺跡・根絡遺跡、三ヶ尻地区は三ヶ尻天王遺跡(34)で住居跡が検出されている。



第2図 遺跡位置図

古墳は、前述したように、すぐ北東に前方後円墳の横塚山古墳があり、現在は確認されていないが、周囲には横塚山古墳を中心とする古墳群があると考えられる。

別府古墳群は、16基の円墳と1基の前方後円墳が確認されていて、本遺跡の南側にある玉井古墳群²⁴は、17基の円墳と2基の方墳が確認されている。新ヶ谷戸遺跡²⁵からは、胴張りの横穴式石室を有する円墳が調査されている。三ヶ尻古墳群は58基の円墳と二子山古墳と運派塚古墳の2基の前方後円墳があり、川原石使用の胴張りの横穴式石室を有する円墳が調査されている。

奈良平安時代になると、別府地区の低地で根柵遺跡で溝が発見されているのみである。新堀地区では籠原裏遺跡、三ヶ尻地区では拾六間遺跡・樋ノ上遺跡・三尻中学校校庭遺跡・上辻遺跡・下辻遺跡、奈良地区は新ヶ谷戸遺跡がある。

IV 中耕地遺跡

1 遺跡の概観

中耕地遺跡は、今回調査した3箇所の遺跡のうち西側に位置している。本遺跡内に、3棟の鉄塔が建設されることにより、西側からⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区と呼称して調査を実施した。

Ⅰ区からは、住居跡3軒、土坑1基、ピット4個が検出された。住居跡は、竪穴式住居跡であり、調査区が狭いため部分的に検出され、1号住居跡は東側部分、2号住居跡は北側部分、3号住居跡は南側部分が確認されただけであった。1・2号住居跡はカマドが検出されたが、北東方向に設置されていた。

遺物は、平安時代の土師器・須恵器が出土した。

Ⅱ区からは、住居跡3軒、土器集中遺構3基、溝跡7条、土坑2基、ピット2個が検出された。

住居跡は、竪穴式住居跡であり、5号住居跡はカマドが検出され、6号住居跡は東側部分とカマド、7号住居跡は北東の隅の部分が検出された。

6号住居跡は、カマドの中から甕と甔が組み合わされた状態で出土し、当時の甔の使用状況がわかる良好な資料である。5号住居跡は平安時代、6・7号住居跡は古墳時代と考えられる。

Ⅲ区からは、住居跡1軒、溝跡1本、ピット1個が検出された。

住居跡は竪穴式住居跡であり、東側部分が検出され、カマドは南側に設置されていた。遺物は古墳時代の土師器坏型土器がほぼ完形で出土した。

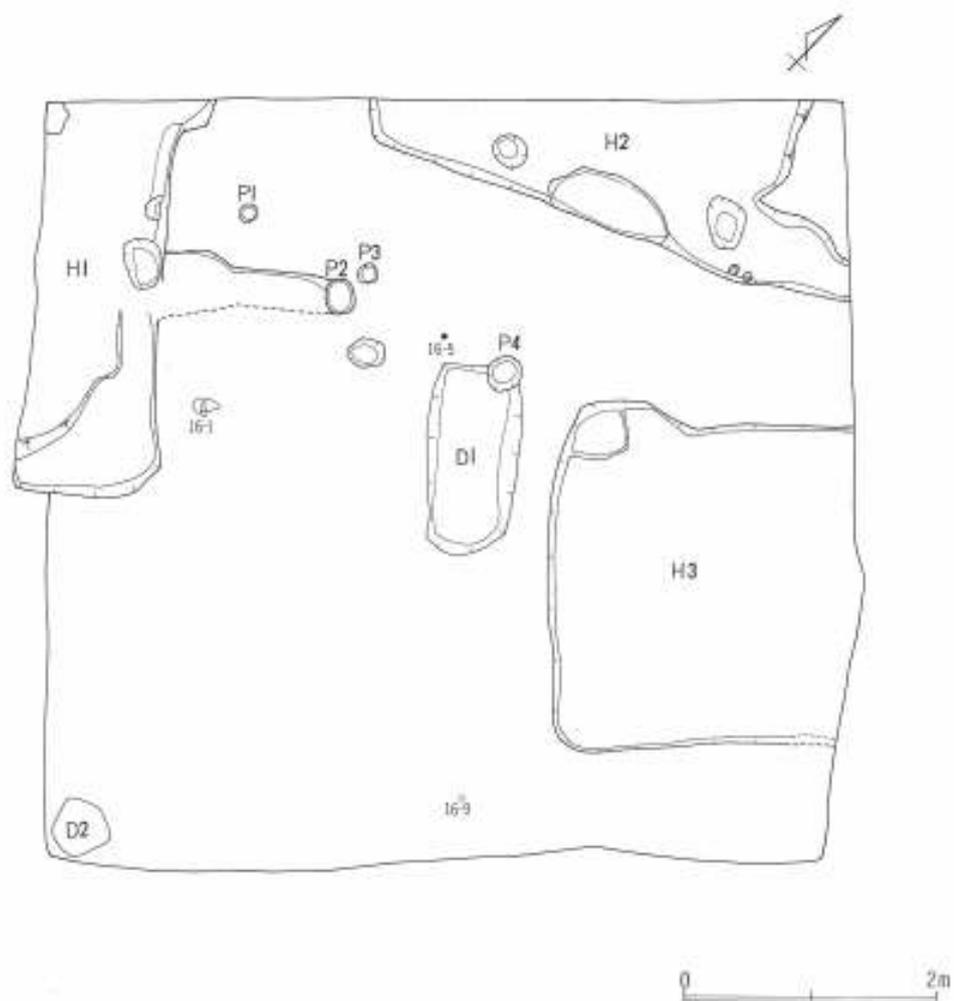
2 遺構と遺物

Ⅰ区

(1) 住居跡

1号住居跡 (第4～6図)

Ⅰ区の西隅に検出され、カマド周辺が確認されただけであった。形態は方形と考えられる。縦・横の大きさは不明であるが、深さは35cmであった。土層は、1層が耕作土、2層が暗青灰色土、3層が茶褐色土、4層が暗褐色土、5層が暗褐色土(火山灰含む)、6層が茶褐色土(土器片含む)、7層が褐色土、8層が暗褐色土(炭化物・土師器片含む)、9層が暗褐色土(炭化物含む)、10層が暗褐色土(炭化物・



第3図 中耕地道跡Ⅰ区全測図

土師器片含む)、11層が暗褐色土 (炭化物・焼土を含む)、12層が黄褐色土、13層が黄褐色土、14層が橙色土 (焼土層)、15層が赤色土 (焼土層)、16層が黒色土 (土師器片・焼土を含む炭化物層)、17層が褐色土 (焼土粒子含む)、18層が褐色土、19層が黒色土 (炭化物層)、20層が黄褐色土であった。

(出土遺物)

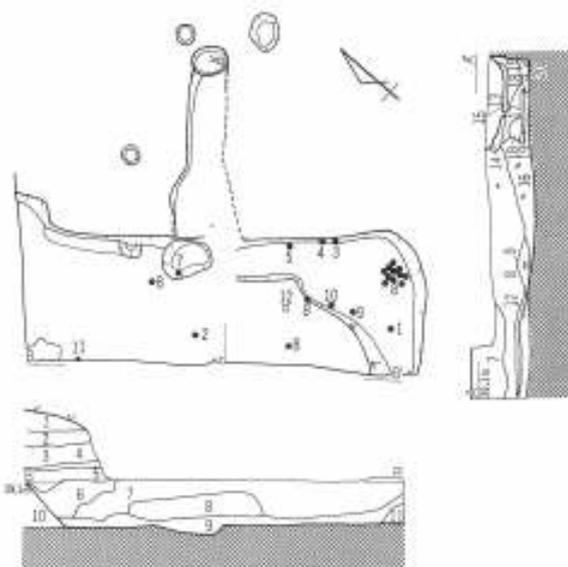
1から3は、須恵器坏であり、1は、外面の約2/3、内面は約4/5が黒色である。4は須恵器皿である。5は灰釉陶器高台付椀の高台部分で、6・7は須恵器高台付坏である。8・9・11は土師器甕である。10は、須恵器壺の底部である。12は扁平な石であり、13は滑石製白玉である。

2号住居跡 (第7～9図)

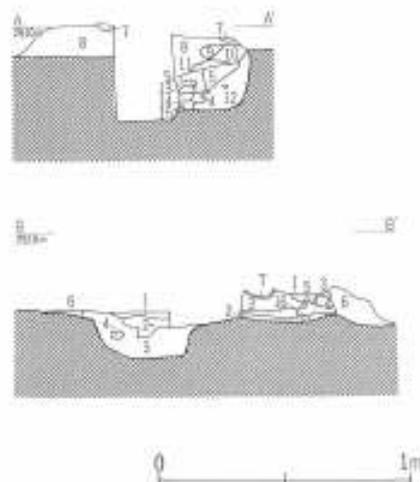
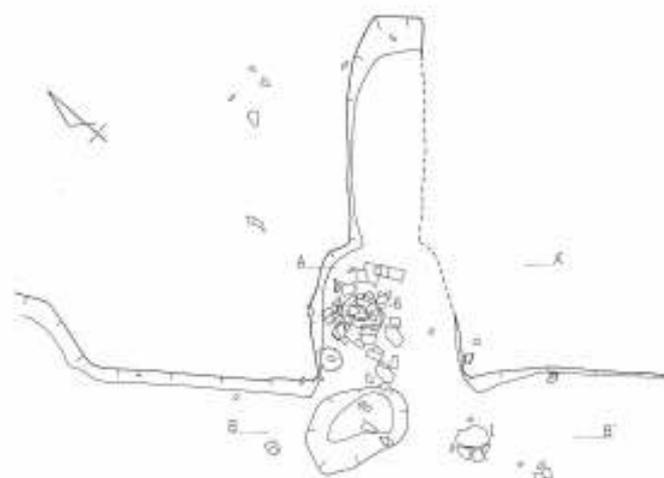
1区の北隅に検出され、南側部分が確認されただけであった。形態は方形と考えられる。縦・横の大きさは不明であるが、深さは26cmであった。カマドは住居跡の東隅につくられ、袖石があった。B-B'断面の土層は、1層が耕作土、2層が青灰色土、3層が茶褐色土、4層が暗褐色土、5層が暗褐色土(火山灰含む)、6層が茶褐色土(土器片含む)、7層が褐色土であった。C-C'断面の土層は、1層が橙褐色土(焼土を含む)、2層が焼土層、3層が褐色土であった。

(出土遺物)

1は土師器羽釜であり、内外面とも黒褐色である。2は土師質土器の坏で、底部は回転糸切り離してある。3・4は須恵器坏であり、4の内面は黒色である。5は土師器甕の底部、6は土師器坏である。7は、カマドの焚き口付近から出土した石であり、8は、カマドの燃焼部南側から検出され、よく磨れている面があり、砥石と考えられる。9はカマドの燃焼部北側にあった片岩である。



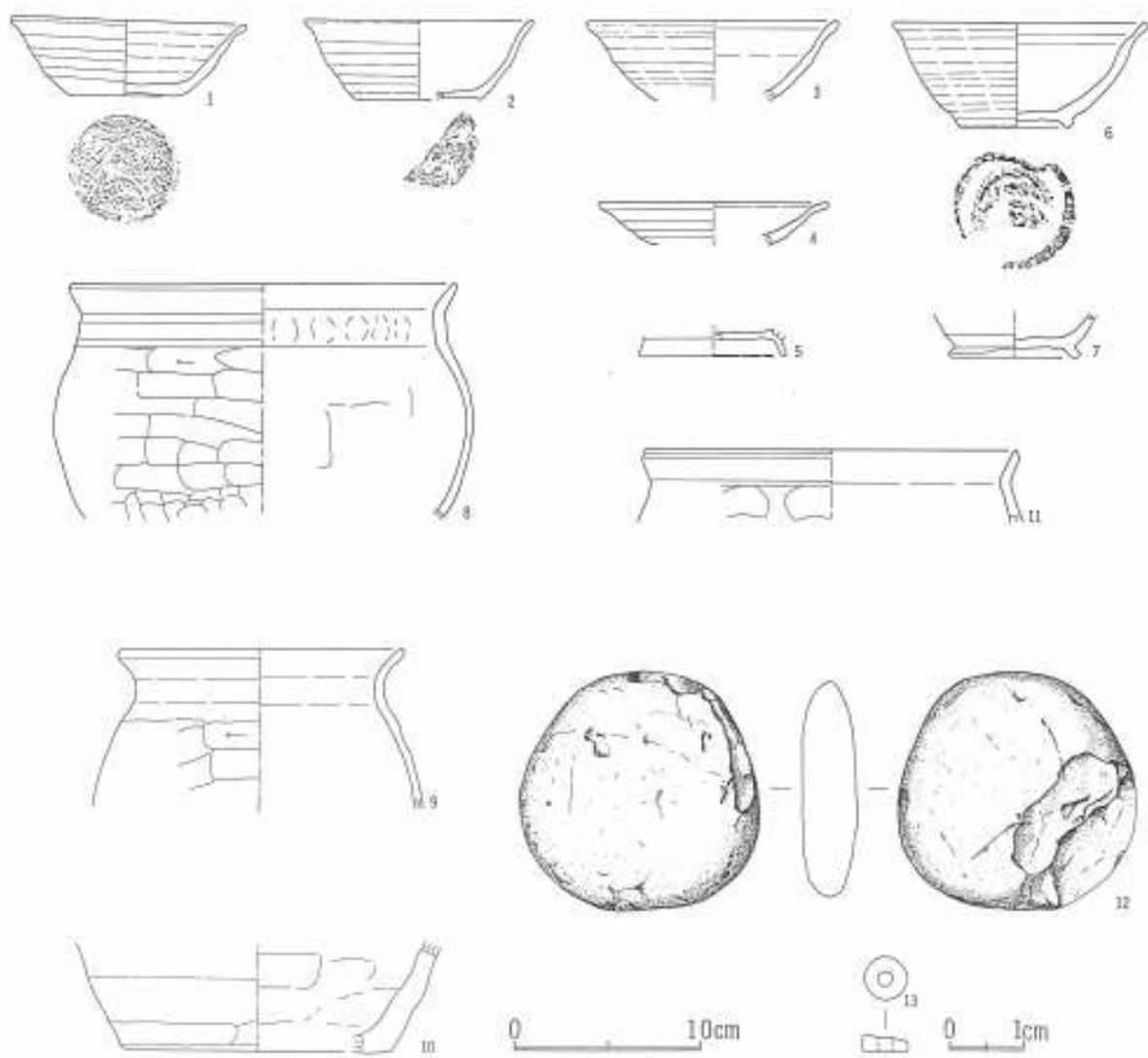
第4図 1号住居跡



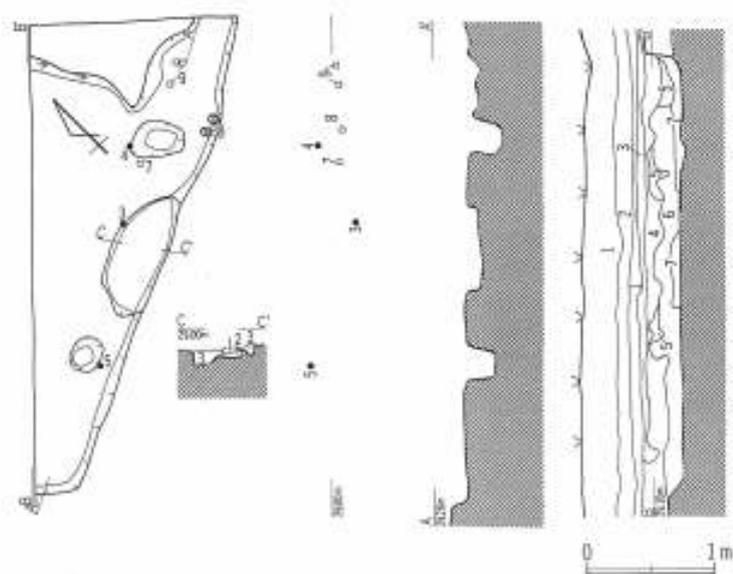
土層注記

1茶褐色土 2黒色土(炭化物・焼土を含む) 3暗茶褐色土(焼土・炭化物を多く含む) 4茶褐色土 5焼土層 6褐色土 7炭化物層 8褐色土(鉄分を多く含む) 9暗褐色土(炭化物を含む) 10暗褐色土(炭化物を含み、9層より暗い) 11褐色土 12暗褐色土(炭化物粒子を含む) 13黒色土(焼土粒子含む) 14暗褐色土 15黒色土 16黄褐色土

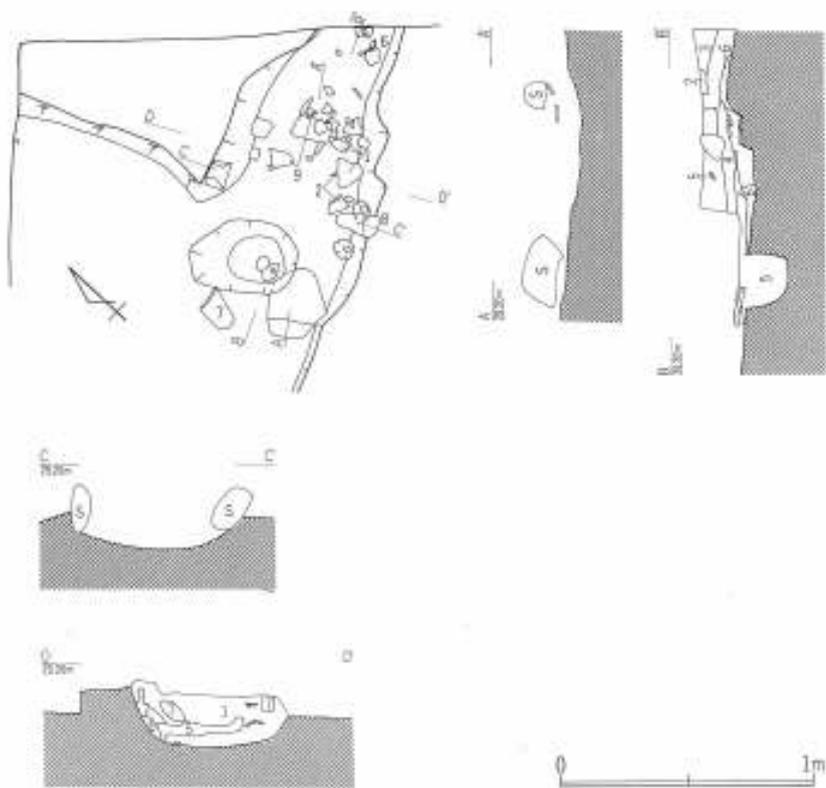
第5図 1号住居跡カマド



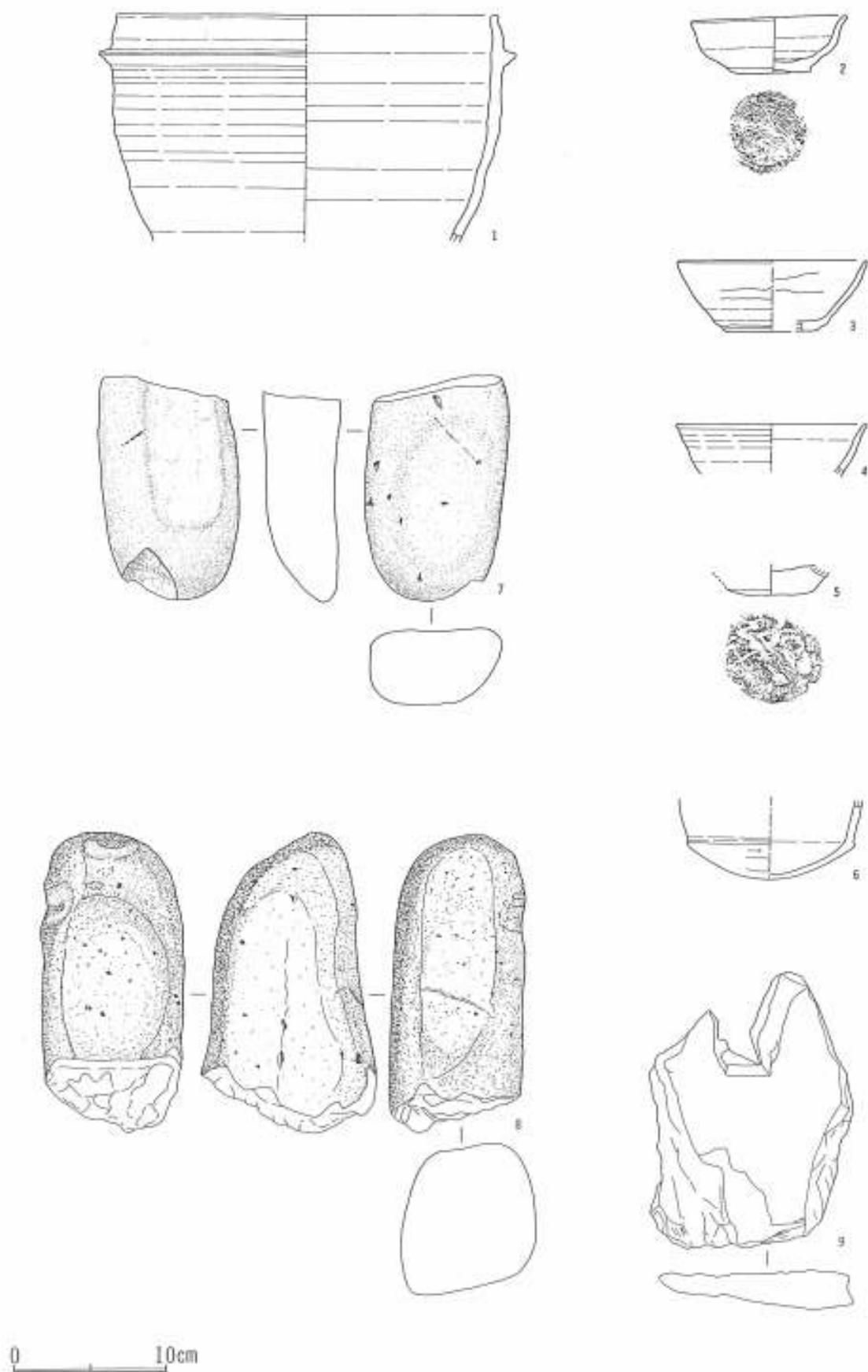
第6圖 1号住居跡出土遺物



第7図 2号住居跡



第8図 2号住居跡カマド



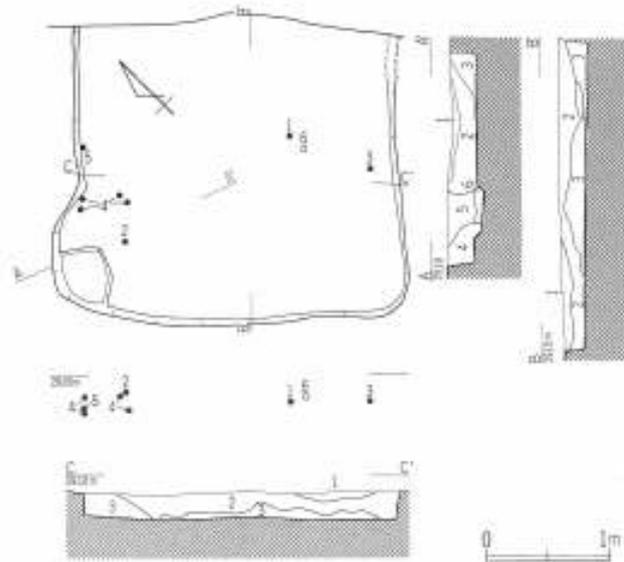
第9圖 2号住居跡出土遺物

3号住居跡 (第10・11図)

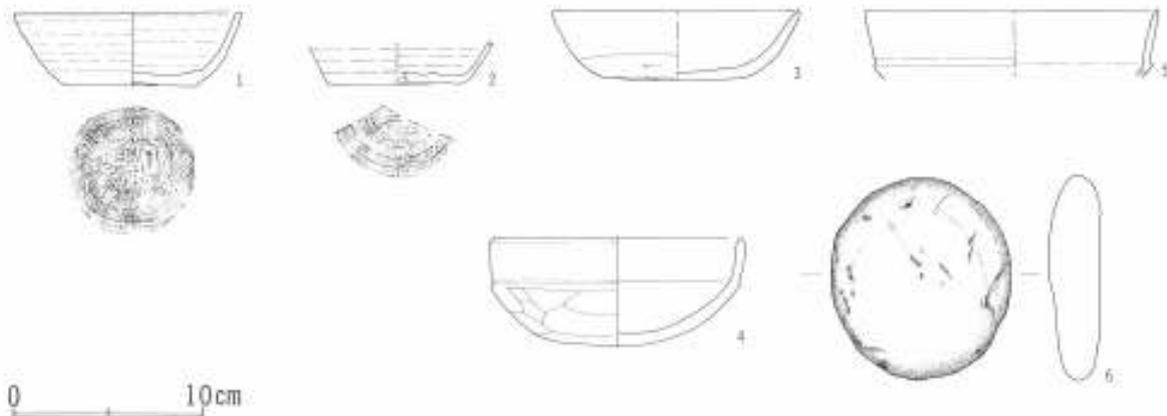
I区の東側で検出され、南西側が確認された。形態は方形と考えられる。南西辺の長さは2.73m、深さは24cmであった。土層は、1層が暗褐色土、2層が褐色土、3層が暗褐色土、4層が黄褐色土、5層が暗褐色土(3層より明るい)、6層が暗褐色土(5層より暗い)、7層が茶褐色土(炭化物を含む)であった。

(出土遺物)

1・2は須恵器杯であり、底部は回転糸切りの後、外周が回転ヘラ削りされている。1には窯印(十)がある。3から5は土師器杯であり、4・5は口縁部と体部の境に稜をもつものである。6は、扁平な石である。



第10図 3号住居跡

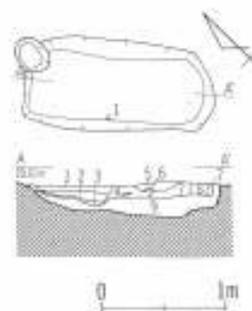


第11図 3号住居跡出土遺物

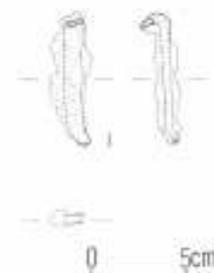
(2) 土坑

1号土坑 (第12・13図)

I区のほぼ中央で検出され、形態は長方形である。長辺の長さは1.53m、短辺の長さは74cm、深さは28cmであった。土層は、1層が褐色土、2層が黒色土(炭化物層)、3層が褐色土(1層より明るい)、4層が黒色土(土師器片・炭化物・焼土粒子を含む)、5層が褐色土、6層が焼土、7層



第12図 1号土坑



第13図 1号土坑出土遺物

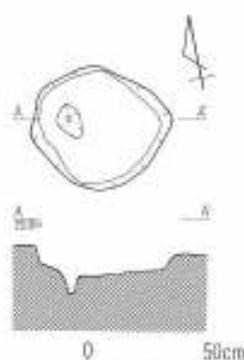
が褐色土（5層より明るい）、8層が暗褐色土であった。

（出土遺物）

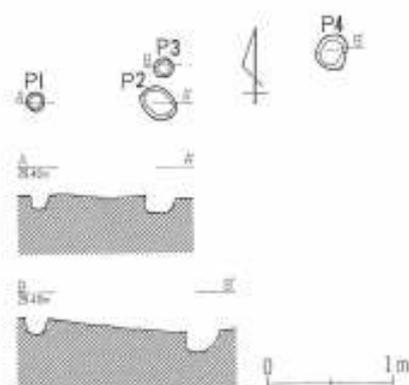
鉄釘が出土し、長さは7cm、幅は0.9cm、厚さは0.5cmである。

2号土坑（第14図）

1区の南隅で検出され、形態は不整形円形である。A-A'断面の径は55cm、深さは12cmであった。底面の東側に長径14cm・深さ0.7cmの小ピットがあった。



第14図 2号土坑



第15図 1～4号ピット

（3）ピット

1号ピット（第15図）

1区の西側で検出され、形態は円形である。径は14cm、深さは11cmであった。

2号ピット（第15図）

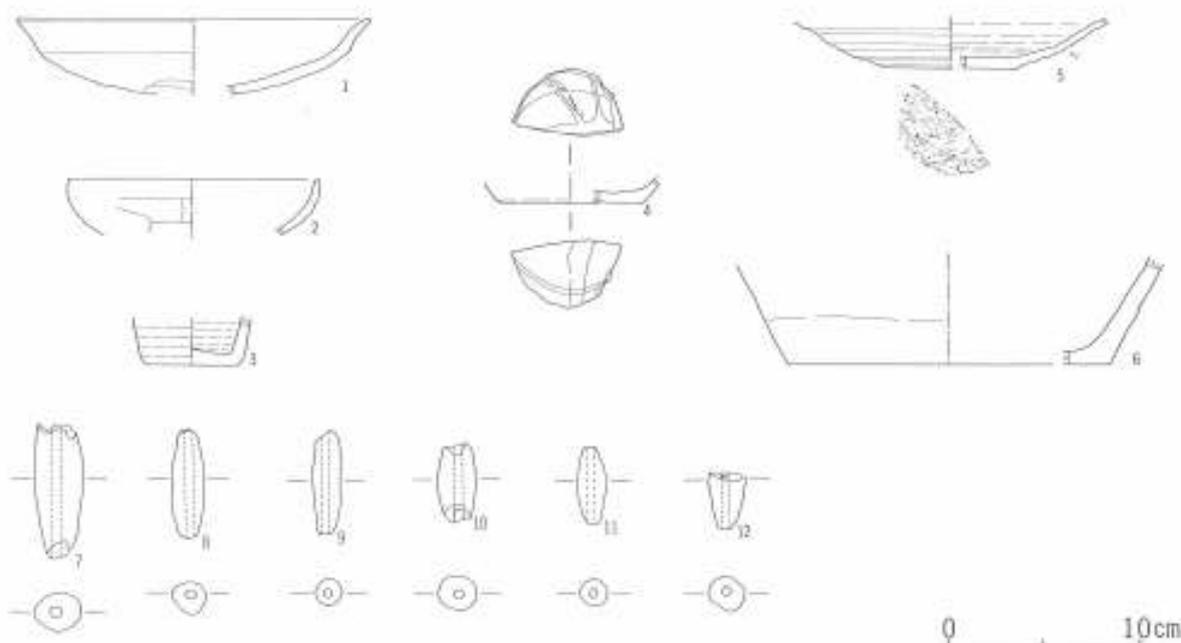
1号ピットの東75cmの位置で検出され、形態は隅丸長方形である。長径は30cm、短径は24cm、深さは14cmであった。

3号ピット（第15図）

2号ピットの北側で検出され、形態は円形である。径は15cm、深さは13cmであった。

4号ピット（第15図）

3号ピットの東1.12mの位置で検出され、形態は隅丸長方形である。長径は29cm、短径は24cm、深さは16cmであった。



第16図 I区遺構外出土遺物

(4) 遺構外出土遺物 (第16図)

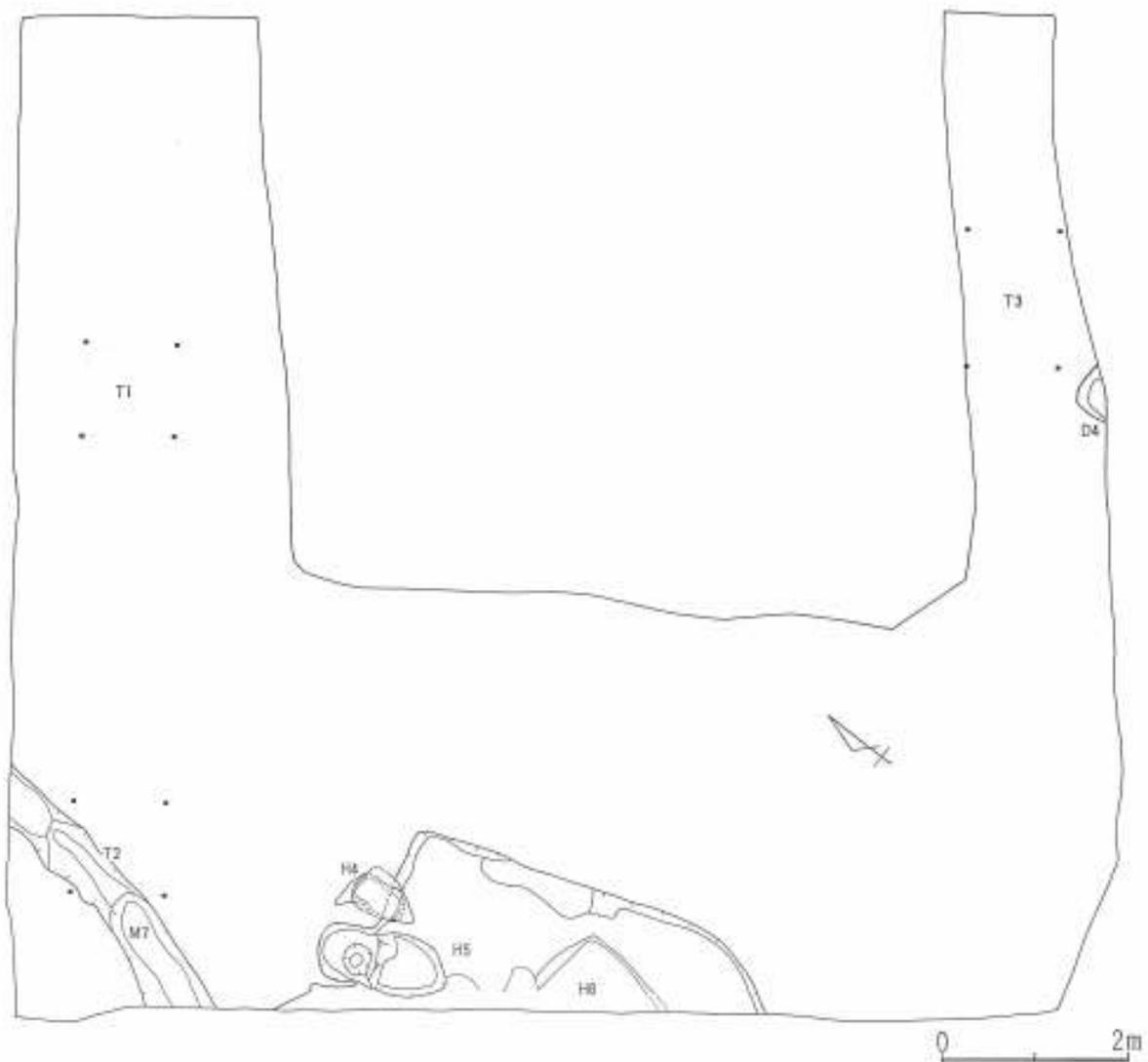
1・2は土師器坏、3は須恵器壺の底部で回転ヘラ削りされている。4は須恵器坏の底部、5は須恵器皿の底部で回転糸切り離しである。6は須恵器甕の底部で、7～12は土錘である。

II区

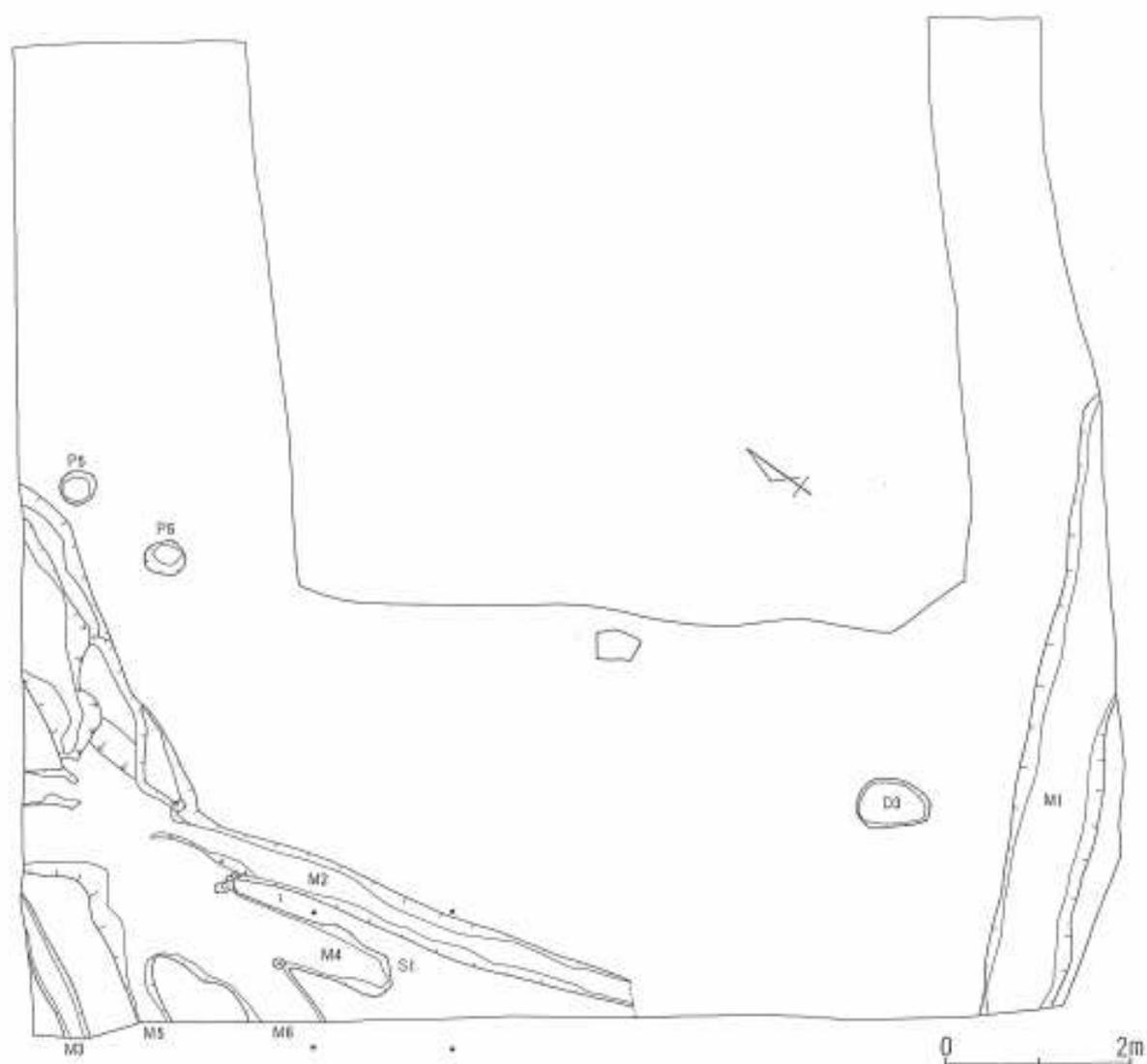
(1) 住居跡

4号住居跡 (第19・20図)

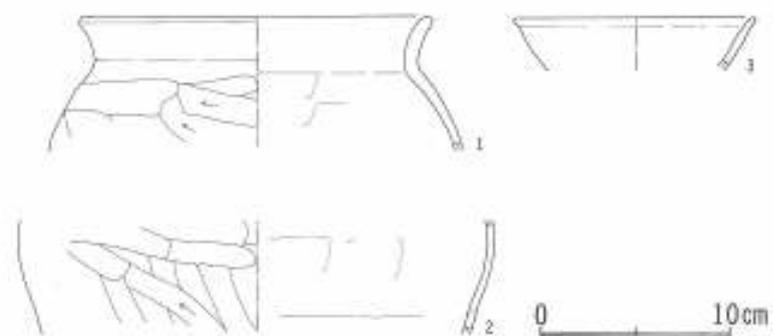
II区の東側に検出され、5・6号住居跡と重なり合っていた。カマドと考えられる焼土が検出され、東壁の断面観察によって確認された。B-B'断面の長さは2.5m、深さは20cmであった。土層は、A-A'断面は1層が焼土、2層が黒色土(灰層)であり、B-B'断面は1層が暗褐色土、2層が暗黄褐色土、3層が暗褐色土(暗黄褐色土を含む)、4層が暗褐色土(1層より明るい)である。



第17図 II区全測図(1)



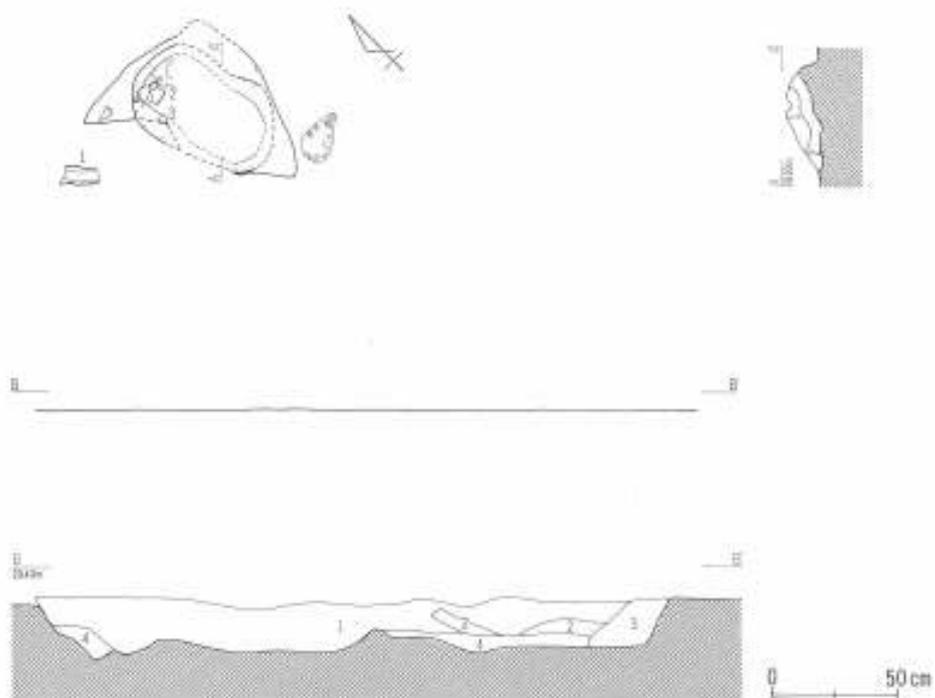
第18図 II区全測図(2)



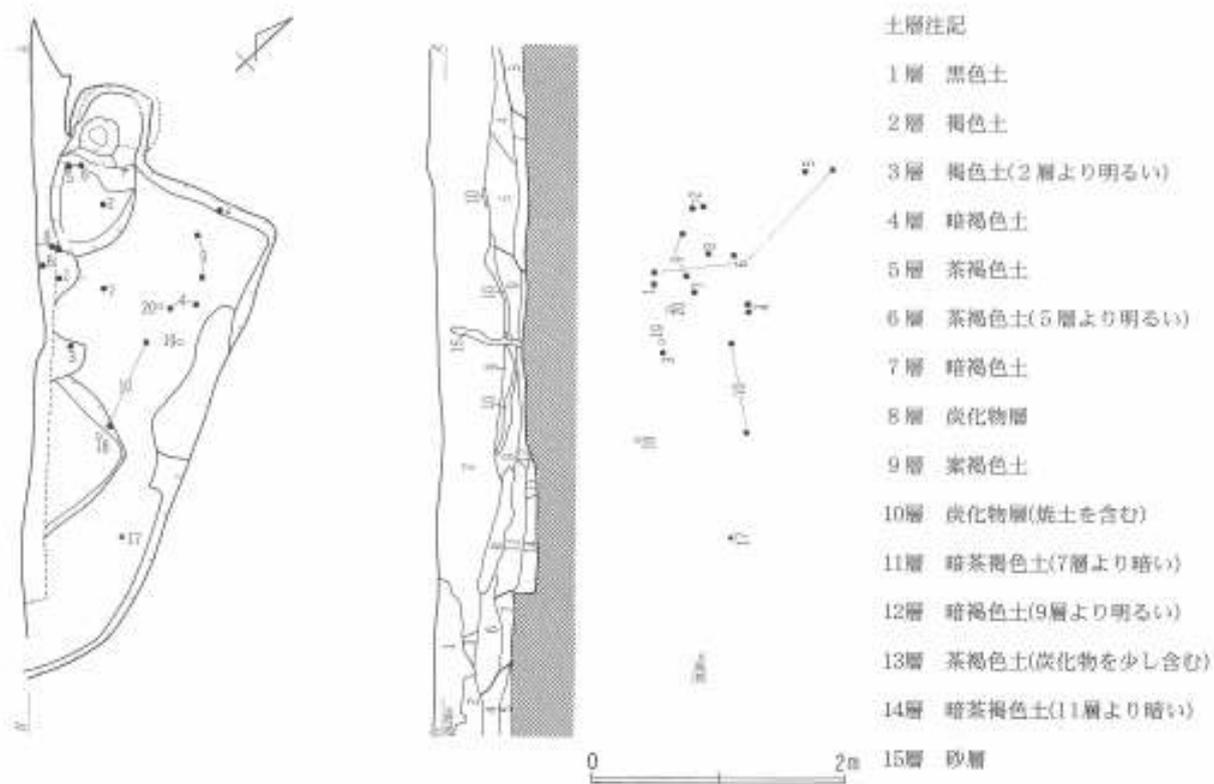
第19図 4号住居跡出土遺物

(出土遺物)

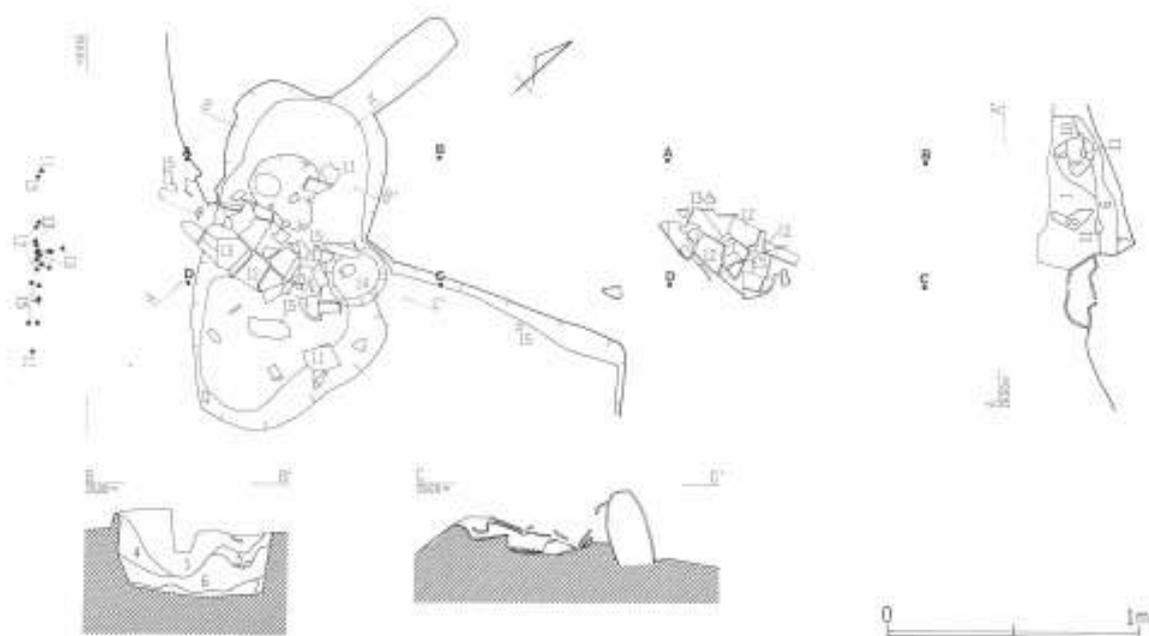
1・2は土師器甕であり、1は口縁と胴上部であり、2は胴部である。3は須恵器坏である。



第20図 4号住居跡



第21図 5・6号住居跡



土層注記

1層 茶褐色土 2層 茶褐色土 3層 焼土層 4層 茶褐色土 5層 暗茶褐色土層 6層 灰層 7層 黄褐色土層
8層 灰褐色土層 9層 灰褐色土 10層 黄褐色土層 11層 焼土ブロック

第22図 5号住居跡カマド

5号住居跡 (第21～24図)

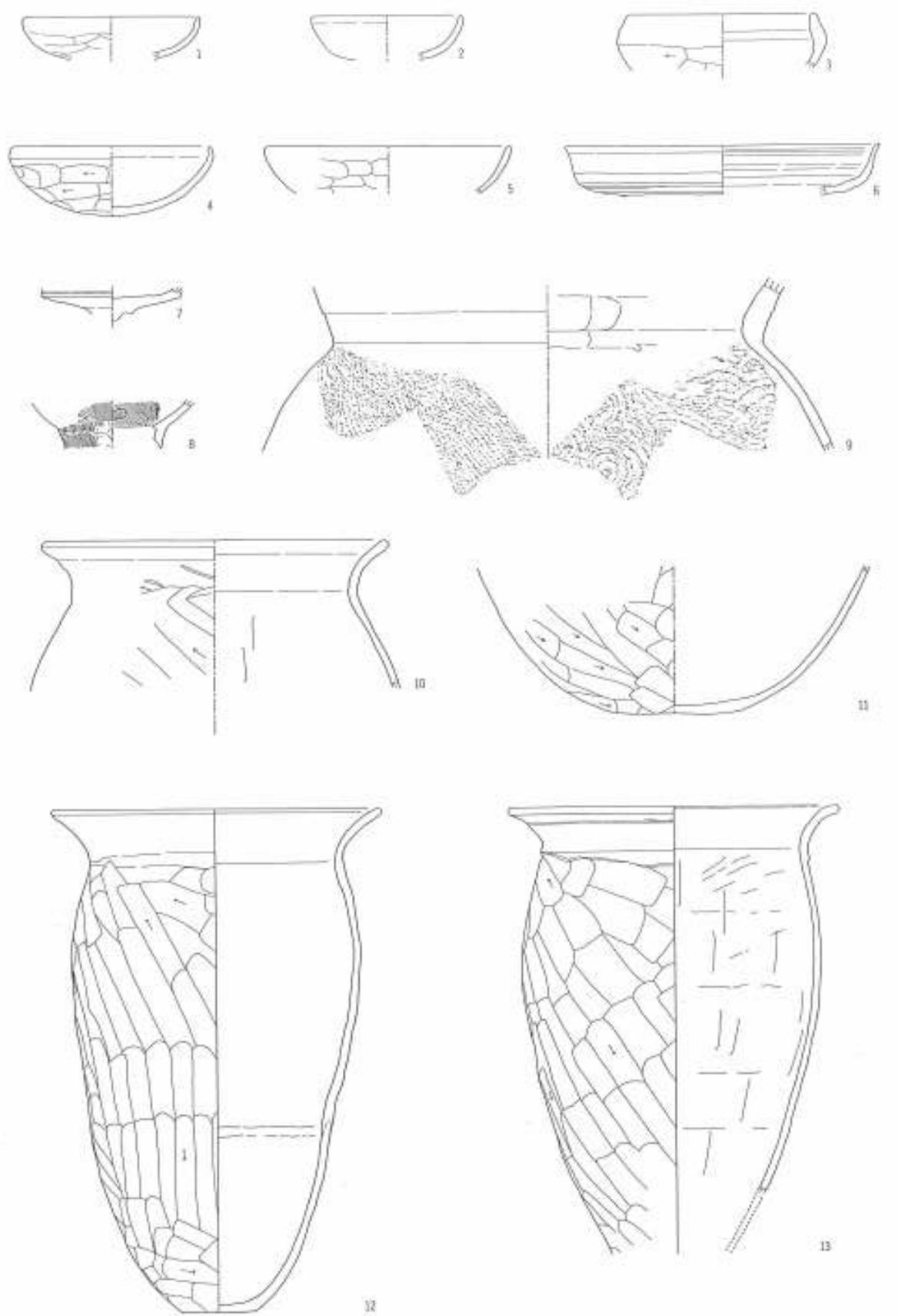
4号住居跡の下層から検出され、住居跡の東側が確認された。形態は方形と考えられ、東辺の長さは4.2m、深さは26cmであった。カマドの両袖には、土師器甕が2点ずつ置かれてあったと考えられる。土層は、1層が暗褐色土、2層が褐色土、3層が暗褐色土、4層が黄褐色土、5層が暗褐色土（3層より明るい）、6層が暗褐色土（5層より暗い）、7層が茶褐色土（炭化物を含む）であった。

(出土遺物)

1～5は土師器坏、6は須恵器坏、7は土師器高坏の坏底部、8は土師器台付甕の底部である。9は須恵器甕、10～16は土師器甕である。12～14は長胴甕であり、カマドの袖部から出土している。15は小型の台付甕と考えられる。17は鉄滓、19・20は土鍾である。

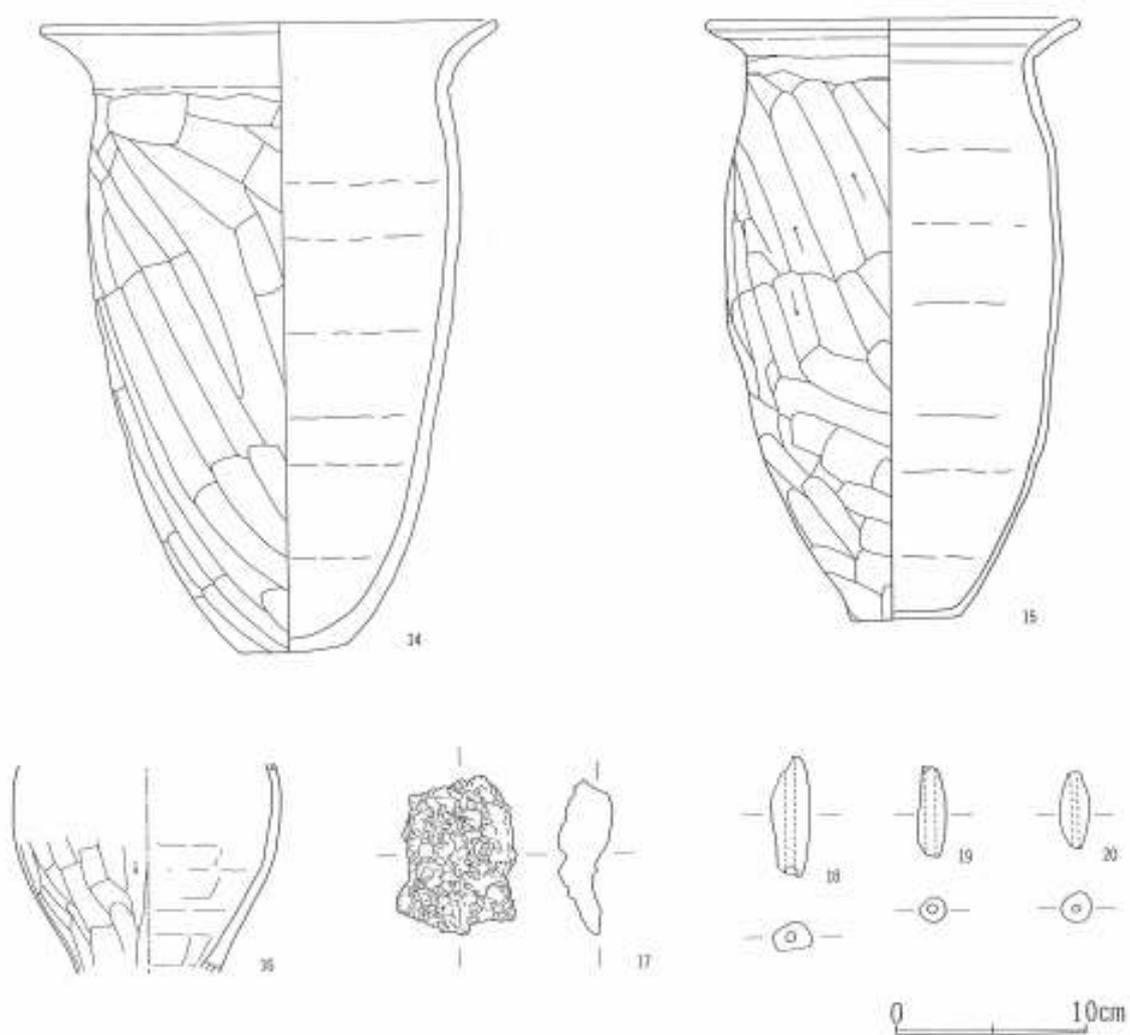


5号住居跡カマド遺物出土状態



0 10cm

第23图 5号住居跡出土遺物(1)



第24图 5号住居跡出土遺物(2)・6号住居跡出土遺物

6号住居跡（第21・24図）

5号住居跡の南側で検出され、東隅が確認されただけであった。5号住居跡を切ってつくられていた。大きさは、深さが深い位置で45cmであった。

（出土遺物）

土鍾⁸が、覆土上部で検出されただけであった。

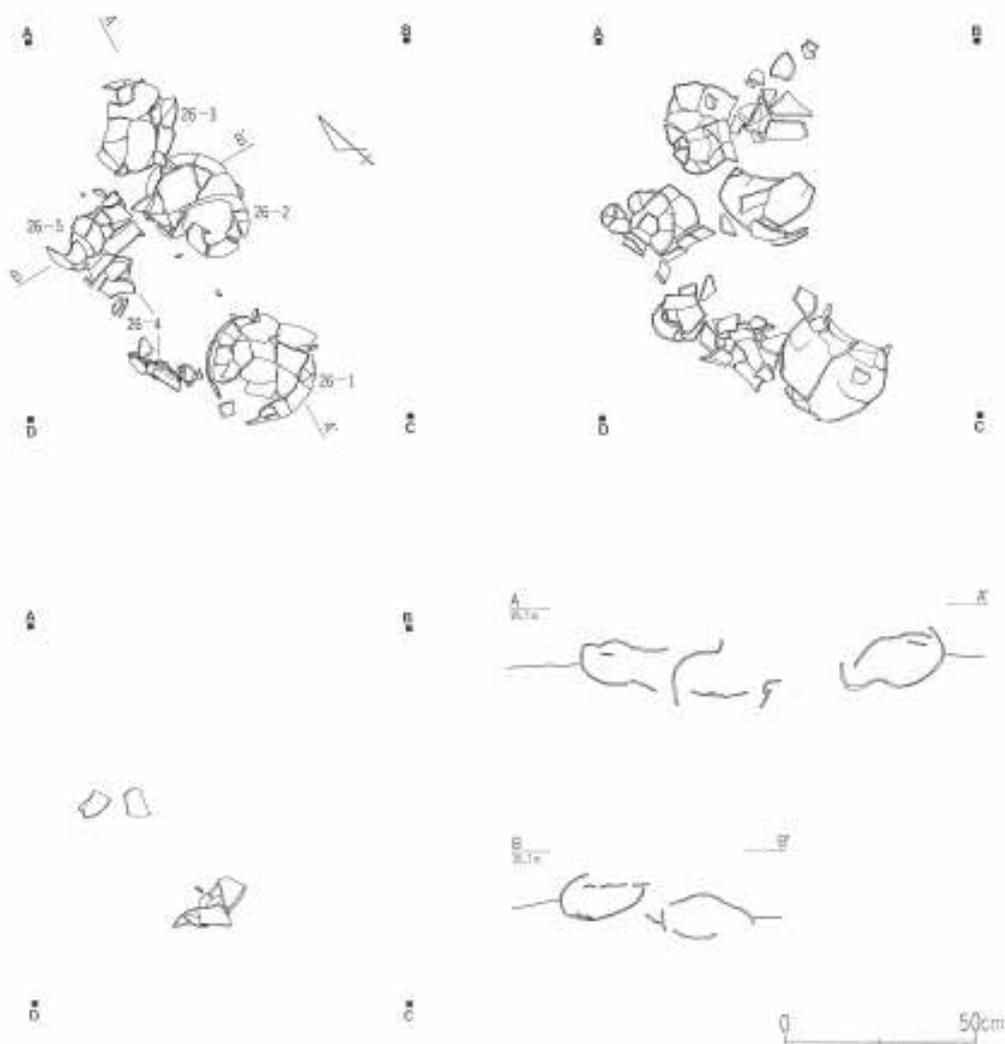
（2）土器集中遺構

1号土器集中遺構（第25・26図）

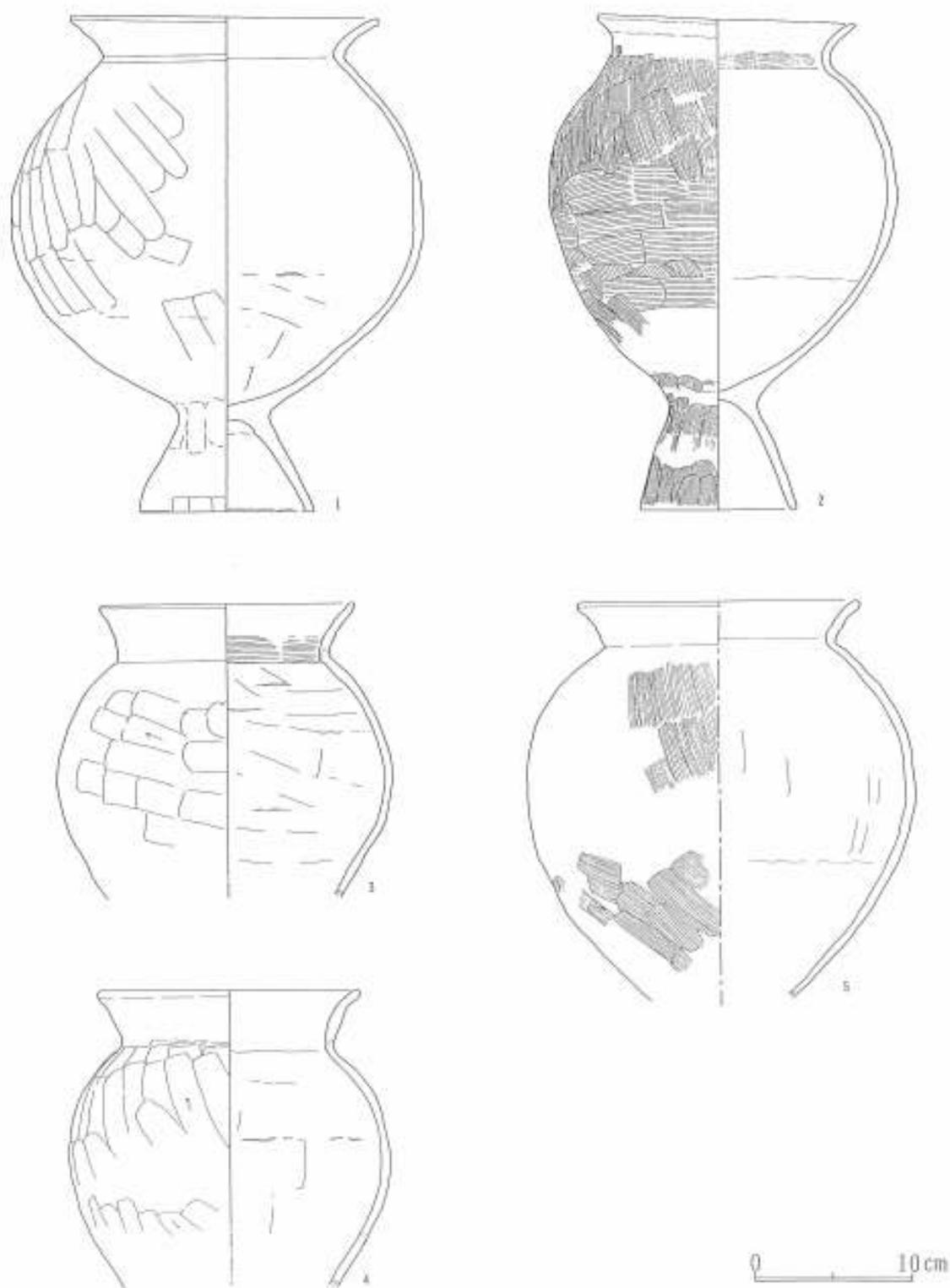
II区の北側に位置し、5号溝の東側で台付甕がまとまって5点検出された。

（出土遺物）

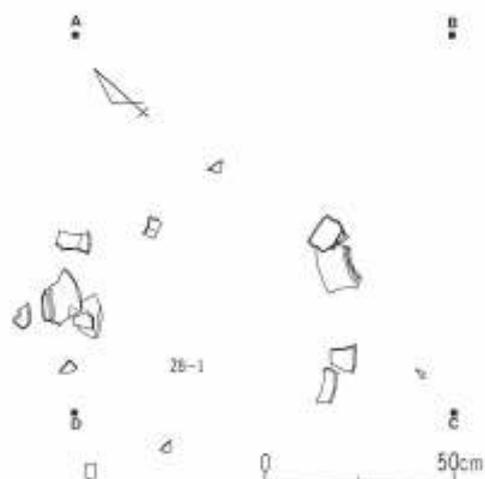
1～5は土師器台付甕であり、1・3・4は外面が篋ナデ、2と5は刷毛整形である。



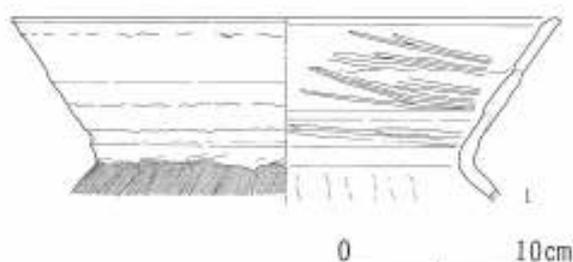
第25図 1号土器集中遺構



第26图 1号土器集中遺構出土遺物



第27図 2号土器集中遺構



第28図 2号土器集中遺構出土遺物

2号土器集中遺構 (第27・28図)

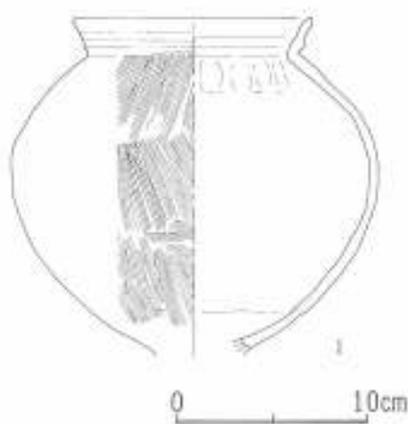
1号集石遺構の南西に位置し、甕の破片がまとまって検出された。

(出土遺物)

1は、土師器甕の口縁部であり、S字状口縁であるが、口縁部の長さが他のS字状口縁より長いものである。



第29図 3号土器集中遺構



第30図 3号土器集中遺構出土遺物

3号土器集中遺構 (第29・30図)

II区の東側に位置し、1号溝の北側で台付甕の破片がまとまって検出された。

(出土遺物)

1は、土師器台付甕であり、口縁部はS字状口縁である。

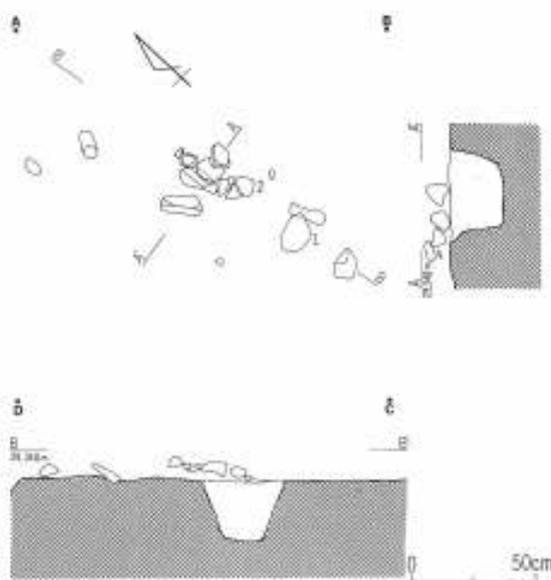
(3) 配石遺構

1号配石遺構 (第31・32図)

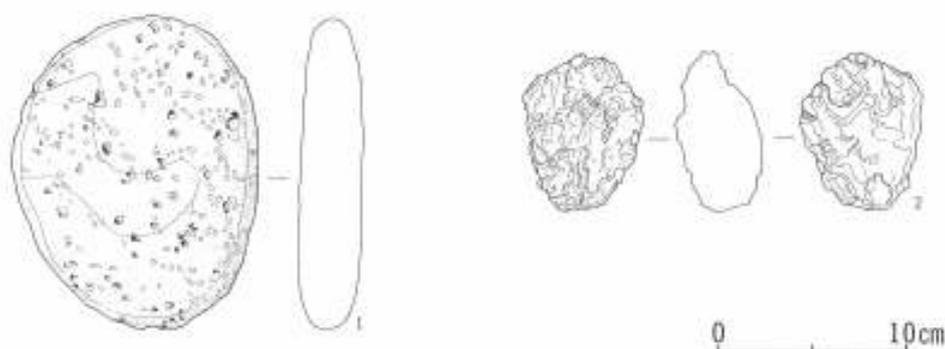
Ⅱ区の東側に位置し、4号溝の上層で検出された。南北方向に川原石が集中して16点の石と、1点の鉄滓が検出された。16点の内、6点の石が焼けていた。

(出土遺物)

1は扁平な石で、焼けて煤けていた。2は鉄滓である。



第31図 1号配石遺構



第32図 1号配石遺構出土遺物

(4) 溝跡

1号溝跡 (第33・34図)

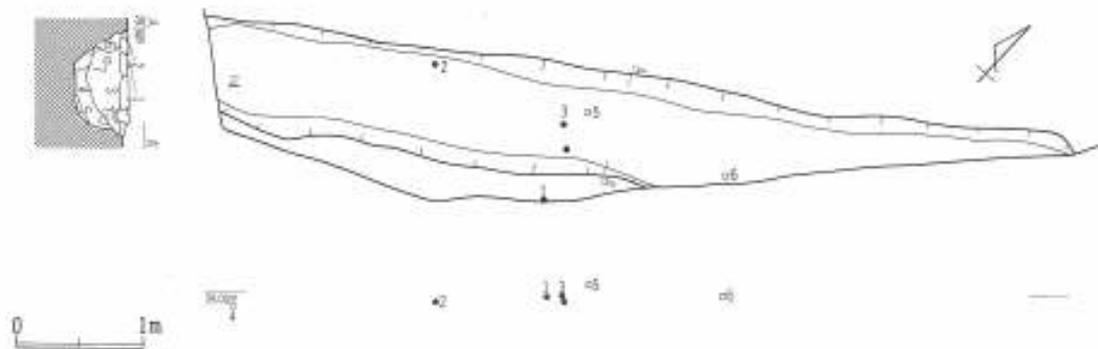
Ⅱ区の南側に位置し、南西-北東方向で走っていた。上幅85cm、下幅35cm、深さ43cmであった。土層は、1層が褐色土、2層が暗褐色土、3層が暗褐色土(2層より暗い)、4層が暗褐色土(黄褐色粒子を含む)、5層が暗褐色土、6層が黄褐色土、7層が褐色土である。

(出土遺物)

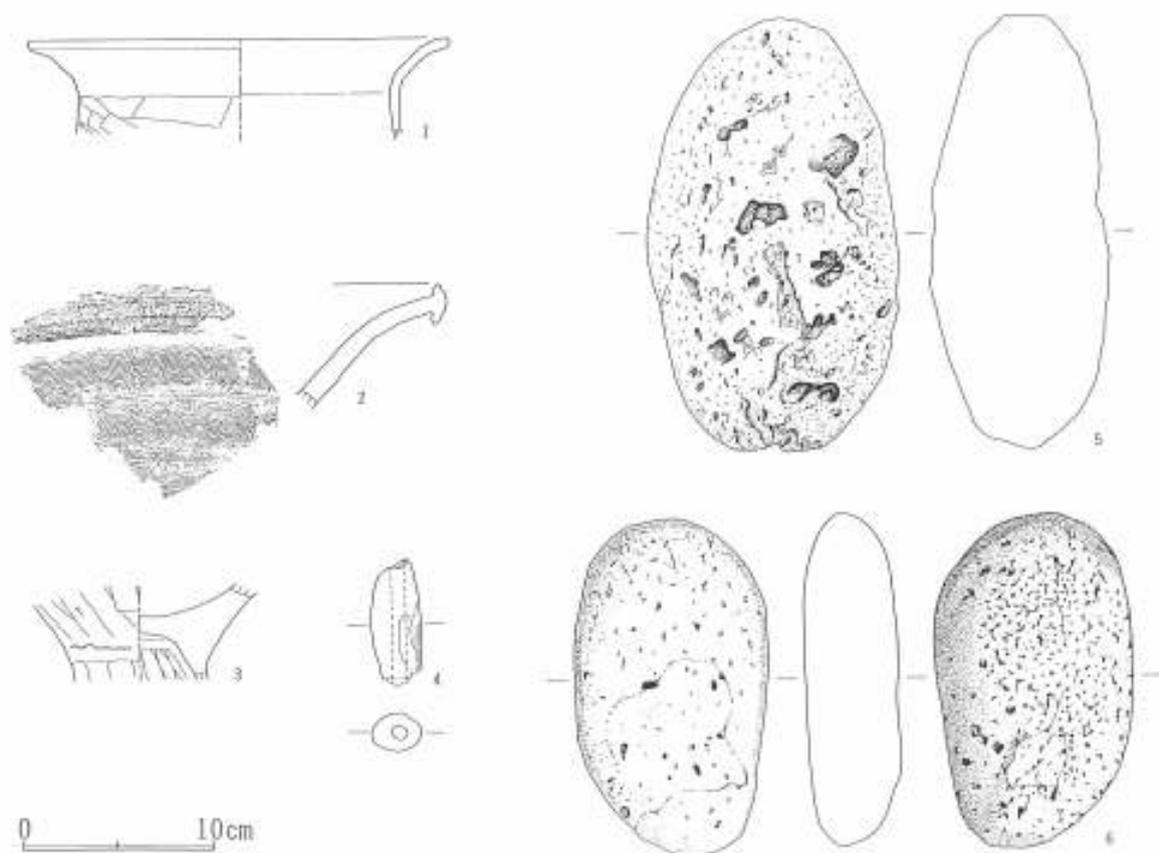
1・3は土師器甕であり、1は長胴甕の口縁部、3は台付甕の底部である。2は須恵器甕の口縁部で、外面に櫛書きの波状文と横位の沈線文が交互に施文されている。4は土錘、5は軽石、6は扁平な石で、煤が付着している。

2号溝跡 (第35~38図)

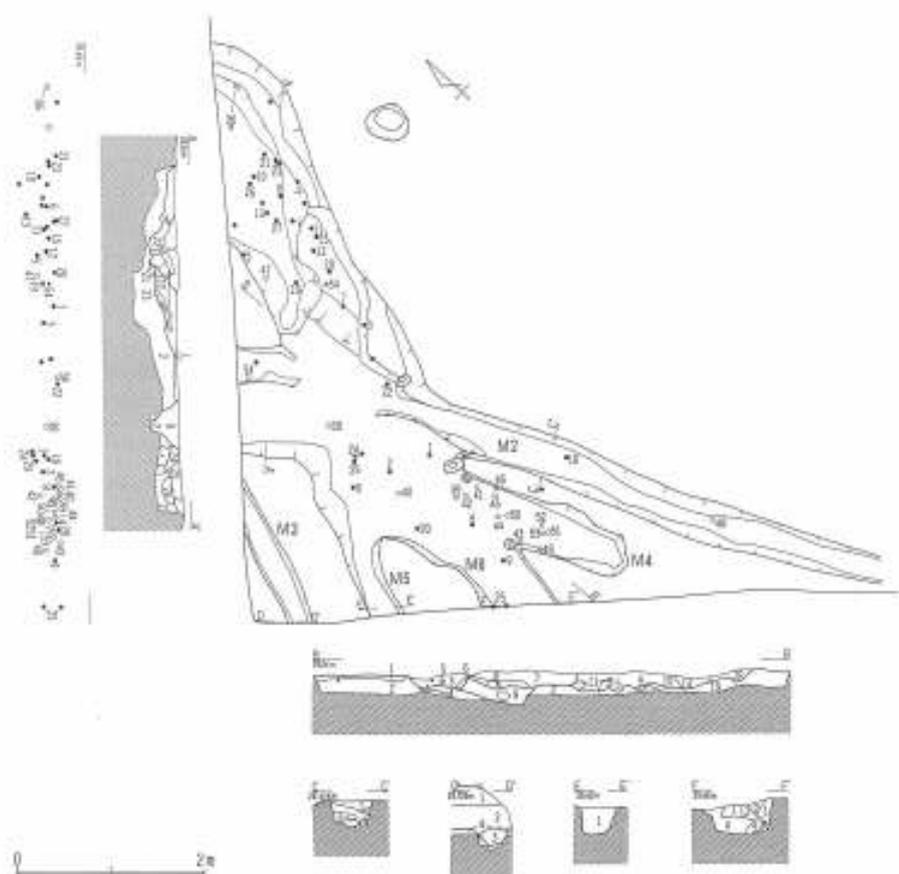
Ⅱ区の東側に位置し、4~6号溝と重なり合っていて、南東-北西方向で走っていた。C-C'断面で、



第33图 1号沟跡



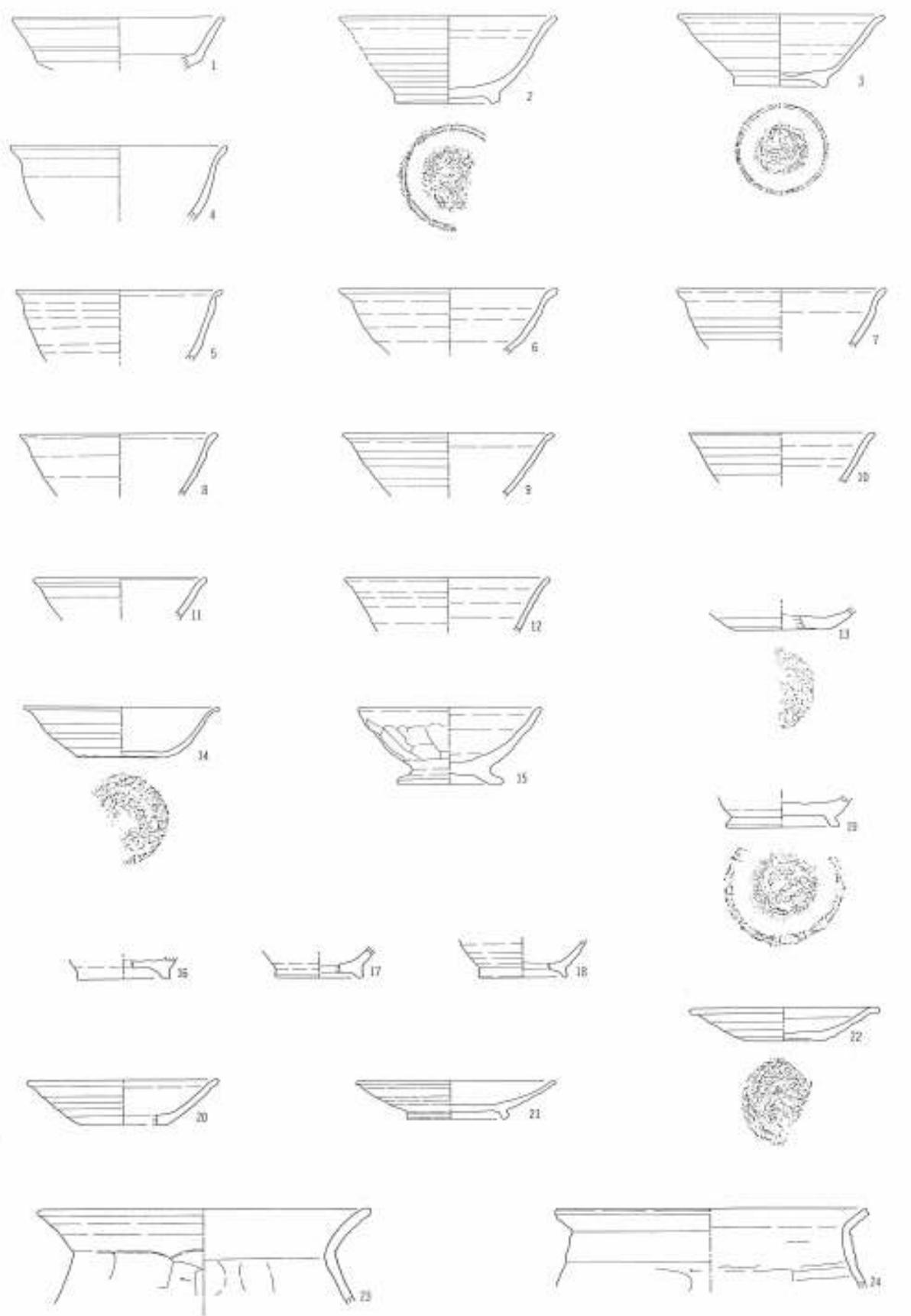
第34图 1号沟跡出土遺物



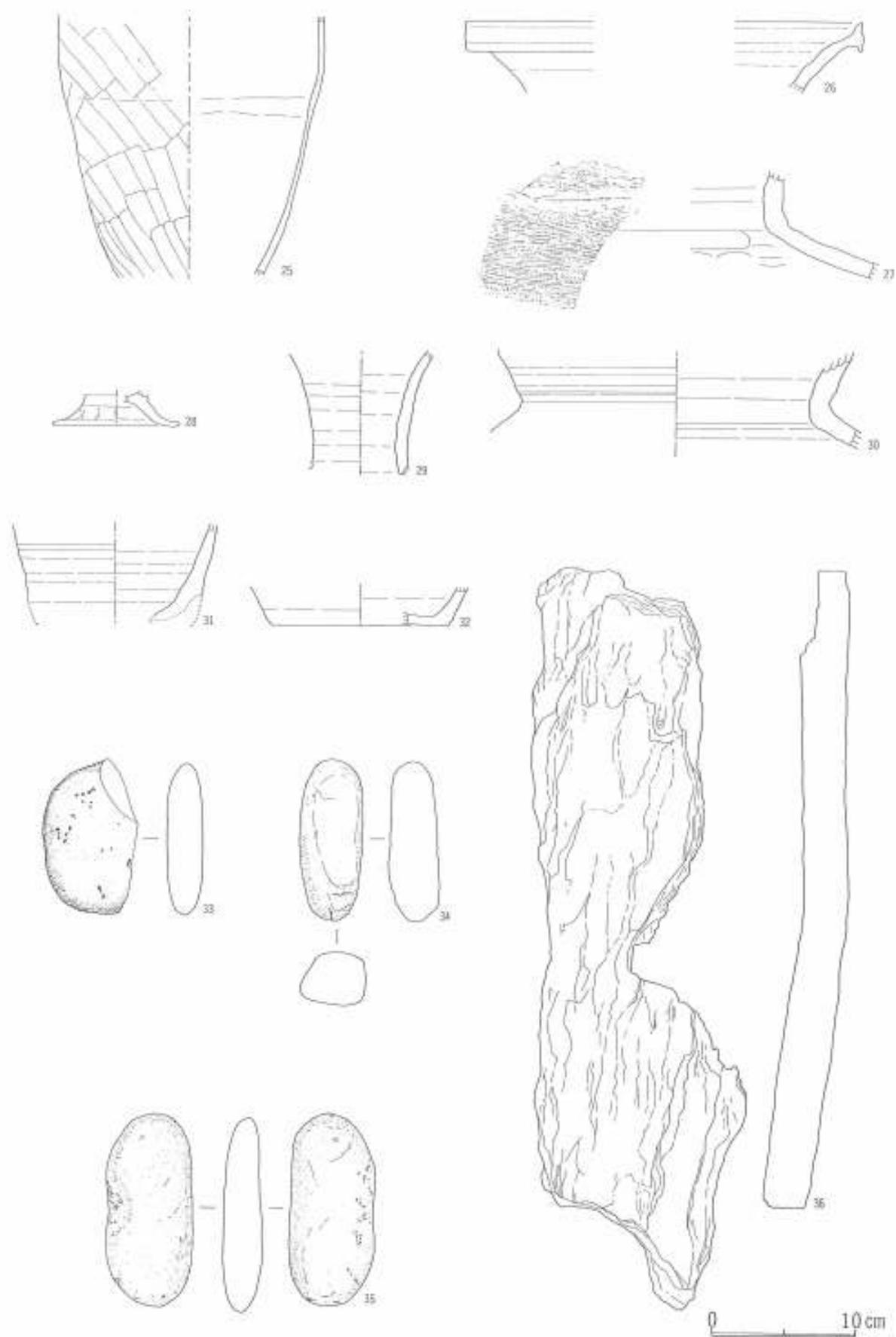
2～6号溝跡A-A'断面、B-B'断面土層注記

1層 暗褐色土(炭化物を含む) 2層 褐色土 3層 暗褐色土(火山灰を含む) 4層 黄褐色土 5層 黒色土(炭化物を含む)
 6層 黄褐色土 7層 暗褐色土(黄色土粒子・火山灰を含み、3層より明るい) 8層 褐色土(火山灰を含む) 9層 暗褐色土(火山灰を含む) 10層 暗褐色土(橙色土粒子・火山灰を含む) 11層 黄色土 12層 黄褐色土 13層 褐色土 14層 黒色土(黄色土粒子を含む) 15層 暗褐色土(橙色土粒子を含み、3層より明るい) 16層 黒色土 17層 茶褐色土 18層 暗褐色土(色調は10層に近似するが、混入物は少ない) 19層 暗黄褐色土 20層 暗褐色土(色調は10層に近似するが、混入物はない) 21層 黒色土(橙色土粒子を含む) 22層 褐色土(橙色土粒子・炭化物を含む) 23層 黒色土(炭化物を多く含む) 24層 暗褐色土 25層 暗褐色土(色調は24層より暗い)

第35図 2～6号溝跡



第36图 2~6号沟出土遗物(1)



第37图 2~6号溝跡出土遺物(2)

上幅43cm、下幅31cm、深さは30cmであり、土層は、1層が黄褐色土（白色粒子を多く含む）、2層が暗褐色土、3層が黄褐色土であった。

（出土遺物）

18は須恵器高台付坏、22は須恵器皿で底部は回転糸切り離し、34は編み物石状の石、48は土鍾である。

3号溝跡（第35図）

II区の東隅に位置し、ほぼ南北方向で検出された。D-D'断面で、上幅37cm、下幅14cm、深さ19cmであり、土層は、1層が耕作土、2層が青褐色土、3層が暗褐色土、4層が褐色土であった。

4～6号溝跡（第35～38図）

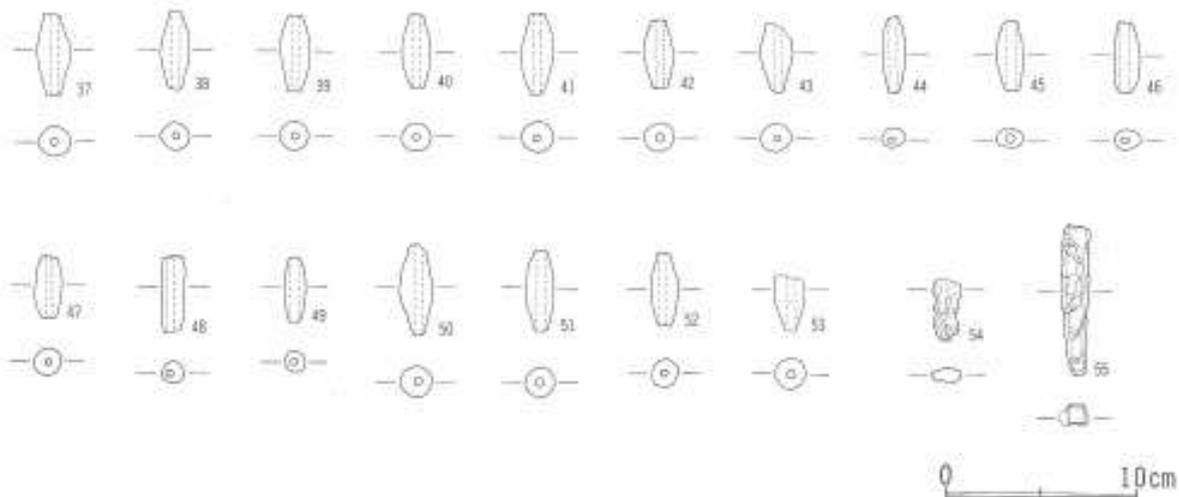
2号溝と重なっていて、4号溝は2号溝と平行に走っていて、5・6号溝は3号溝と平行に走っていた。4号溝は上幅55cm、下幅42cm、深さ22cmであった。5号溝は、E-E'断面で、上幅37cm、下幅26cm、深さ27cm、土層は、1層が褐色土（焼土、炭化物を含む）であった。6号溝は、F-F'断面で、上幅73cm、下幅55cm、深さ37cm、土層は1層は暗黄褐色土、2層は暗褐色土、3層は暗褐色土（火山灰を含む）、4層は黒色土、5層は暗褐色土、6層は褐色土、7層は黄褐色土であった。

（出土遺物）

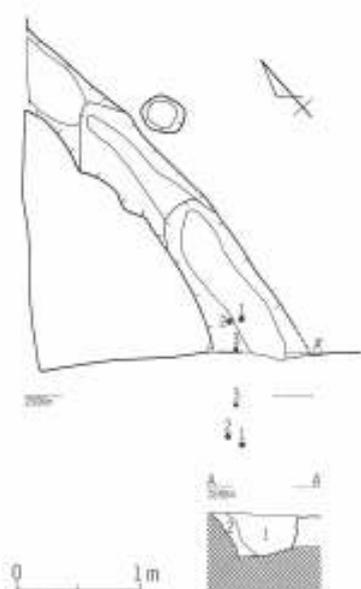
4号溝からは、土鍾（41、43、44、45、49、50、51、52、53）が出土した。5・6号溝から出土した遺物を下記に記す。

1は土師器坏、2・3・15～17・19は須恵器高台付坏、4～14・20は須恵器坏である。13は底部が回転糸切り離しである。20は須恵器皿で、底部は回転糸切り離しである。21は灰釉陶器高台付皿である。23～25は土師器甕の口縁部であり、26・27・30は須恵器甕の口縁部、28は土師器台付甕の台部である。29は須恵器長頸瓶の口縁部、31は須恵器鉢の底部、32は須恵器甕の底部である。

33・35は編み物石状の石で、33は煤けて黒い。36は片岩であり、37～40・42・46～48は土鍾、54・55は鉄釘である。



第38図 2～6号溝跡出土遺物(3)



第39図 7号溝跡



第40図 7号溝跡出土遺物

7号溝跡 (第39・40図)

2・4・5・6号溝の下層から検出され、主軸はほぼ南北方向に検出された。A-A'断面で、上幅69cm、下幅43cm、深さは35cmであり、土層は、1層が灰褐色土、2層が橙褐色土あった。

(出土遺物)

1・2は土師器高杯の坏部である。3は鉄釘である。

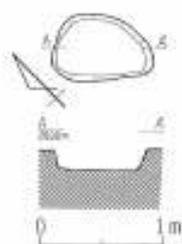
(5) 土坑

3号土坑 (第41・42図)

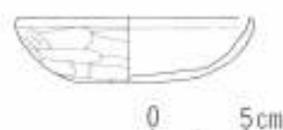
II区の南側に位置し、1号溝の北側で検出された。隅丸台形を呈し、長軸の長さは80cm、深さは16cmであった。

(出土遺物)

土師器坏が出土した。



第41図 3号土坑



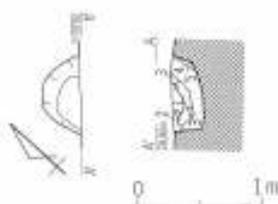
第42図 3号土坑出土遺物

4号土坑 (第43図)

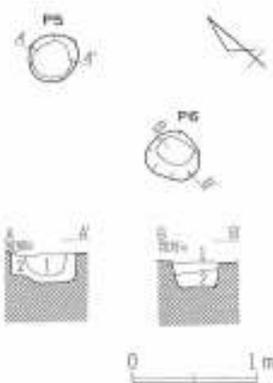
II区の南側に位置し、1号溝の北側で一部が検出されただけであった。A-A'断面で、深さは16cmであった。土層は、1層が茶褐色土、2層が暗茶褐色土、3層が暗灰色土(灰を含む)、4層が暗茶褐色土(2層より明るい)、5層が暗褐色土であった。

(出土遺物)

土師器坏が出土した。



第43図 4号土坑

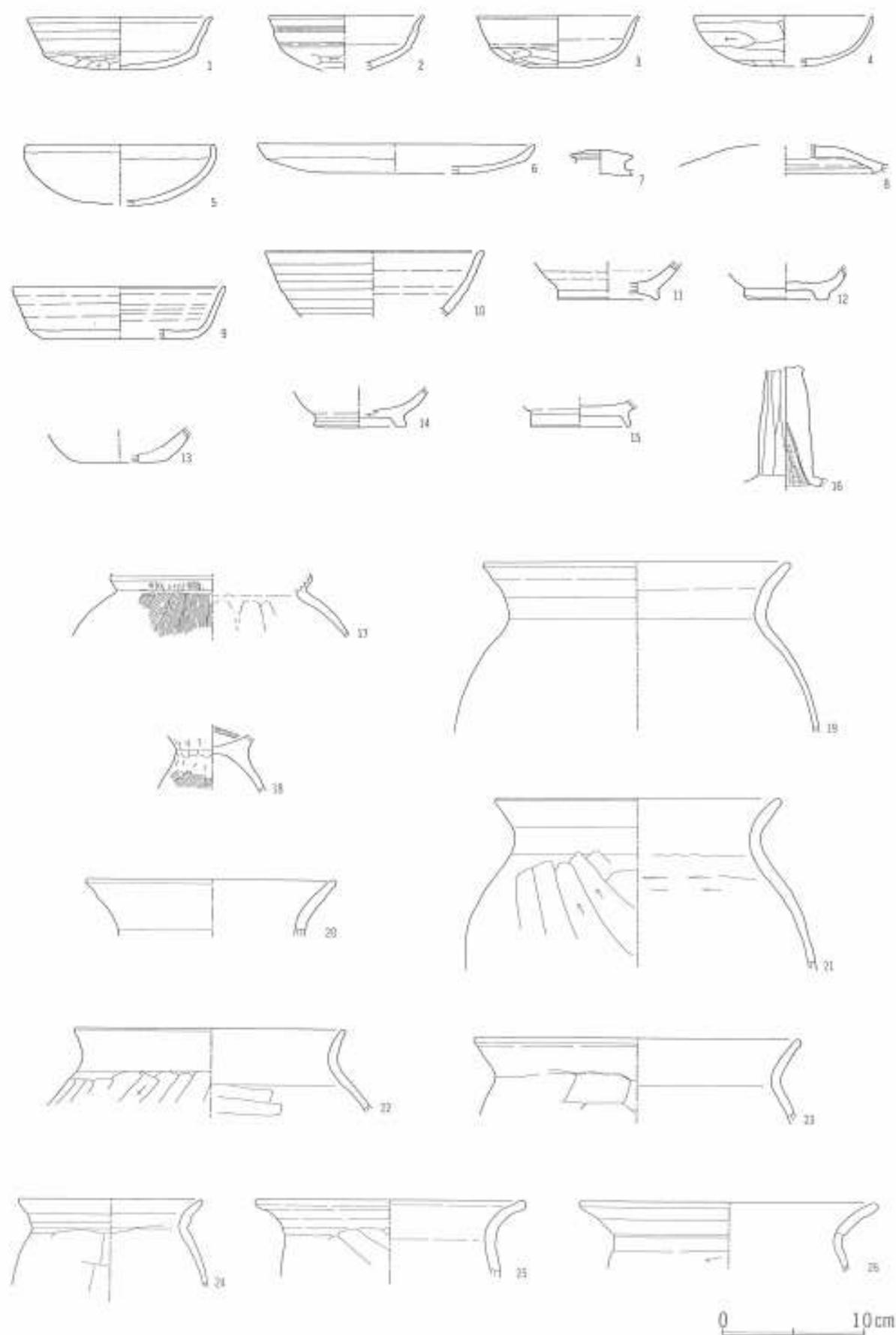


第44図 5・6号ピット

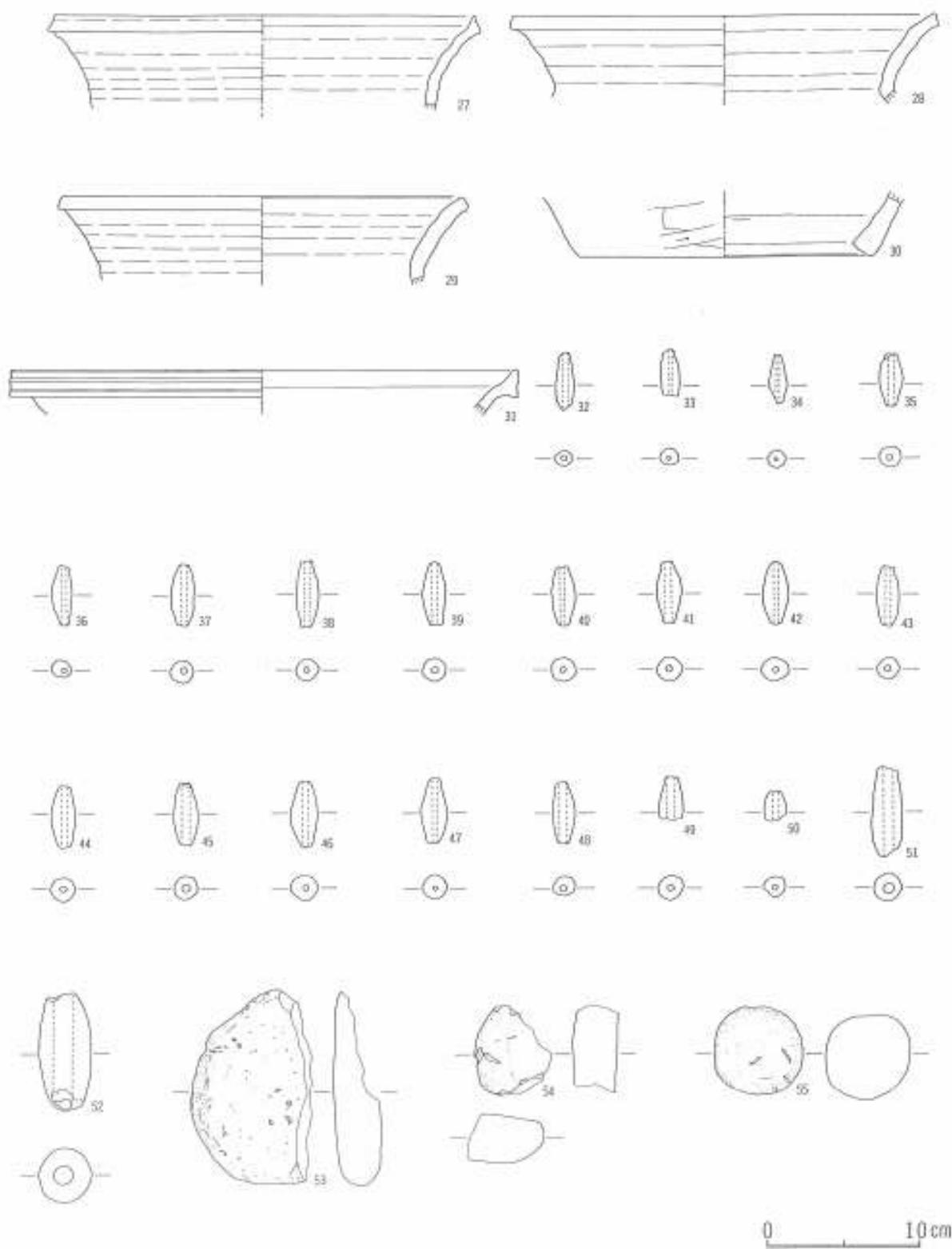
(6) ピット

5号ピット (第44図)

II区の北東部に位置し、6号溝の東側で検出された。円形を呈し、直径は52cm、深さは22cmであった。土層は、1層が黄褐色土、2層が暗黄褐色土であった。



第45图 II区遺構外出土遺物(1)



第46图 II区遗構外出土遺物(2)



第47圖 III区全測圖

6号ピット (第44図)

5号ピットの南側で検出された。不整形円形を呈し、A-A'断面で、直径は39cm、深さは20cmであった。土層は、1層が褐色土、2層が暗褐色土であった。

(7) 遺構外出土遺物 (第45・46図)

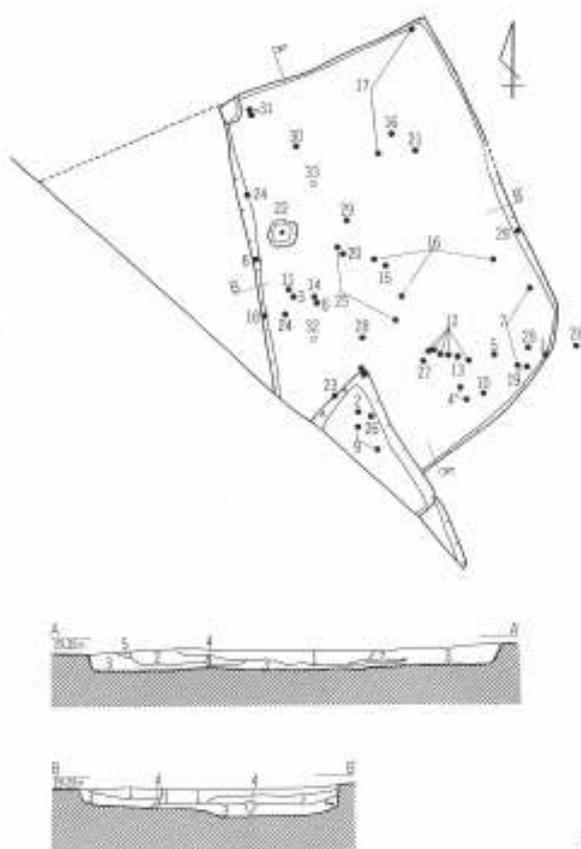
1～5は土師器杯、6は土師器皿である。1は底部外面が黒色で、3は内面全体と口縁の外縁が黒色である。7・8は須恵器蓋、9・10・13は須恵器杯、11・12・14・15は須恵器高台付杯である。9は底部が篋削りされている。16は土師器高杯の脚部、17は土師器でS字状口縁の甕、18は土師器台付甕の台部である。19～26は土師器甕である。27～29・31は須恵器甕の口縁部、30は須恵器甕の底部である。32～52は土錘であるが、52は径3.5cm、長さ7.8cmと他のものと比べて非常に大きいものである。53・54は扁平な石で、53は煤けて黒い。55は球形の石である。

Ⅲ区

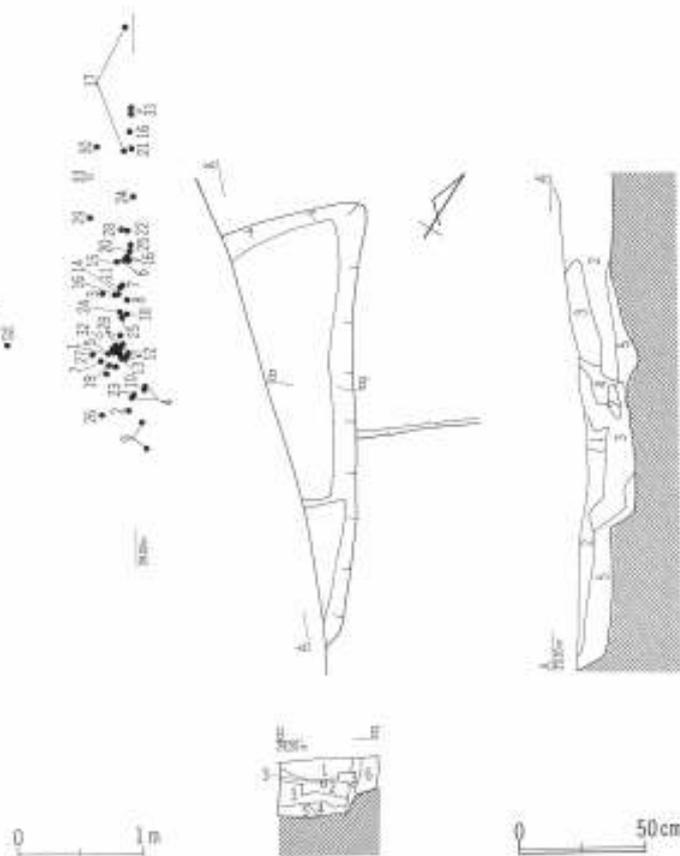
(1) 住居跡

7号住居跡 (第48～51図)

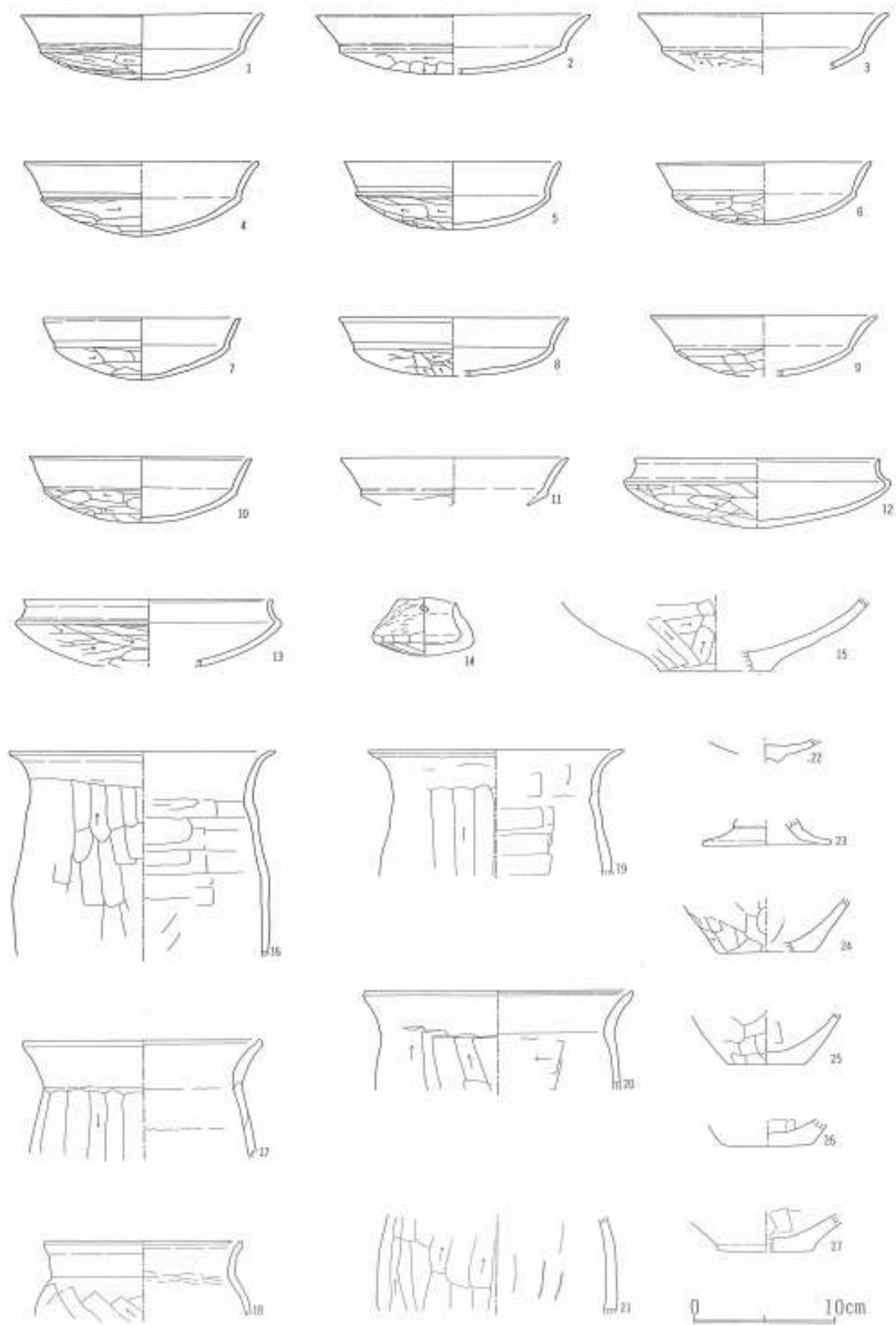
Ⅲ区の東側に検出され、形態は方形を呈すると考えられる。東辺の長さは2.85m、深さは26cmで、カマドは南側にあった。住居跡の土層は、1層が茶褐色土、2層が暗茶褐色土、3層が茶褐色土(粘性富む)、4層が暗褐色土、5層が暗褐色土である。カマドの土層は、1層が暗褐色土、2層が暗黄褐色土、3層が橙色土(焼土を多く含む)、4層が黒色土(炭化物を多く含む)、5層が黒色土、6層が暗黄褐色土であった。



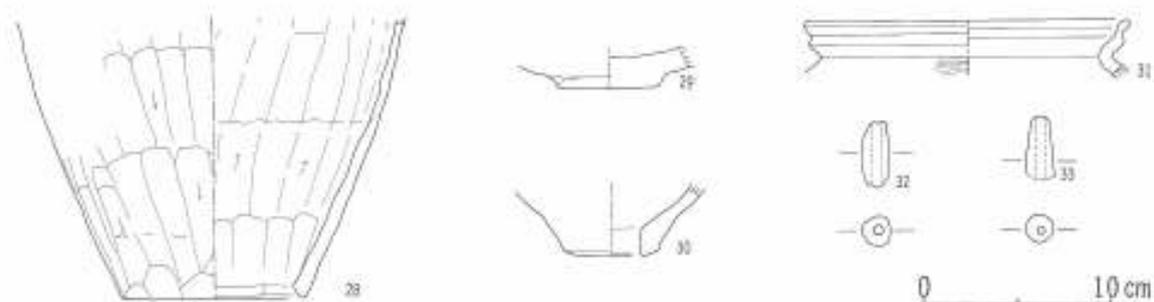
第48図 7号住居跡



第49図 7号住居跡カマド



第50图 7号住居跡出土遺物(1)



第51図 7号住居跡出土遺物(2)

(出土遺物)

1～13は土師器坏であり、1～11は、口縁が外反するもので、12・13は口縁が内傾するものである。14は手捏土器の小型壺で、口縁部に2つの穴が穿孔されている。15は土師器壺の底部と考えられ、16～21・24～27は土師器甕であり、16～20は口縁と胴上部であり、21は胴部で、24～27は底部である。16・17・19～21は長胴甕で、18は小型甕である。22・23は土師器高坏であり、22は坏底部、23は脚部である。28・30は土師器甗、29は土師器壺、31は土師器台付甕である。31の口縁部はS字状口縁である。32・33は土錘である。

(2) 土器集中遺構

4号土器集中遺構 (第52・56図)

Ⅲ区の南東部に位置し、土師器坏・甕がまとまって4点検出された。

(出土遺物)

13・15・16は土師器坏であり、25は土師器甕の胴下半部である。

(3) 溝跡

8号溝跡 (第53・54図)

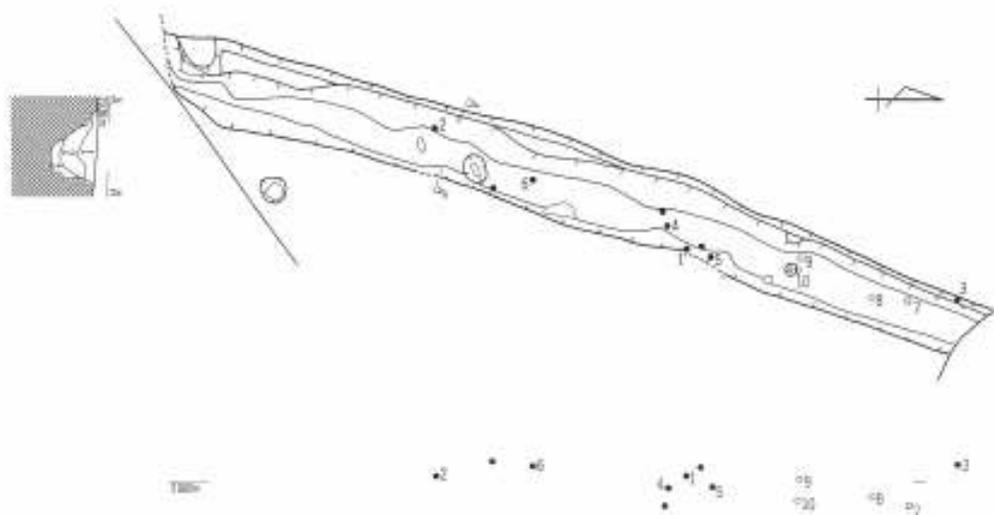
Ⅲ区の東側に位置し、主軸がほぼ南西―北東方向で検出された。A-A'断面で、上幅は60cm、下幅は21cm、深さは37cmであった。土層は、1層が暗褐色土、2層が暗褐色土(1層より暗い)、3層が暗褐色土(黄色粒子を含む)であった。

(出土遺物)

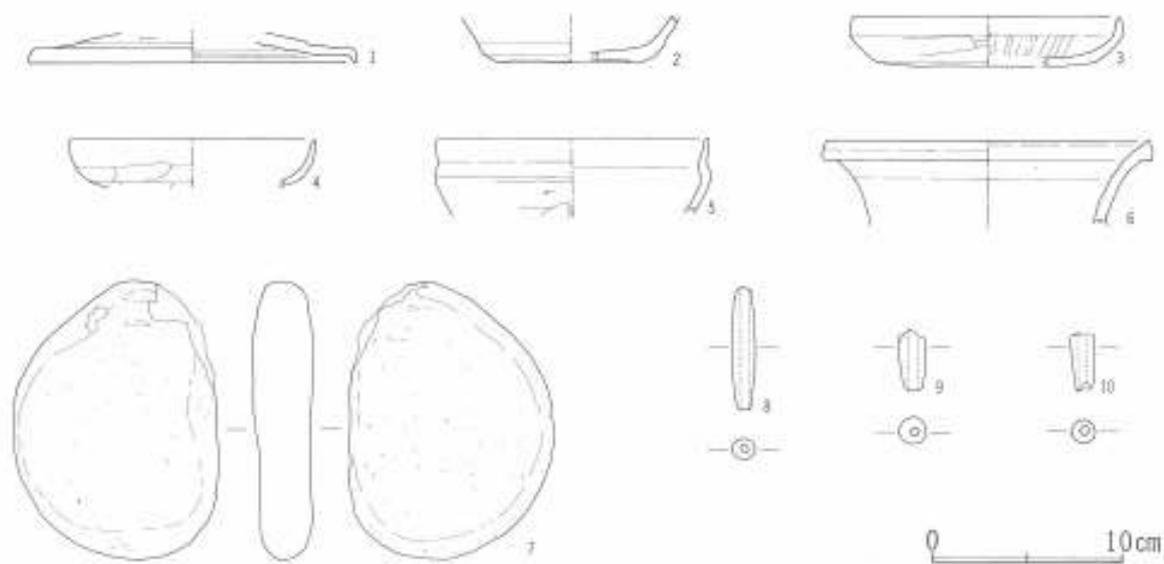
1は須恵器蓋、2は須恵器坏、3～5は土師器坏であり、6は須恵器壺である。7は扁平な石、8～10は土錘である。



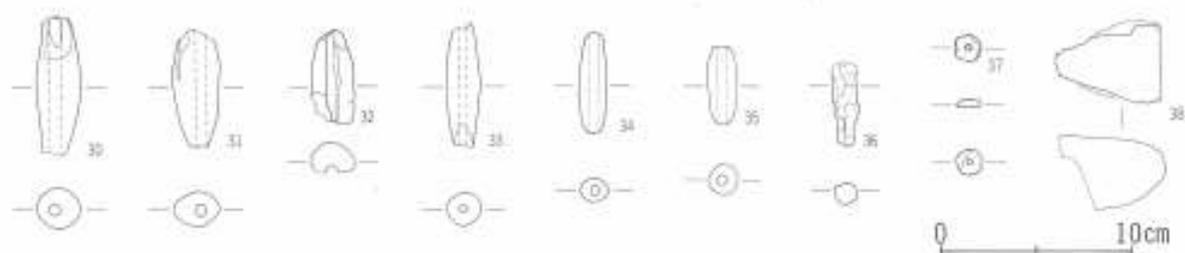
第52図 4号土器集中遺構



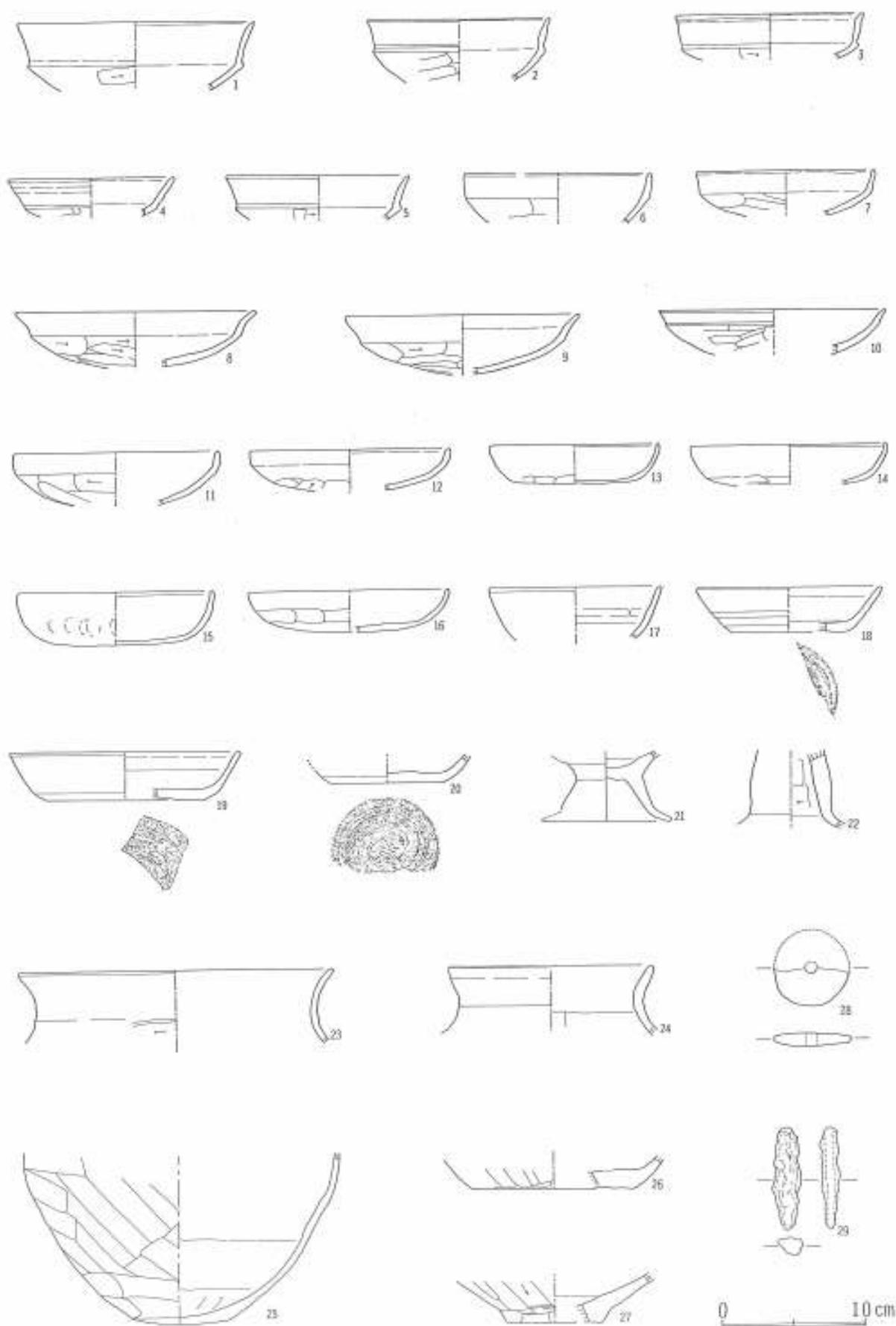
第53图 8号沟迹



第54图 8号沟出土遗物



第55图 III区遗物外出土遗物(1)



第56图 4号土器集中遺構出土遺物・III区遺構外出土遺物(2)

(4) 遺構外出土遺物 (第55・56図)

1～17は土師器坏で、17の内面は黒色で磨研されている。18～20は須恵器坏であり、18は底部が篋削りされ、19・20は回転篋削りされている。21・22は土師器高坏の脚部である。23～27は土師器甕、28は石製紡錘車、29は鉄釘である。30～35は土鍾、36は鉄釘、37は石製白玉、38は扁平な石の破片で、煤けて片面が黒い。

V 西通遺跡

1 遺跡の概観

西通遺跡は、今回調査した3箇所の遺跡のうち中央にあり、中耕地遺跡の南東に位置している。遺構は調査区南側に検出され、溝跡2条、土坑3基、ピット3個が検出された。1号溝は3号土坑・1・2号ピットと重なっていた。2号溝は2号土坑と重なり、2号土坑は1号土坑と重なっていた。

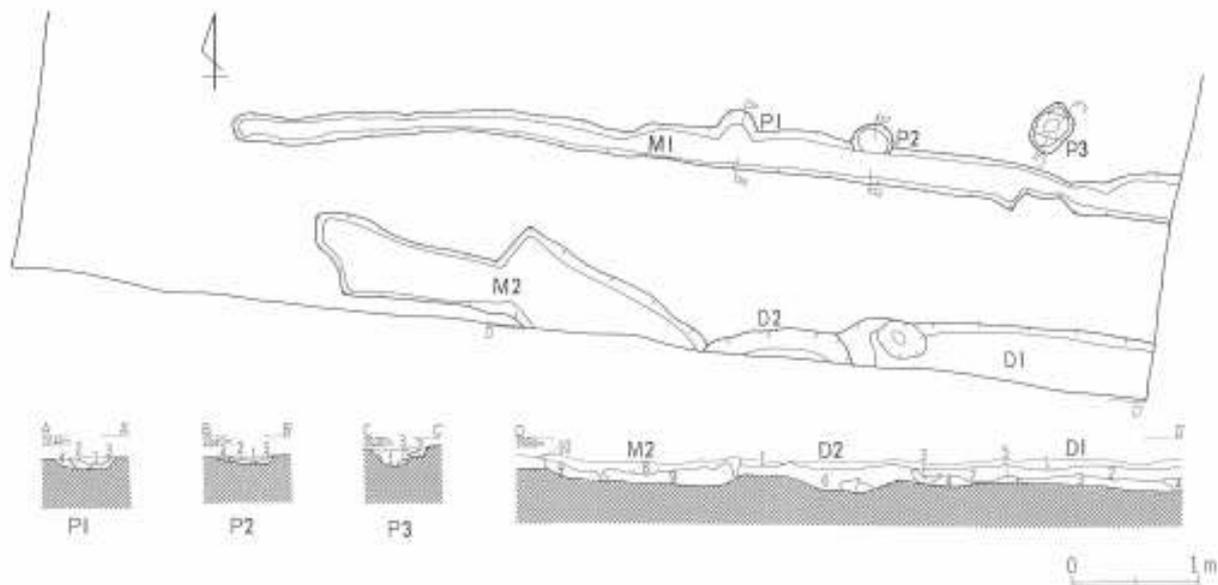
遺物は、土師器・須恵器が出土した。

2 遺構と遺物

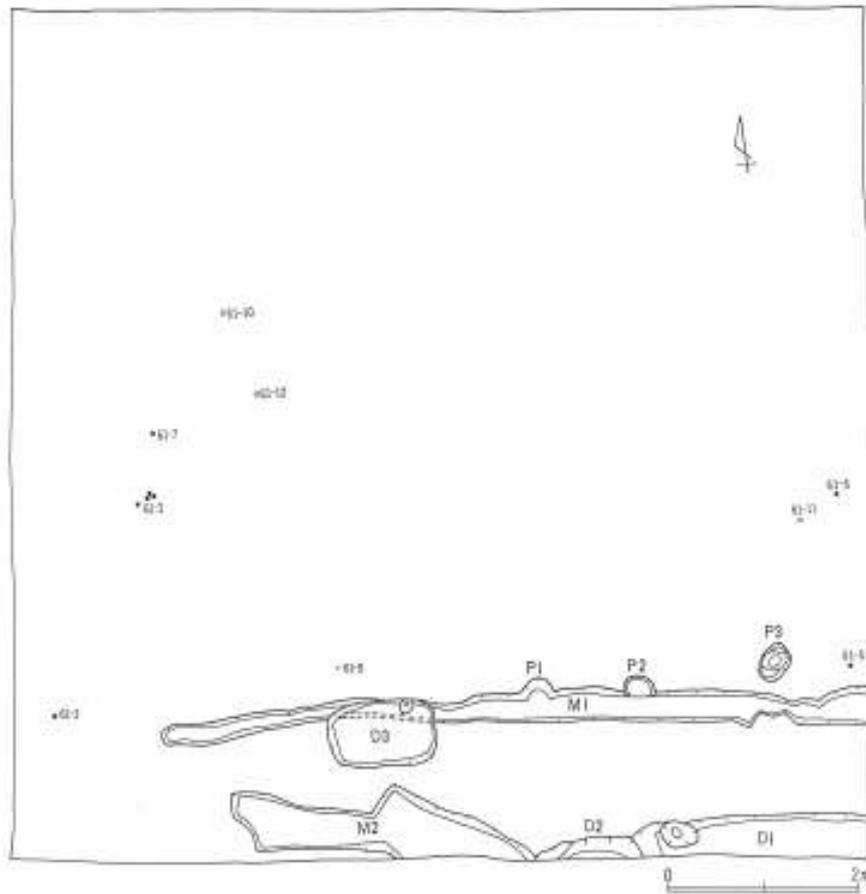
(1) 溝跡

1号溝跡 (第57・58図)

Ⅲ区の南側に位置し、主軸はほぼ東西方向で検出された。3号土坑に切られ、1・2号ピットを切っていた。A-A'断面で、上幅は35cm、下幅は22cm、深さは10cmであった。土層は、1層が黒色土、2層が暗青灰色土、3層が暗茶褐色土であった。



第57図 1号溝跡、1・2号土坑、1～3号ピット



第58図 西通遺跡全測図

2号溝跡 (第57・58図)

1号溝の南側に位置し、主軸は東西方向から北西-南東方向で検出された。2号土坑を切っていた。上幅は40~70cm、下幅は35~56cm、深さは21cmであった。土層は、8層が褐色土(黄褐色土ブロックを含む)、9層が暗茶褐色土、10層が褐色土であった。

(2) 土坑

1号土坑 (第57・58図)

調査区の南東隅に一部が検出されたので、形態・規模は不明である。確認された部分での深さは15cmであった。2号土坑を切っていた。土層は1層が暗橙褐色土、2層が暗褐色土、3層が暗褐色土(2層より明るい)、4層が茶褐色土、5層が黄褐色土であった。

2号土坑 (第57・58図)

1号土坑と2号溝の間で一部が検出され、1号土坑と2号溝により切られていた。形態・規模は不明であるが、確認された部分の深さは24cmであった。土層は、1層が暗橙褐色土、6層が暗褐色土(2層より暗い)、7層が暗褐色土(灰褐色土ブロックを含む)であった。

3号土坑 (第58・59図)

1号溝の西側で検出され、1号溝を切っていた。形態は長方形で、長軸は東西方向である。長さはA-A'断面で65cm、B-B'断面で1.15mで、深さは10cmであった。土層は、1層が暗褐色土、2層が暗褐色土(焼土・炭化物を少し含む)、3層が黒色土(炭化物を多く含む、焼土も含む)、4層が青灰色土であった。

(3) ビット

1号ビット (第57・58図)

1号溝に切られていたが、円形を呈すると考えられ、直径30cmであった。覆土は、暗茶褐色土であった。

2号ビット (第57・58図)

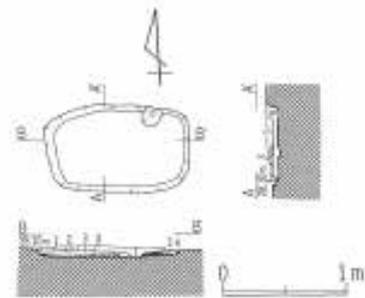
1号ビットの東側で検出され、1号溝により切られていた。形態は円形であり、直径31cmであった。覆土は、暗茶褐色土であった。

3号ビット (第57・58図)

2号ビットの東側で検出され、底部中央は1段深くなっていた。形態は不整長方形で、C-C'断面で径4.4cm、深さは12cmであった。覆土は、1層が灰褐色土、2層が灰褐色土(1層より明るい)、3層が暗褐色土であった。

(4) 遺構外出土遺物 (第61図)

1は土師器甕の口縁及び胴上半部であり、2は須恵器長頸瓶の肩部、3は土師器甕の頸部である。4～6は須恵器坏で、4・5は口唇部外面が黒く、6は底部が回転篋削りされている。7は須恵器高台付坏で、9～12は土錘である。



第59図 3号土坑

VI 東通遺跡

1 遺跡の概観

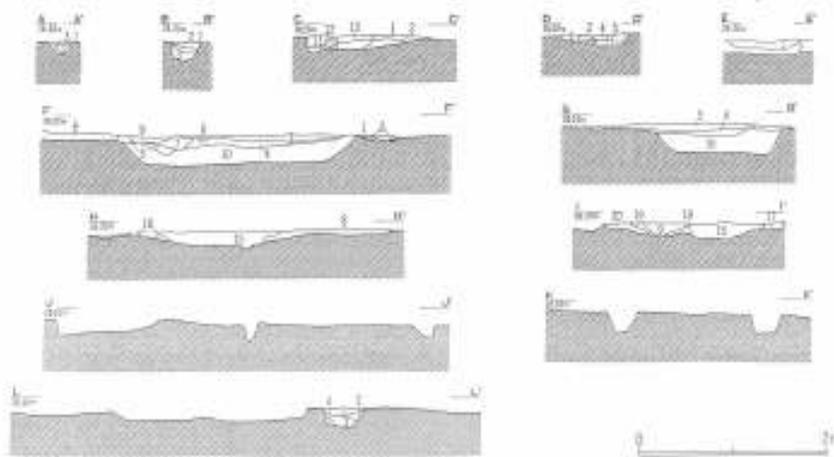
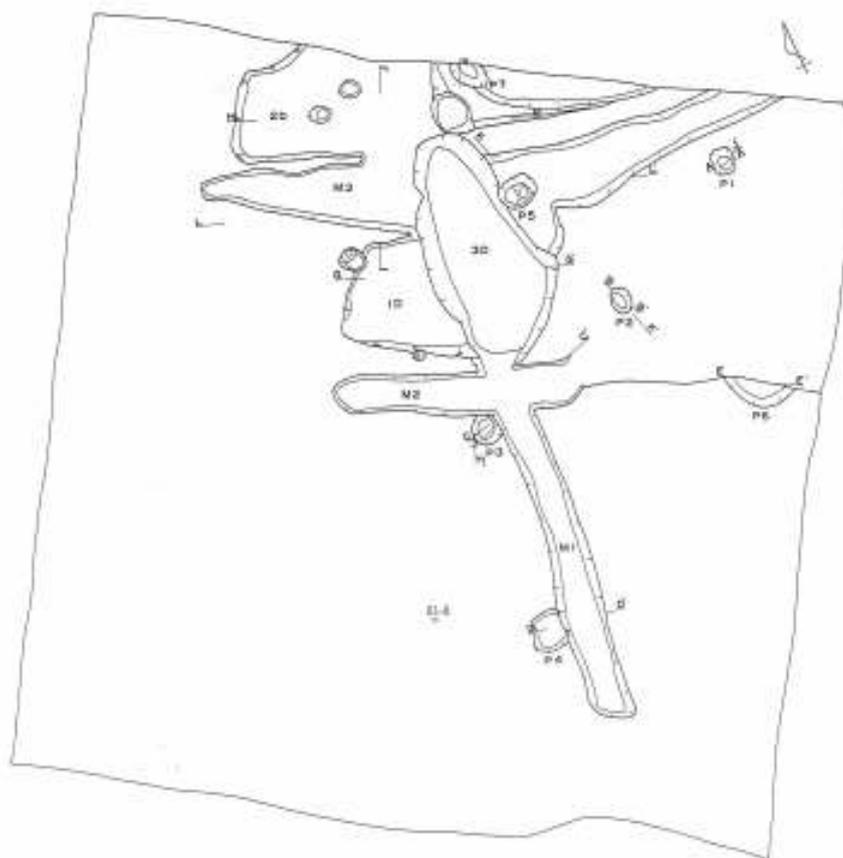
東通遺跡は、西通遺跡の東側に位置している。遺構は調査区北側に多く検出され、溝跡3条、土坑3基、ビット7個が検出された。ほとんどの遺構が重なり合っていた。遺物は、平安時代の土師器・須恵器・土錘が出土し、図示できたのは土錘(第61図8)であった。

2 遺構と遺物

(1) 溝跡

1号溝跡 (第60図)

調査区の東側で検出され、主軸はほぼ南北方向であった。上幅は40～50cmで、下幅は21～34cm、深さは12cmであった。覆土は、D-D'断面で3層が暗褐色土、4層が褐色土、5層が黄褐色土であった。



第60圖 東通遺跡全測圖

2号溝跡 (第60図)

調査区のはば中央に位置し、主軸は北西-南東方向で検出された。1号溝に切られ、6号ピットを切っていた。上幅は36~47cm、下幅は26~39cm、深さは7.7cmあった。覆土は、F-F'断面で1層が暗褐色土、2層が黄褐色土、C-C'断面では1層が暗褐色土(鉄分を多く含む)、2層が黄褐色土(鉄分を含む)、13層が暗褐色土(白色粒子を含む)、14層が黄褐色土(鉄分を多く含む)であった。

3号溝跡 (第60図)

調査区の北側で検出され、主軸は西側部分は2号溝とほぼ平行で、東側部分は東西方向であった。上幅は42~73cm、下幅は24~54cm、深さは14cmであった。覆土は、I-I'断面で9層が暗褐色土、18層が茶褐色土、19層が褐色土、20層が褐色土(黄褐色土ブロックを含む)であった。

(2) 土坑

1号土坑 (第60図)

2号溝と3号溝の間に検出され、3号土坑を切っていた。形態は長方形を呈し、長軸の長さ1.7m、深さ12cmであった。覆土は、G-G'断面で3層が暗褐色土、4層が暗褐色土(3層より明るい)であった。

2号土坑 (第60図)

調査区の北側で検出され、南辺は3号溝と平行であった。東側は2段に掘られていて、中央はピット1個、西側には小ピットが2個あった。覆土はH-H'断面とI-I'断面で、8層は暗褐色土、15層は暗褐色土(黄褐色土ブロックを含む)、16層は黄褐色土であった。

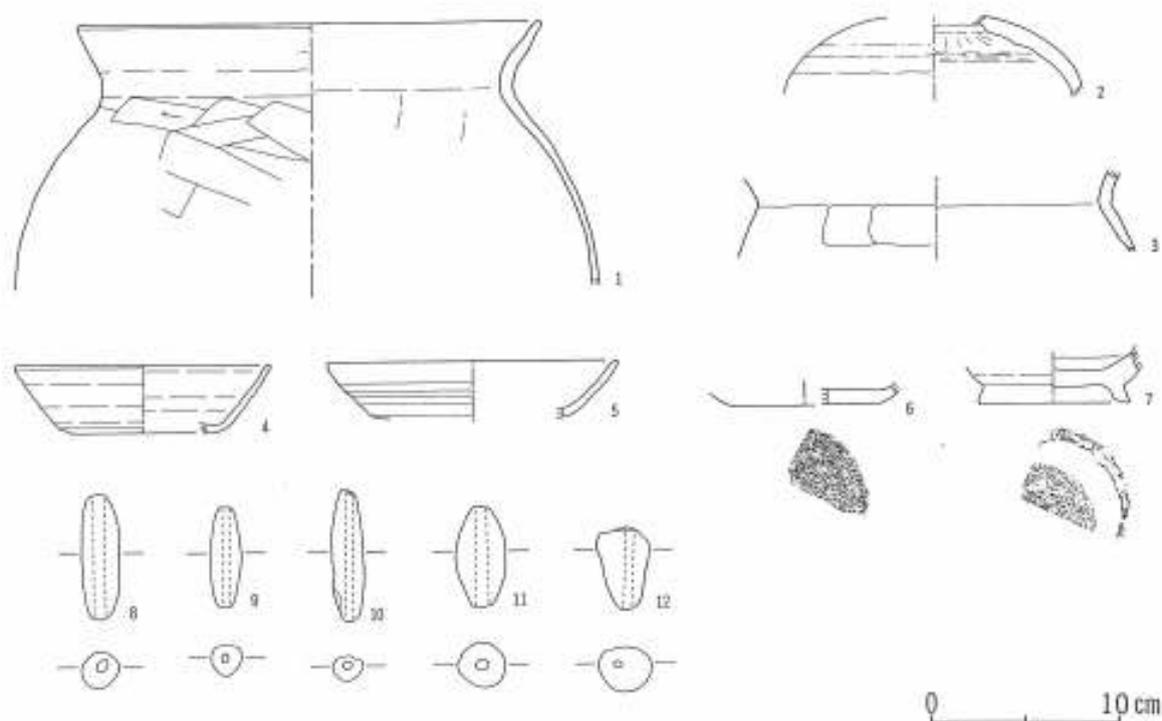
3号土坑 (第60図)

2号溝と3号溝の間で検出され、1号土坑により切られていた。形態は、南側が幅広くなっている不整楕円形を呈し、長軸の長さ2.57m、深さ31cmであった。土層はF-F'断面とG-G'断面で、1層は暗褐色土(しまりが非常にあり、鉄分を多く含む)、2層は黄褐色土(鉄分を含む)、3層は暗褐色土(1層より暗い)、4層は暗褐色土(3層より明るい)、5層は黄褐色土(鉄分を多く含む)、6層は暗褐色土(3層より明るい)、7層は暗褐色土(しまりが非常にある)、8層は暗褐色土(鉄分を含む)、9層は暗褐色土(7層より明るい)、10層は暗褐色土(鉄分を多く含む)であった。

(3) ピット

1号ピット (第60図)

調査区の東隅に位置し、3号溝の南側で検出された。形態は方形で、長径は29cm、短径は24cm、深さ13cmであった。覆土は1層は褐色土(しまりが非常にあり、鉄分を多く含む)、2層は褐色土(しまりが非常にある)、3層は茶褐色土であった。



第61図 西通遺跡・東通遺跡出土遺物

2号ビット (第60図)

1号ビットの南西側で検出され、形態は方形で、長径は26cm、短径は20cm、深さ17cmであった。覆土は1層は褐色土（しまりが非常にあり、鉄分を多く含む）、2層は茶褐色土（鉄分を含む）、3層は茶褐色土（しまりが非常にあり、鉄分を含み、2層より暗い）であった。

3号ビット (第60図)

2号ビットの南西側で検出され、形態は円形で、径は32cm、深さ18cmであった。覆土はC-C断面で11層は褐色土（鉄分を含む）、12層は褐色土（鉄分を含む）であった。

4号ビット (第60図)

3号ビットの南側で検出され、形態は方形で、長径は41cm、短径は36cm、深さ0.7cmであった。覆土は1層は黄褐色土（鉄分を含む）、2層は褐色土であった。

5号ビット (第60図)

2号ビットの北側で検出され、形態は方形で、長径は38cm、短径は32cm、深さ21cmであった。覆土はL-L断面で1層は褐色土（鉄分を含む）、2層は褐色土、3層は褐色土（鉄分を含み、1層より明るい）、4層は茶褐色土（鉄分を含む）であった。

6号ピット (第60図)

調査区の東側で検出され、2号溝によって切られていて一部が残存していた。残存した部分の深さは10cmであった。覆土は、E-E'断面で暗褐色土（鉄分を多く含む）であった。

7号ピット (第60図)

5号ピットの北側で検出され、形態は方形で、径は40cm、深さは3.9cmであった。覆土は褐色土（鉄分を含む）であった。

Ⅶ 埼玉県北部地域試料胎土重鉍物分析報告

1 はじめに

本分析では、埼玉県北部の各遺跡より出土した古墳時代の土師器について、その胎土の特徴を把握し、それをもとに各遺跡毎の土器胎土の特徴や口縁の形状の特徴と胎土との関係について検討する。

分析の対象は、古墳時代初頭のいわゆるS字口縁の土器を中心とした。また、その比較試料として、「くの字」口縁の土師器とタタキ目のある土師器も対象として加えた。分析には、後述する分析方法上の問題により、提供された48点の試料の中から21点を選んだ。選んだ試料は、妻沼・行田・熊谷・岡部・大宮の各地の遺跡から出土した土師器である。各試料の試料番号・出土した遺跡名・器種・部位・口縁の形等を表1に示す。また、表1には各試料の外見的特徴も記載した。

2 分析方法

現在、土器の胎土分析の方法としての、蛍光X線分析や放射化分析などの分析機器を用いて胎土の元素組成を求める方法や、偏光顕微鏡を用いて胎土の鉍物組成を求める方法など様々な方法が用いられている。どの方法においてもそれぞれ効果と限界があり、決定的な方法は今のところないと考えられる。

また、対象とする土器の質（例えば焼成温度や砂の含量など）によって、分析方法を選択する必要がある。いずれにしても、多数のデータを集めてその相互の比較から考察するという手順は同じである。本分析の対象である土師器は、その外見的特徴から胎土中に含まれる砂分の重鉍物組成を胎土の特徴として代表させることが適当と考えた。分析の方法は、以下の通りである。

試料は、鉄乳鉢を用いて粉碎し、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/4mm - 1/8mmの粒子をテトラブromoエタン（比重約2.96）により重液分離、重鉍物のプレパラートを作製した後、偏光顕微鏡下にて同定した。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを「不透明鉍物」とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。

ところで、一般に上記のような分析方法により鉍物組成を求めるときに、同定する鉍物の粒数は250個程度を目安とする。本分析の場合、十分な鉍物粒数を得られないと見込まれる試料が多かった。S字口縁の土器は埼玉県内の出土事例が稀少であり、たとえ小片であっても考古資料として貴重であるとの観点からも、このような資料を除いて、前述の21点を選択したのである。

3 分析結果

全資料ともに、多量の斜方輝石と少量の単斜輝石が含まれるという特徴を持つ。また、試料№10と12を除く他の全試料に微量～少量あるいは多量の角閃石が含まれる。中でも試料№43では角閃石が最も多く、試料№13では角閃石が斜方輝石について二番目に多い。さらに試料によっては微量から少量のザクロ石と不透明鉱物が含まれる。そのうち試料№13はザクロ石の量比が他の試料に比べて非常に多く、資料№43は不透明鉱物が比較的多い。他に試料によっては、酸化角閃石・黒雲母・ジルコンなどが微量含まれる。ただし、資料№9には黒雲母が比較的多く含まれる。

各資料の重鉱物組成を表2・図1に示す。

4 考察

(1) 試料の分類

各試料の胎土の特徴をより明確に捉えるため、組成の類似性から以下のような試料のグループに区分した。分類は、優占する鉱物や鉱物の組合せ等を基準として行った。

○Iグループ (№2・10・11・12・19・38・46)

斜方輝石が非常に多い。

○IIグループ

斜方輝石が最も多いが、Iグループの組成に比べて斜方輝石に対する単斜輝石の量比が多く、さらに少量の角閃石が含まれる。酸化角閃石の量比により、次の二つの小グループに分ける。

・II-1 (№16・20・21・24・40)

酸化角閃石が全く含まれないか、あるいは微量含まれる。

・II-2 (№18・25・39)

酸化角閃石が少量含まれる。

○IIIグループ (№14・15・48)

斜方輝石が最も多く、少量の角閃石・不透明鉱物と微量から少量のザクロ石が含まれる。

○IVグループ (№9)

黒雲母の量比が他の試料に比べて多い。

○Vグループ (№13)

ザクロ石の量比が他の試料に比べて特異的に多い。

○VIグループ (№43)

角閃石が最も多く、斜方輝石と不透明鉱物がほぼ同量含まれる。

(2) 出土遺跡および口縁の形状との関係について

本分析の結果からみる限り、埼玉県北部地域のS字口縁の土師器胎土は、上記のIおよびIIグループを主体とすると考えられる。さらに、S字口縁以外の土師器でも、その胎土の組成は上記の主体グループである場合が多い(例えば資料№19・20・46)。

しかし、個々の遺跡別にみると、次のような口縁と胎土との対応関係が認められる。

行田市の池上遺跡の試料では、S字口縁の試料№12が主体グループのIの組成を示すのに対し、くの

字口縁の試料№13と14は、それぞれV・Ⅲという小数グループの組成を示す。また、熊谷市の東遺跡では、S字口縁の試料№16がⅡグループであるのに対し、タタキ目の試料№15はⅢグループである。これらの遺跡では、口縁の違いは材料の違いあるいは製作場所の違いを表している可能性が考えられる。さらに、S字口縁の土器でも胎土の組成がⅠまたはⅡグループでない試料が認められる（資料№9・43・48）。特に資料№9と43の組成は、本分析の試料の中でも特異的である。このような組成は、今後分析例を重ねていく場合に産地推定の指標になりうる可能性を持つものと考えられる。また、資料№48は本分析の試料の中で唯一埼玉県南部のものであるが、その組成とよく似た組成が埼玉県北部のS字口縁ではない土師器（試料№14・15）に認められることは、注目すべき点である。

以上のことは、おそらく膨大な数出土しているであろう埼玉県北部の土師器中のごくわずかなから得られた情報にすぎないが、土師器の考古学的考察を進める上で新たな方向性を呈示したという点では大いに成果があったといえる。今後、より多くの分析事例を蓄積することにより、各地域・各市・各遺跡における土師器の胎土の傾向を把握することができると考えられる。さらにこれらの情報を整理することにより、埼玉県下における土師器の移動・流通などの考察に発展させることができるであろう。

（3）胎土中の重鉱物の起源について

全試料中に含まれる斜方輝石と単斜輝石は、比較的新鮮なものが多く、中には自形を呈するものや火山ガラスの付着したものなどが認められる。このような鏡下の観察から、土器胎土中より検出した斜方輝石と単斜輝石の両輝石は、主に第四紀の火山噴出物に由来すると考えられる。その地理的な位置からみて埼玉県北部地域に分布する粘土層や砂層あるいは河川砂等の堆積物中には、浅間火山をはじめとする両輝石安山岩質の火山噴出物に由来する砕屑物が比較的豊富に含まれていると考えられる。したがって、埼玉県北部地域の土師器の中で、ⅠグループやⅡグループのような両輝石の多い組成の胎土を持つものが主体になることは、この地域の地質学的背景と調和的であるといえる。

一方、試料中の角閃石は、新鮮なものが少なく、両輝石に比べて風化の程度が激しいものが多い。したがって角閃石には、火山噴出物に由来するものもあると考えられるが、多くは基盤の岩石が風化した砕屑物に由来すると考えられる。埼玉県北部の寄居から比企・吉見にかけての丘陵には、角閃石を多く含む岩石やその岩石を礫とする礫岩層が広く分布する（小勝ほか、1970；村井、1986）。したがって、これらの岩石の風化砕屑物を多く含む粘土層や砂礫層あるいは河川砂も分布していると考えられる。試料中の角閃石は、このような堆積物を起源とする可能性が考えられる。

両輝石は角閃石と共に試料中より検出した鉱物のうち、ザクロ石も重要である。ザクロ石は、変成岩中にごく普通に含まれる鉱物である。埼玉県北部地域およびその周辺は、三波川帯や吉見変成岩（村井、1986）などの変成岩帯が分布する地域であるところから、試料中のザクロ石の起源もまずこれらの岩石に求めることができる。ただし、これらの岩石の風化砕屑物を多量に含む粘土層や砂層・河川砂の分布範囲は、両輝石や角閃石を含む堆積物の分布範囲に比べれば狭いと考えられる。したがって試料№13の胎土を構成しているザクロ石を高率に含むような堆積物の存在は、埼玉県下においても極めて限られているものと考えられる。今後、胎土分析を進めていく上で、ザクロ石の量比には特に注目する必要がある。

以上のように重鉱物組成から見た胎土分析では、本分析の試料はいずれも埼玉県北部地域から出土し

たものとして特に問題はないといえる。ただし、岩石学的レベルにおいて同様の地質的背景を持つ他の地域からの搬入品については、現段階ではそれを区別することはできない。この問題についての検討は、前項で述べた分析例の蓄積・整理とともに今後行うべき事項である。

5 まとめ

- (1)試料の胎土は、重鉱物組成からⅠ～Ⅳまでのグループに分けられる。
- (2)両輝石の多いⅠおよびⅡグループの組成を示す胎土が、埼玉県北部地域のS字口縁の土師器の胎土の主体をなす可能性が考えられる。
- (3)基本的には、口縁の形状と胎土との間に明瞭な対応関係はないと考えられる。
- (4)S字口縁の土師器の中でも、主体のグループの組成と大きく異なる組成の胎土を持つものがある。
- (5)胎土の鉱物組成は、埼玉県北部地域の地質学的背景と特に違和感はない。

＊ ＊

酸化角閃石の量比の違いが胎土分類上の基準として問題があるのは、酸化角閃石が角閃石の焼成による生成物である可能性が考えられるためである。酸化角閃石は、普通角閃石（本文では角閃石としている）が約800℃ Cで高温酸化してできる。（黒田ほか、1983）。したがって、素地の組成は同じでも、その後の焼成状態によって酸化角閃石の量比が異なると考えられるのである。

引用文献

- 黒田吉益・諏訪兼位（1983）偏光顕微鏡と岩石鉱物（第2版）．共立出版，343p．
- 小勝幸夫・小林洋二・渋谷紘・武井朔・竹内敏晴・角田史雄・堀口萬吉・町田二郎・村井武文・吉田弘安・吉羽興一（1970）埼玉県寄居町付近の中生代後期の地層・岩石を中心とした地質学的研究．地質学雑誌，76，p．421-431．
- 村井武文（1986）吉見丘陵の変成岩．日本の地質「関東地方」編集委員会編，日本の地質3「関東地方」，p．45-47．

表1 埼玉県北部地域関連連胎土分析試料表

試料番号	採取遺跡	出土位置	器種	部位	口縁の形	表面の色(表・裏)	表面の質感(表・裏)	表面観察結果(表・裏)
2	赤藤吾新田(妻沼)	8住覆土	鉢	口縁	S字	裡・にぶい橙	粗い	灰色岩片・黒色斑品多量含む。
9	高畑(行田)	1号方形周溝蓋	蓋	*	*	灰褐・同	粗い	白色粒・白色岩片多量含む。
10	*	*	*	*	*	黒・褐灰	粗い	白色粒・白色岩片多量、黒色斑品微量含む。
11	*	*	*	*	*	灰褐・橙	やや粗い-粗い	白色岩片・黒色斑品少量含む。
12	他上試掘(行田)	*	*	*	*	にぶい橙～褐灰	粗い	白色粒・黒色斑品多量含む。
13	*	?	*	*	くの字	にぶい黄橙～橙	やや粗い	白色粒多量、黒雲母片少量含む。
14	*	?	*	*	くの字	灰白～にぶい黄橙～橙	やや粗い-粗い	白色粒多量、白色岩片少量、灰色岩片(径4mm)微量含む。
15	62東(熊谷)	D-17	*	*	(タタキ目)	明赤褐	やや粗い	白色粒少量含む。-白色粒多量、灰色岩片少量含む。
16	*	C-22	*	*	S字	褐～にぶい褐	粗い	カノウ岩片(径7mm)あり。
18	石碓A(岡部)	A大溝(E-W)	*	*	にぶい橙	にぶい赤褐～橙・橙	粗い	白色岩片・灰色岩片・白色粒多量含む。
19	*	*	*	*	くの字	橙・にぶい橙	粗い	灰色岩片・黒色斑品多量、白色粒少量含む。
20	*	*	*	*	粗い	にぶい褐・同	粗い	白色粒多量含む。
21	*	A大溝(N-S)	*	胴部	S字	褐・にぶい橙	やや粗い-粗い	白色粒・白色岩片少量含む。-白色粒・白色岩片多量含む。
24	水窪(岡部)	6住	?	*	*	褐灰・にぶい褐	やや粗い	白色粒・白色岩片少量含む。-白色粒微量含む。
25	*	*	?	*	*	にぶい橙～にぶい褐	やや粗い-粗い	白色岩片・灰色岩片中量含む。-白色岩片・灰色岩片多量、赤色粒少量含む。
38	雷電塚(熊谷)	13-括	*	胴部	*	黄橙～にぶい橙・灰	粗い	白色粒・白色岩片多量、黒色粒少量含む。
39	*	64-括	?	胴下部	*	にぶい橙・同	やや粗い-粗い	白色粒多量、灰色岩片少量含む。-白色粒多量、白色岩片・灰色岩片少量、黒色斑品微量含む。
40	*	一括	?	胴上部	*	にぶい赤橙～にぶい橙	粗い	白色岩片多量含む。
43	天神(熊谷)	-	?	胴部	*	褐灰・明橙～灰	やや粗い	白色岩片少量含む。-砂粒目立たず。
46	中折地(熊谷)	-	?	*	くの字	明赤褐・にぶい赤褐	粗い	灰色岩片少量含む。
48	宮ヶ谷塔遺跡群 No.155遺跡(大宮)	16住C区	?	*	S字	にぶい黄褐～にぶい黄橙	ややさめ細かい -やや粗い	砂粒目立たず。-白色粒少量含む。

* 岩片:粒径約0.5～2mm程度の角ばった砂粒。

粒:粒径0.2mm程度、外見的には粘土の微細な固まりのように見える。

表面の質感および表面観察の結果で裏の記載のないものは、表に同じである。

表2 埼玉県北部地域試料 胎土重鉱物組成

試料番号	重 鉱 物 組 成												同定鉱物粒数	
	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石		酸化角閃石	他の角閃石	黒雲母		ジルコン	ザクロ石	不透明鉱物		その他
				緑色	褐色			緑色	赤褐色					
2		205	21	1								14	9	250
9		47	17	5				13	5		1		162	250
10		220	14									3	13	250
11		168	23	1								14	44	250
12		211	22			1						7	9	250
13		131	8	38			1				36	1	35	250
14		58	18	19		2					2	20	131	250
15		91	9	15	1						15	26	93	250
16		134	30	4								7	75	250
18		135	26	9	2	12			2		1		63	250
19		186	19	1								4	40	250
20		117	35	14	1	2					1	2	78	250
21		155	29	6					1		2		57	250
24		128	39	10				1				2	70	250
25		125	19	20	5	12			3		2		64	250
38		190	22	1								5	32	250
39	1	89	34	12		11			1	1			101	250
40	1	94	21	5		4				1		1	123	250
43		66	8	79		1					2	66	28	250
46		196	11	4		1						23	15	250
48	1	65	17	8				1	2		7	20	129	250

*数値は全て粒数

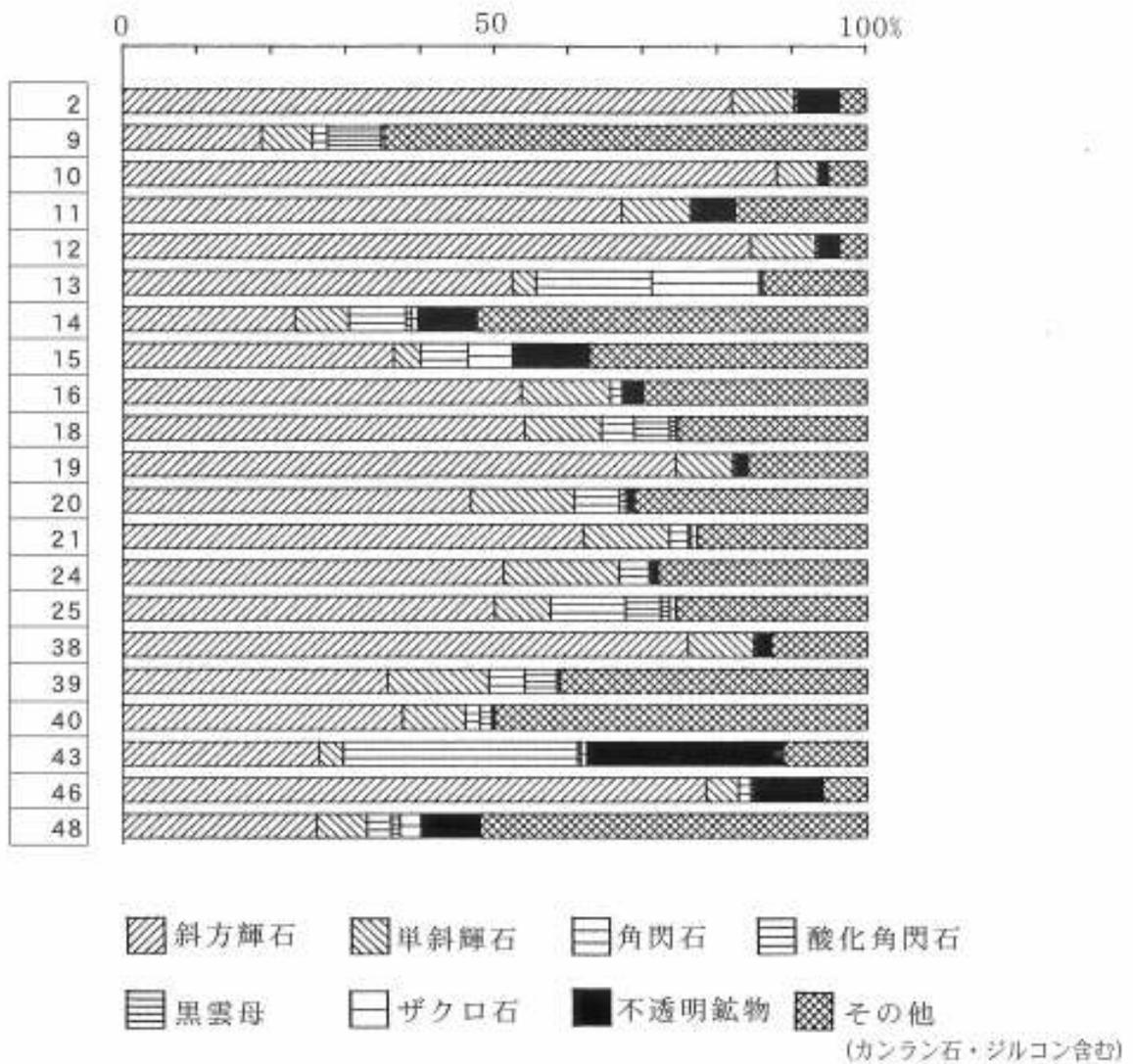
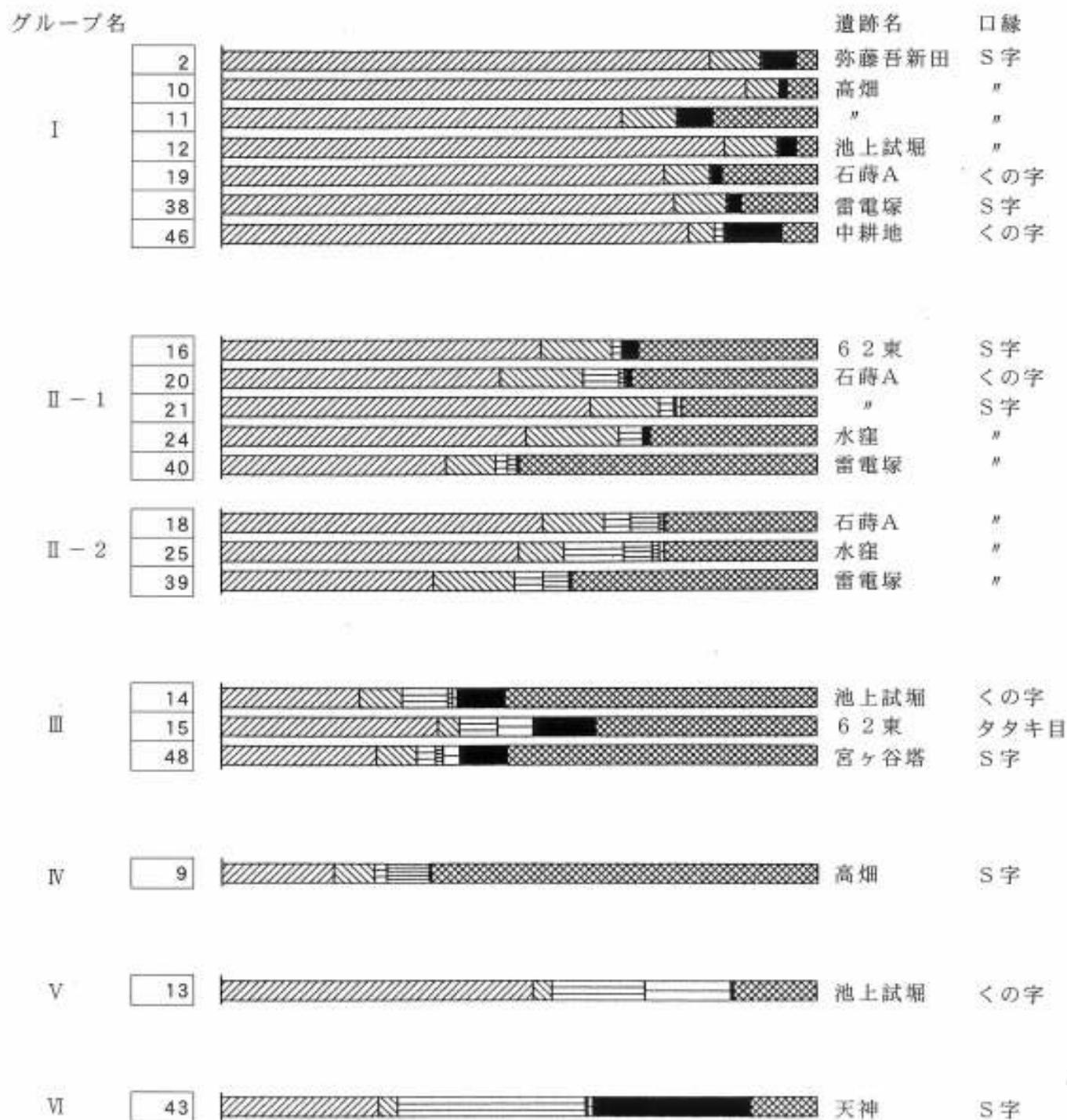


図1 埼玉県北部地域試料 胎土重鉱物組成ダイアグラム



* 凡例は図1に同じ

図2 埼玉県北部地域試料 胎土重鉍物組成ダイアグラム (グループ別)

中耕地・西通・東通遺跡
写真図版



中耕地遺跡・西通遺跡・東通遺跡空中写真



中耕地遺跡空中写真



1 中耕地遺跡遠景（西から）

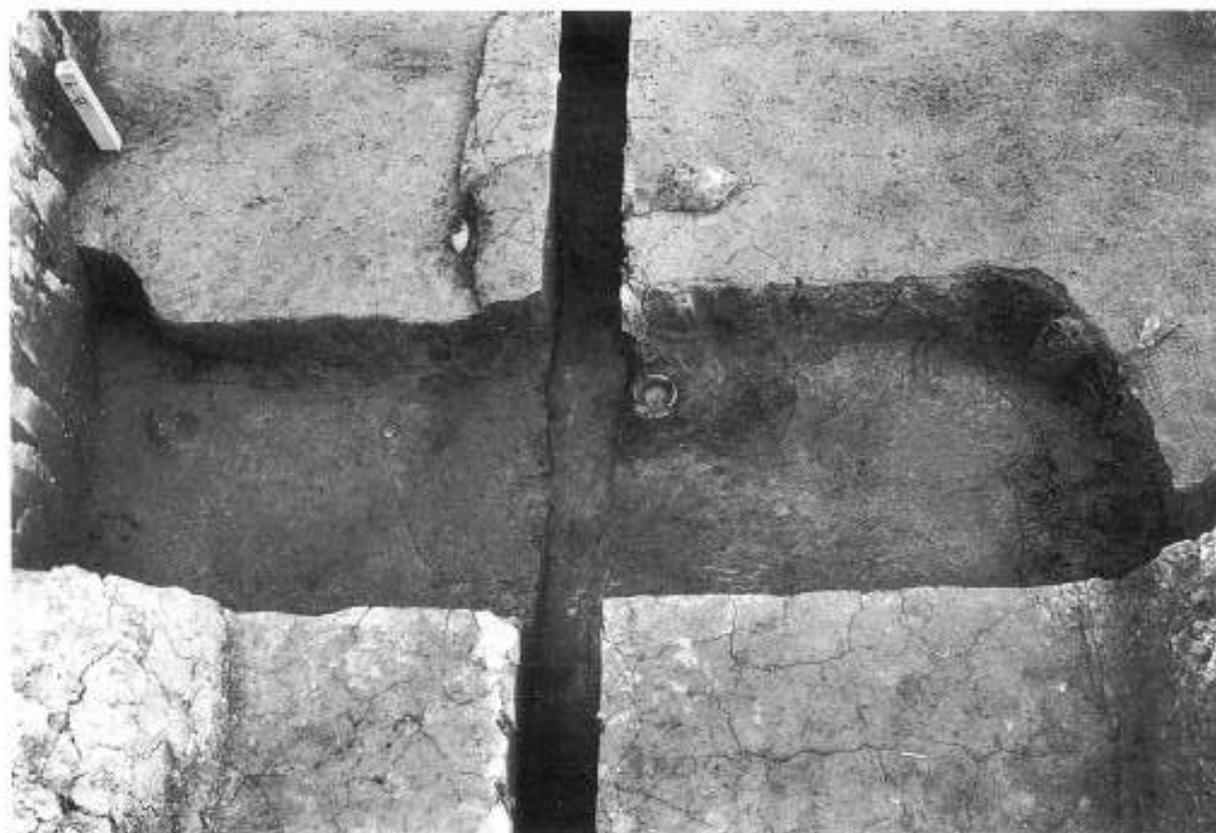


1 中耕地遺跡遠景（南から）

图版 4



1 I区全景



2 1号住居跡

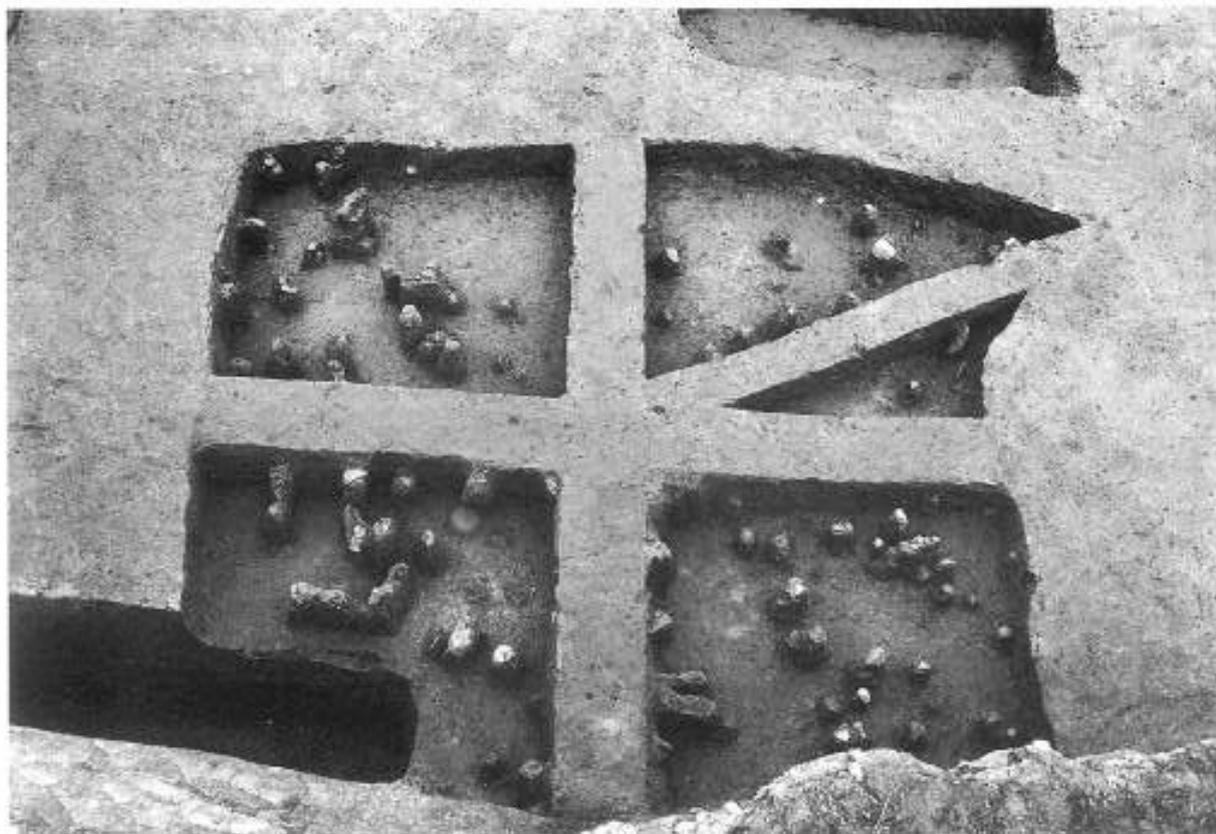


1 1号住居跡



2 2号住居跡

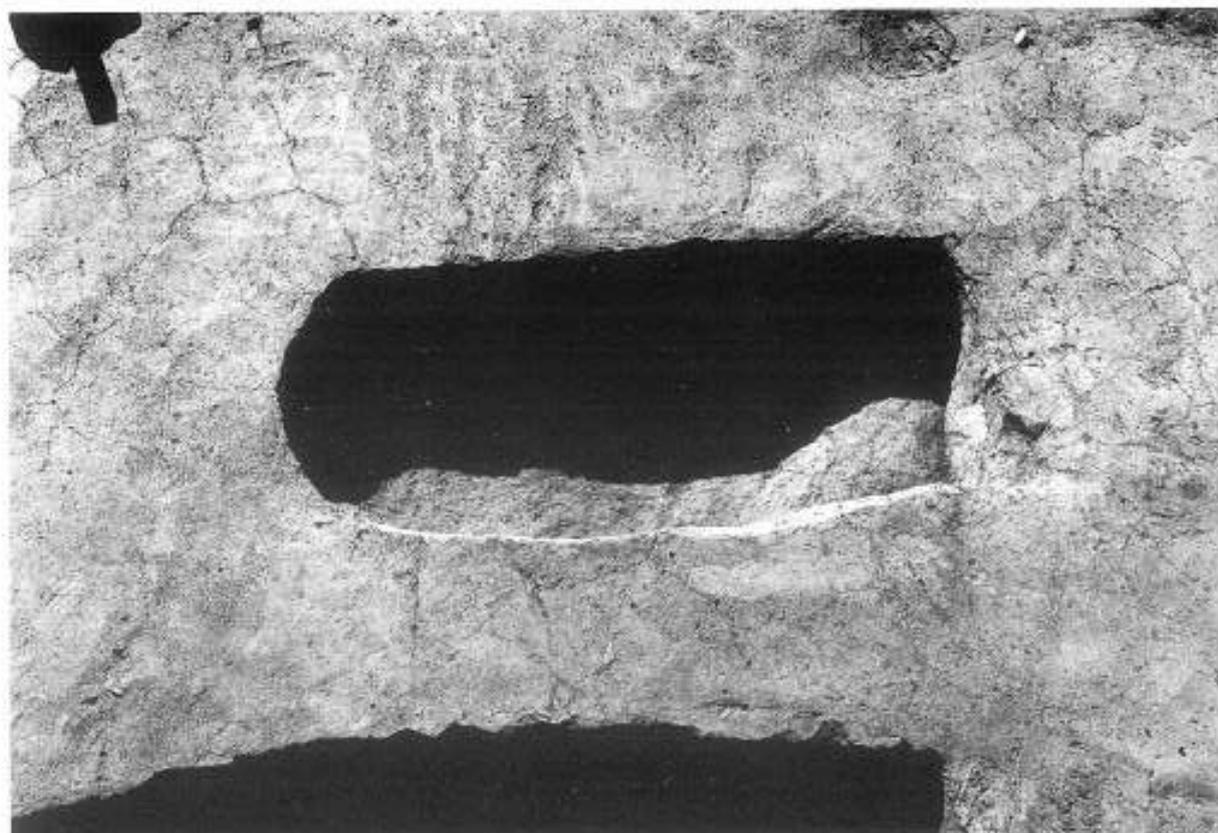
图版 6



1 3号住居跡遺物出土狀況



2 3号住居跡

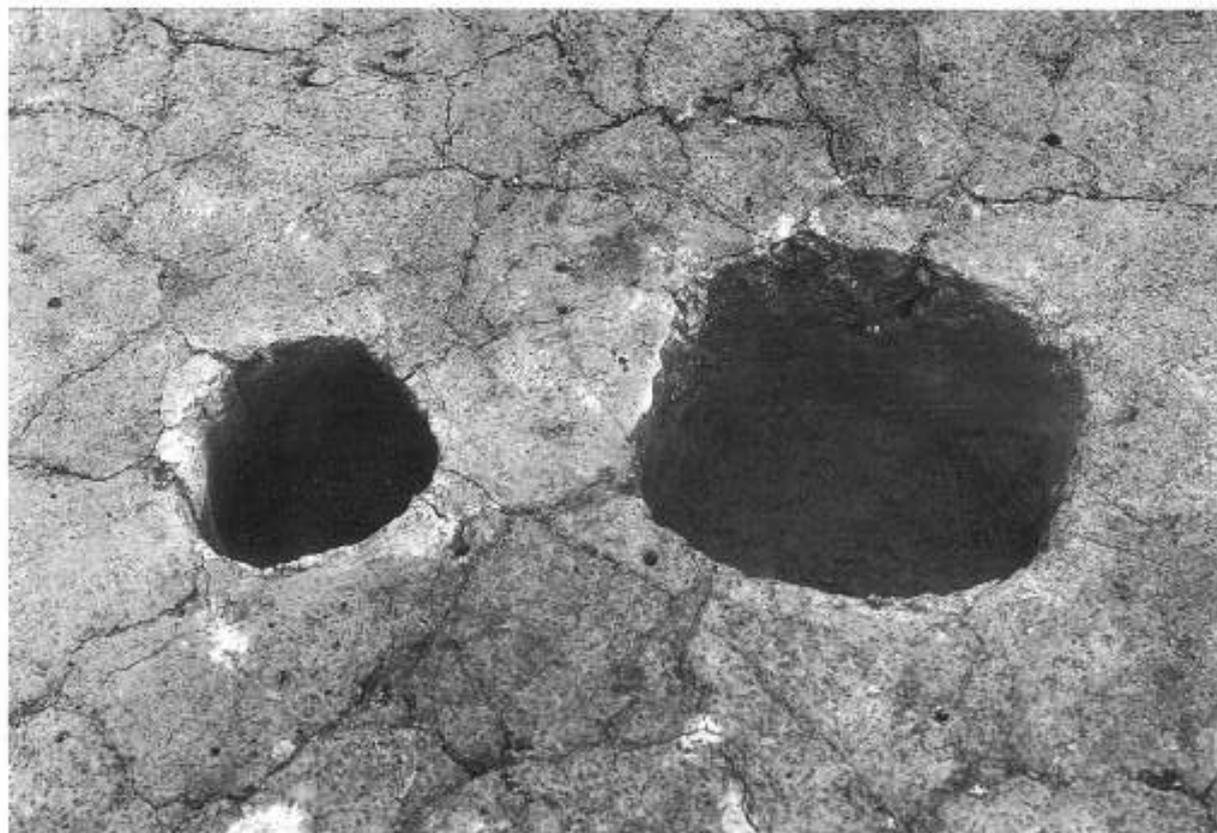


1 1号土坑



2 1号ビット

図版 8



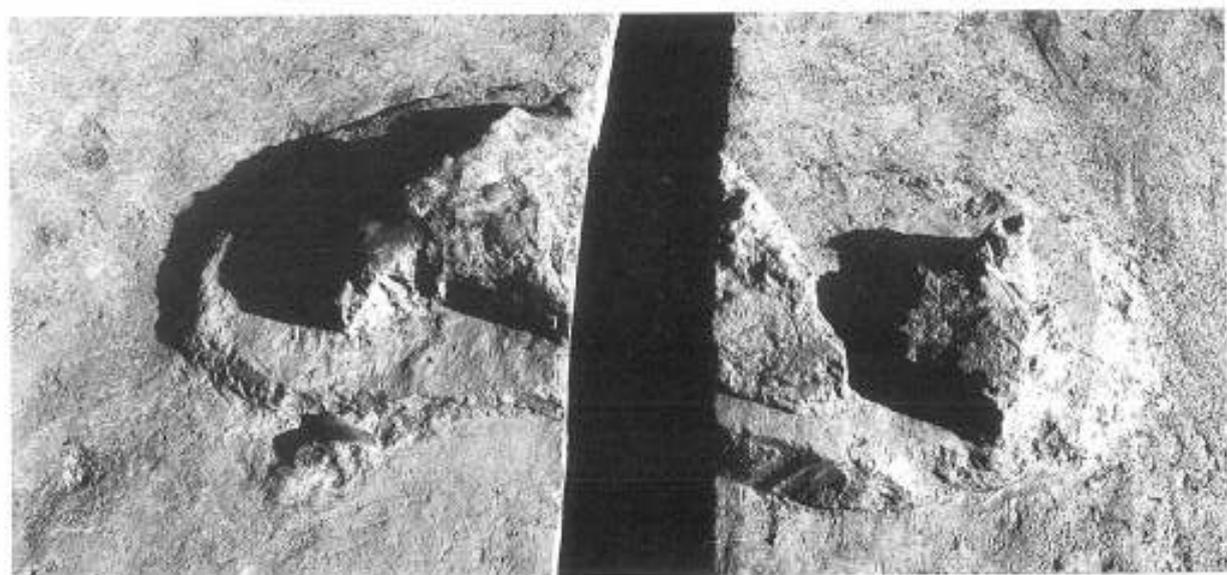
1 2・3号ビット



2 4号ビット



1 5・6号住居跡



2 4号住居跡カマド



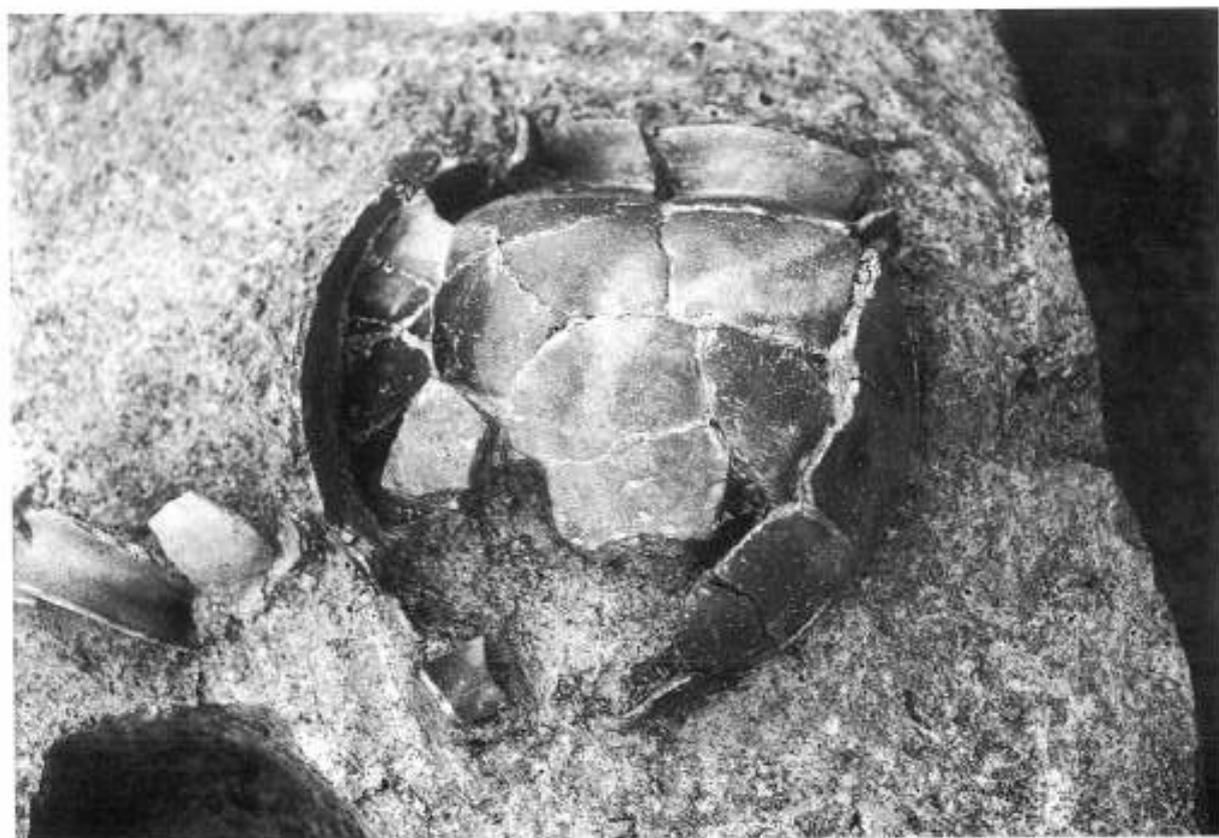
1 5号住居跡カマド



2 5号住居跡カマド



1 1号土器集中遺構



2 1号土器集中遺構



1 2号土器集中遺構



2 3号土器集中遺構



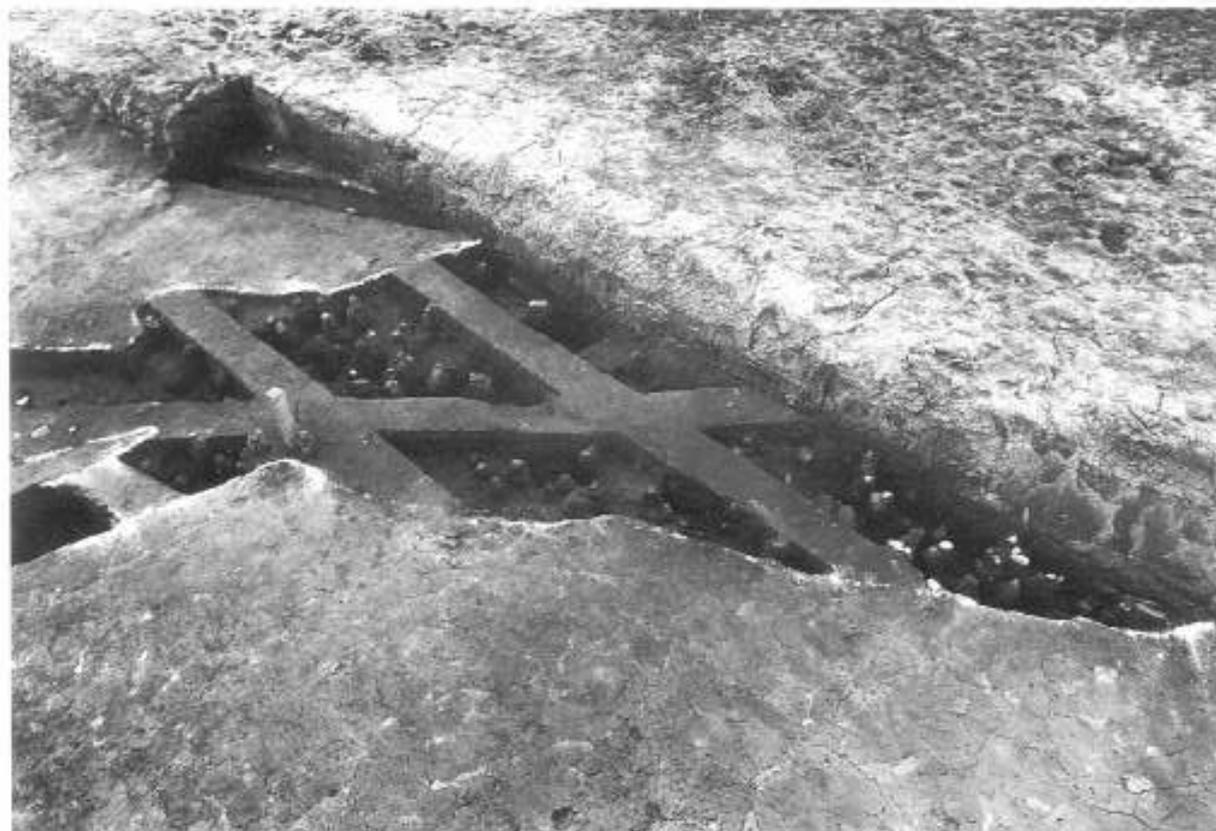
1 1号洞窟遗迹出土状态



2 1号洞窟



1 1号沟迹遗物出土状态



2 2~6号沟迹遗物出土状态



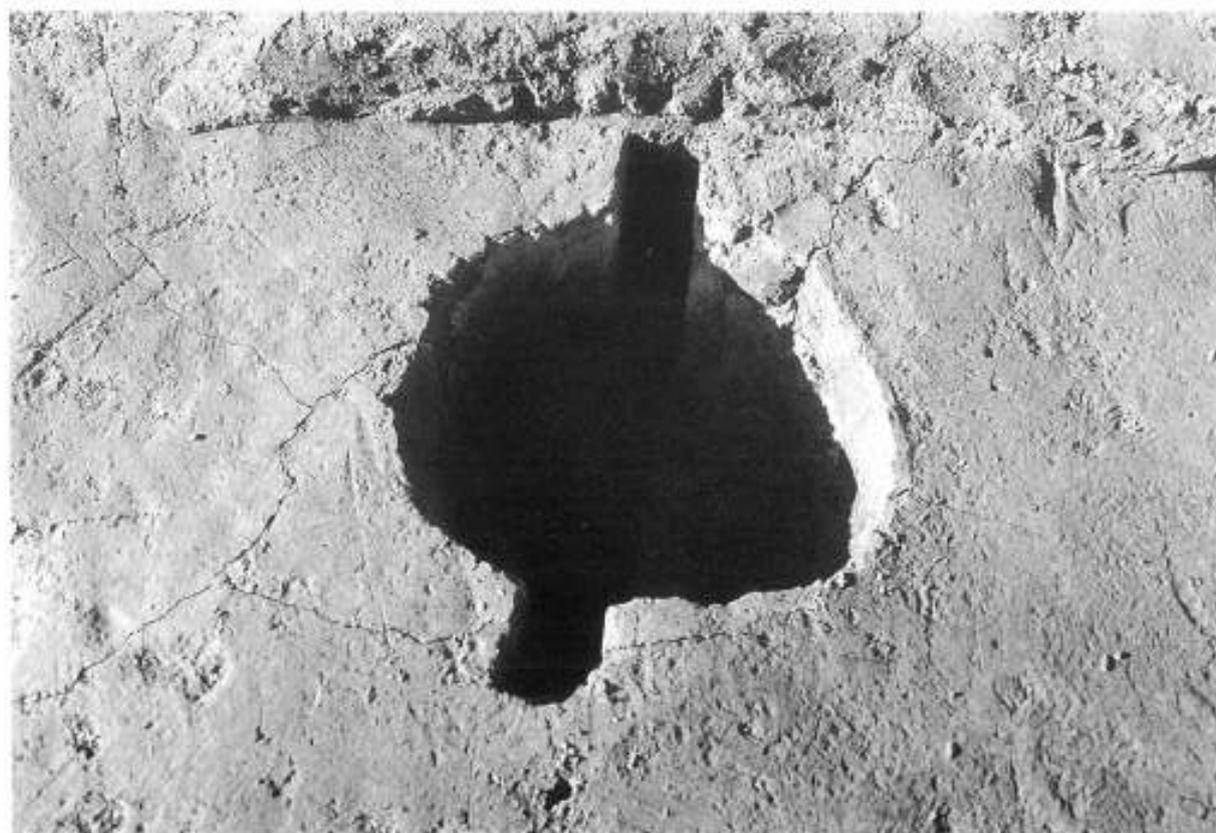
1 2~6号沟迹



2 5号沟迹器物出土状态



1 7号溝跡



2 6号ピット



1 7号住居跡遺物出土状態



2 7号住居跡遺物出土状態



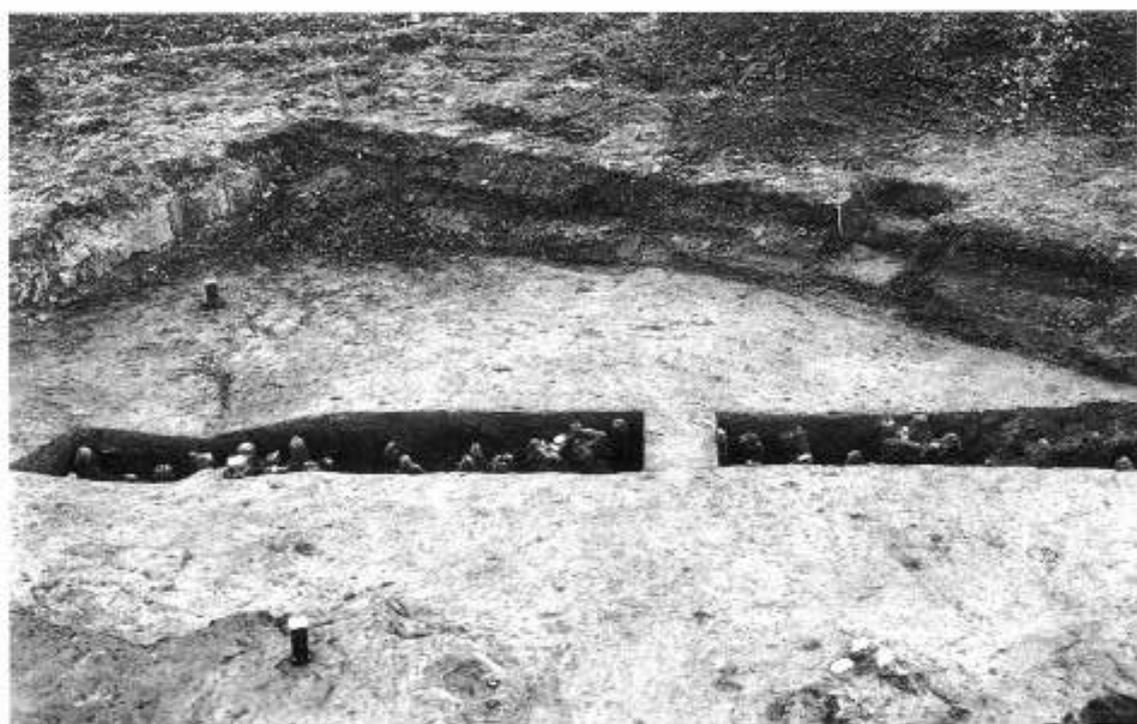
1 4号土器集中遺構



2 4号土器集中遺構



1 8号沟跡



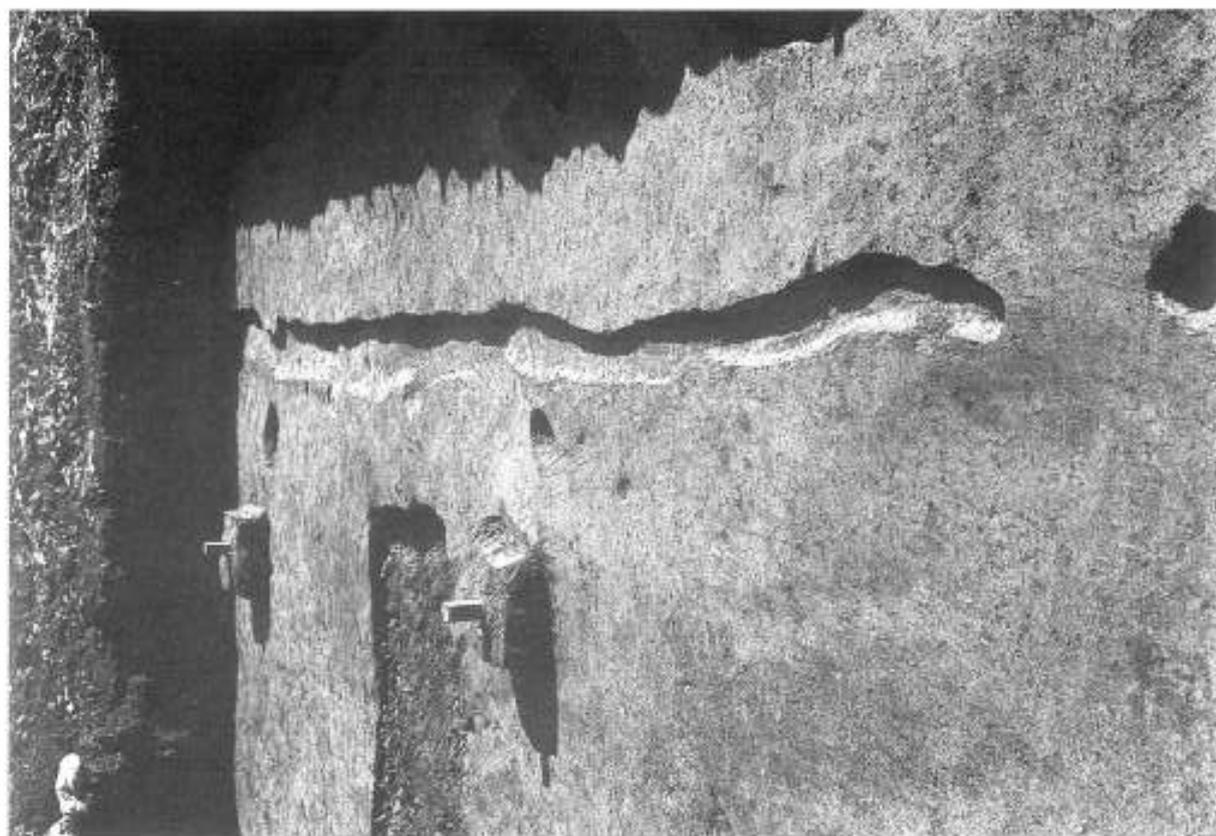
2 8号溝跡遺物出土狀態



1 西通遺跡遠景（北西から）



2 西通遺跡遠景（東から）



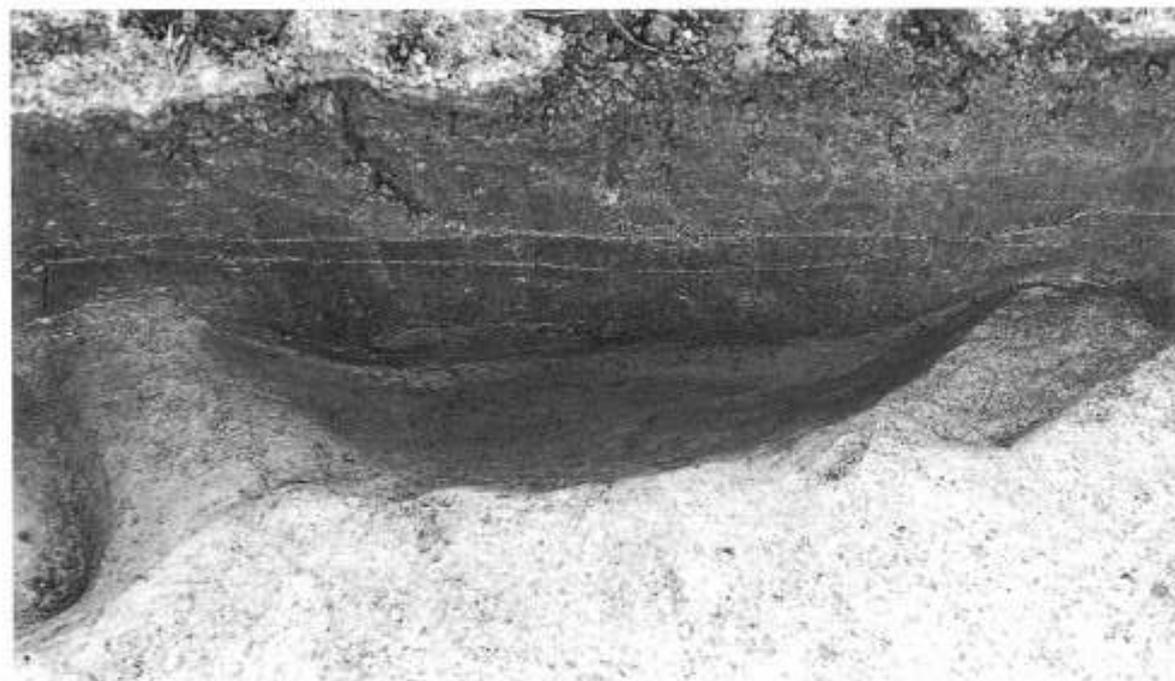
1 1号洞跡



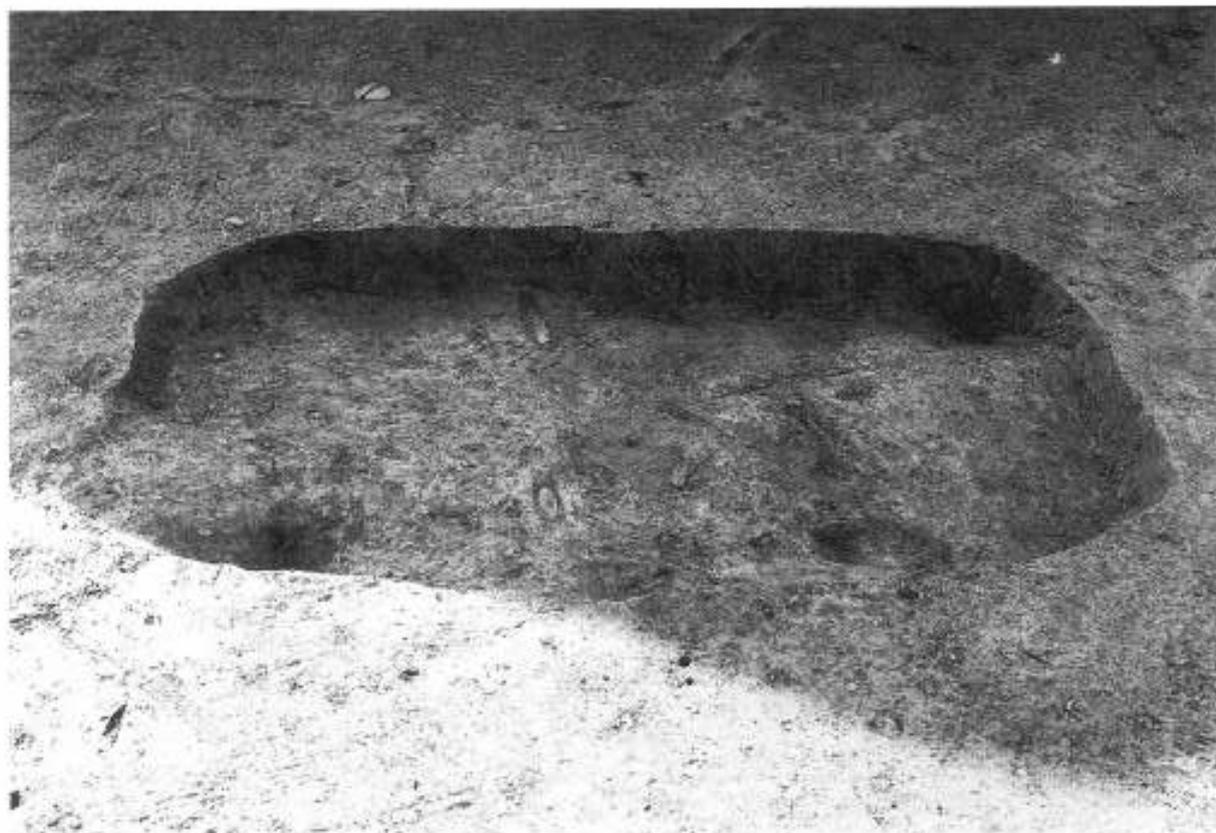
2 2号洞跡



1 1号土坑



2 2号土坑



1 3号土坑



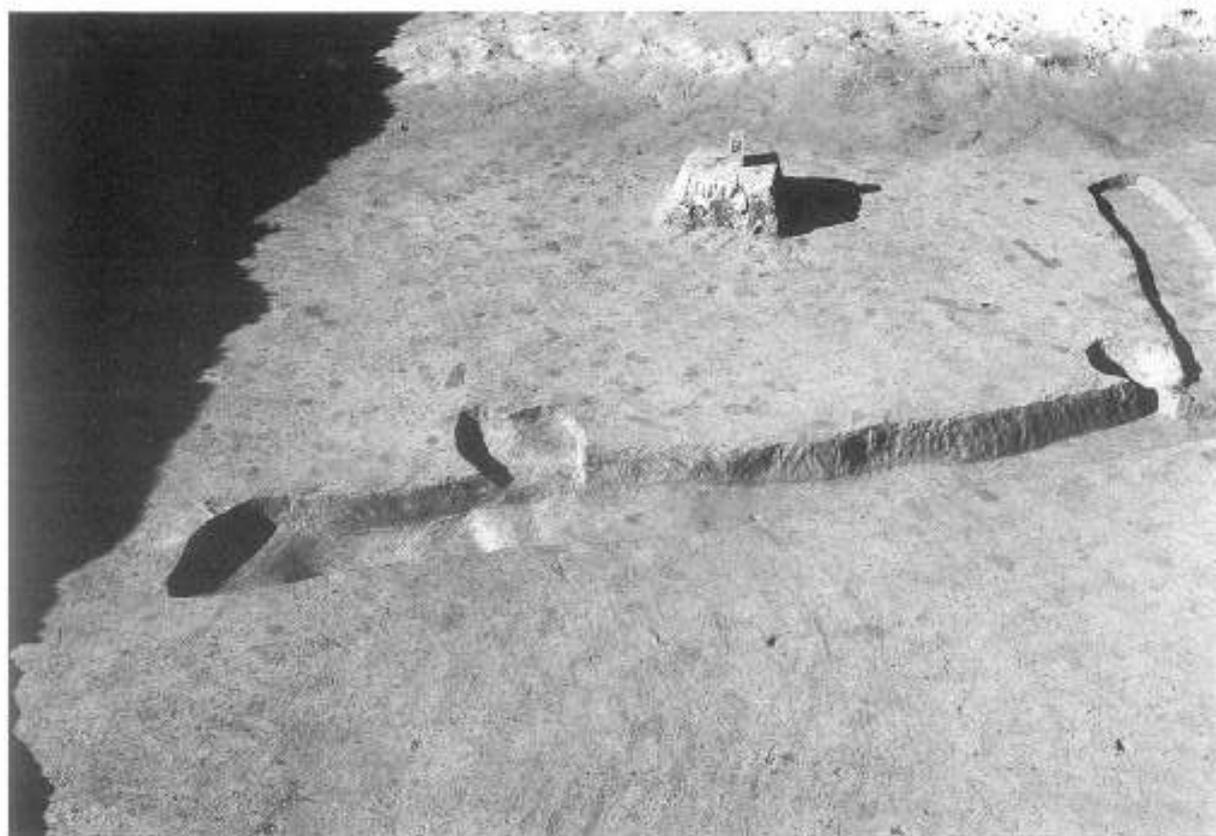
2 東通遺跡遠景（西から）



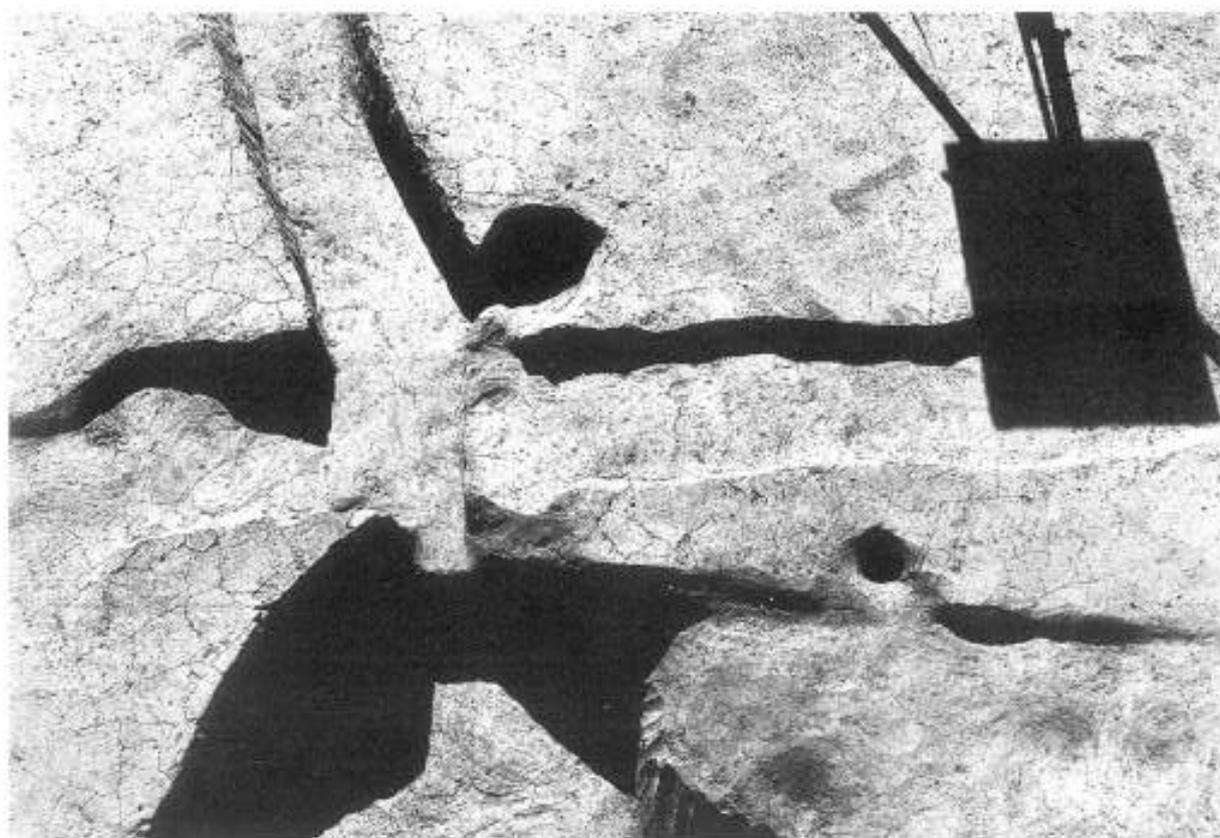
1 東通遺跡遠景（南から）



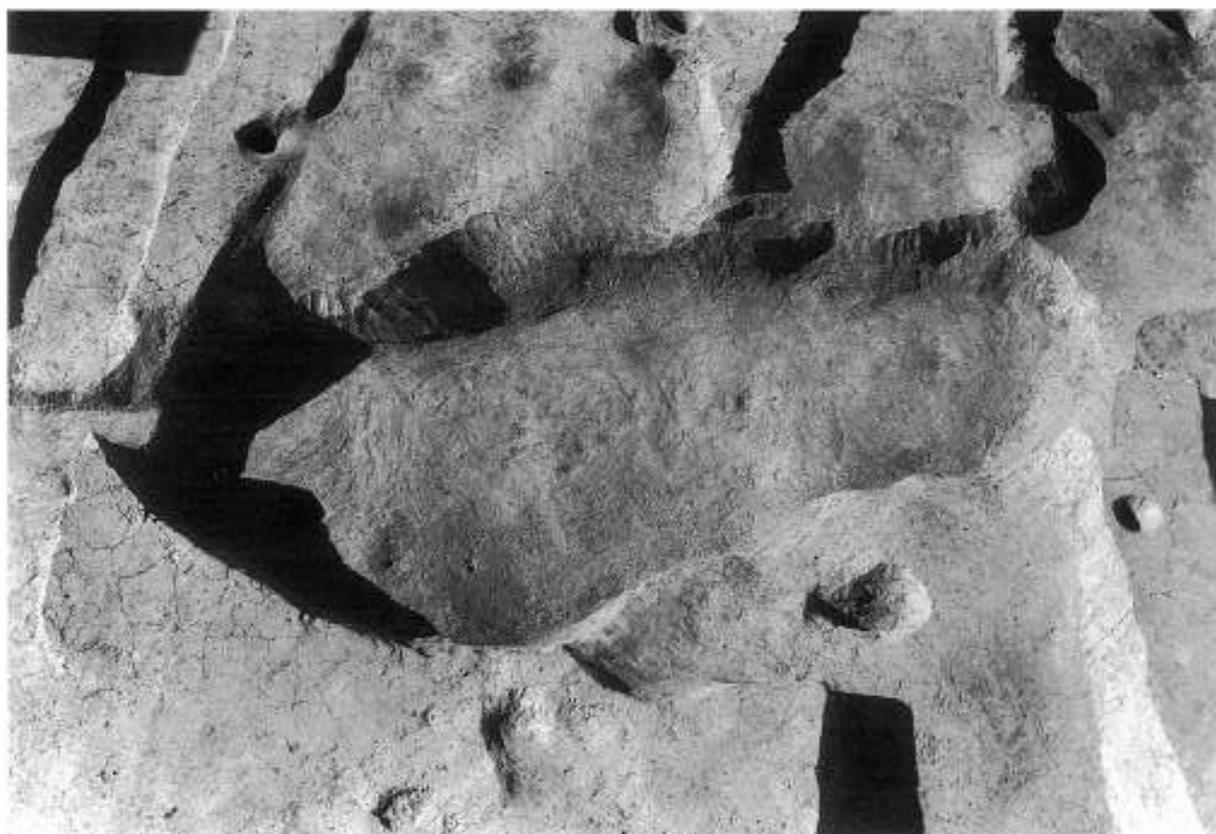
2 東通遺跡全景



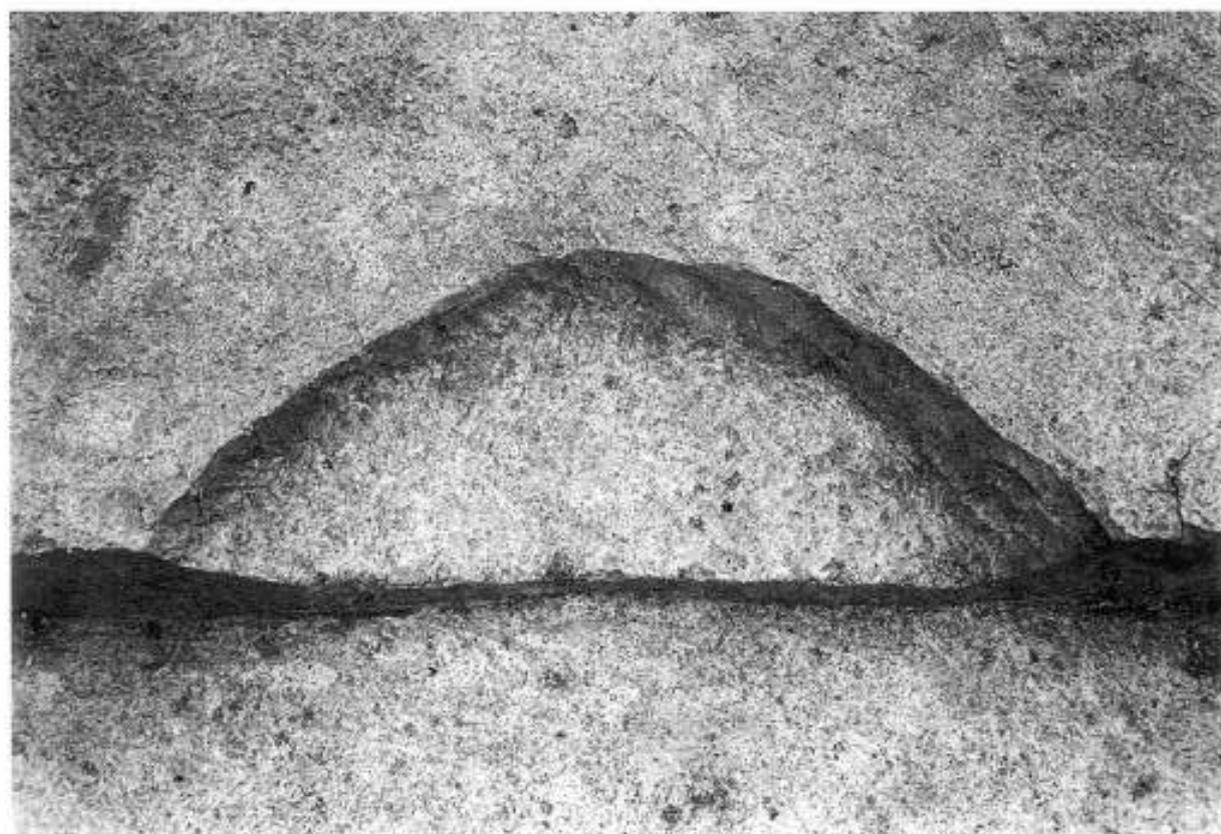
1 1・2号溝跡、3・4号ピット



2 2号溝跡、3号ピット



1 3号土坑



2 6号ピット



6-1



6-3



6-8



6-6



6-12

1号住居跡出土遺物



9-1



9-2



9-8

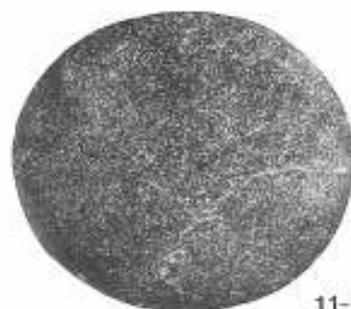
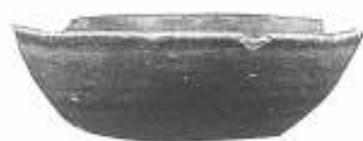


9-7



9-9

2号住居跡出土遺物



11-1

11-2

11-4

11-3

11-6

3号住居跡出土遺物



16-7

16-8

16-9

16-10

16-12

19-1

I区遺構外出土遺物

4号住居跡出土遺物



23-6

23-13

24-15



23-4



24-17



23-11



24-16

24-18

5号住居跡出土遺物



26-1



26-2



26-3

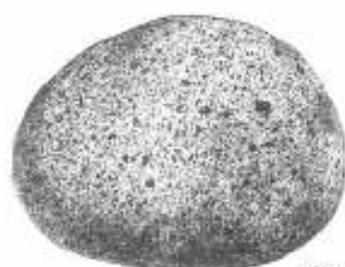


26-5

1号土器集中遺構



26-4



32-1



32-2

1号配石遺構



28-1

2号土器集中遺構



30-1

3号土器集中遺構



34-2



34-4



34-6

1号溝跡



34-5

图版30



36-22



37-33

2号溝跡出土遺物



38-41



38-43



38-44



38-45



38-49



38-51



38-52



38-53

4号溝跡出土遺物



36-3



36-2



36-15



36-6



36-14



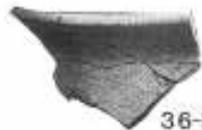
36-19



36-21



36-20



36-23



37-28



38-37



38-38



38-39



38-40



38-55



38-54



38-42



38-46



38-47



38-48



37-35



37-36

5・6号溝跡出土遺物



40-3

7号满跡出土遺物



42-1

3号土坑出土遺物



45-3



45-4



45-5



45-9



45-14



45-18



46-53



45-21



45-22



45-16



46-55



46-32



46-33



46-34



46-35



46-36



46-37



46-38



46-51



46-39



46-40



46-41



46-42



46-43



46-44



46-45



46-46



46-47



46-48



46-49



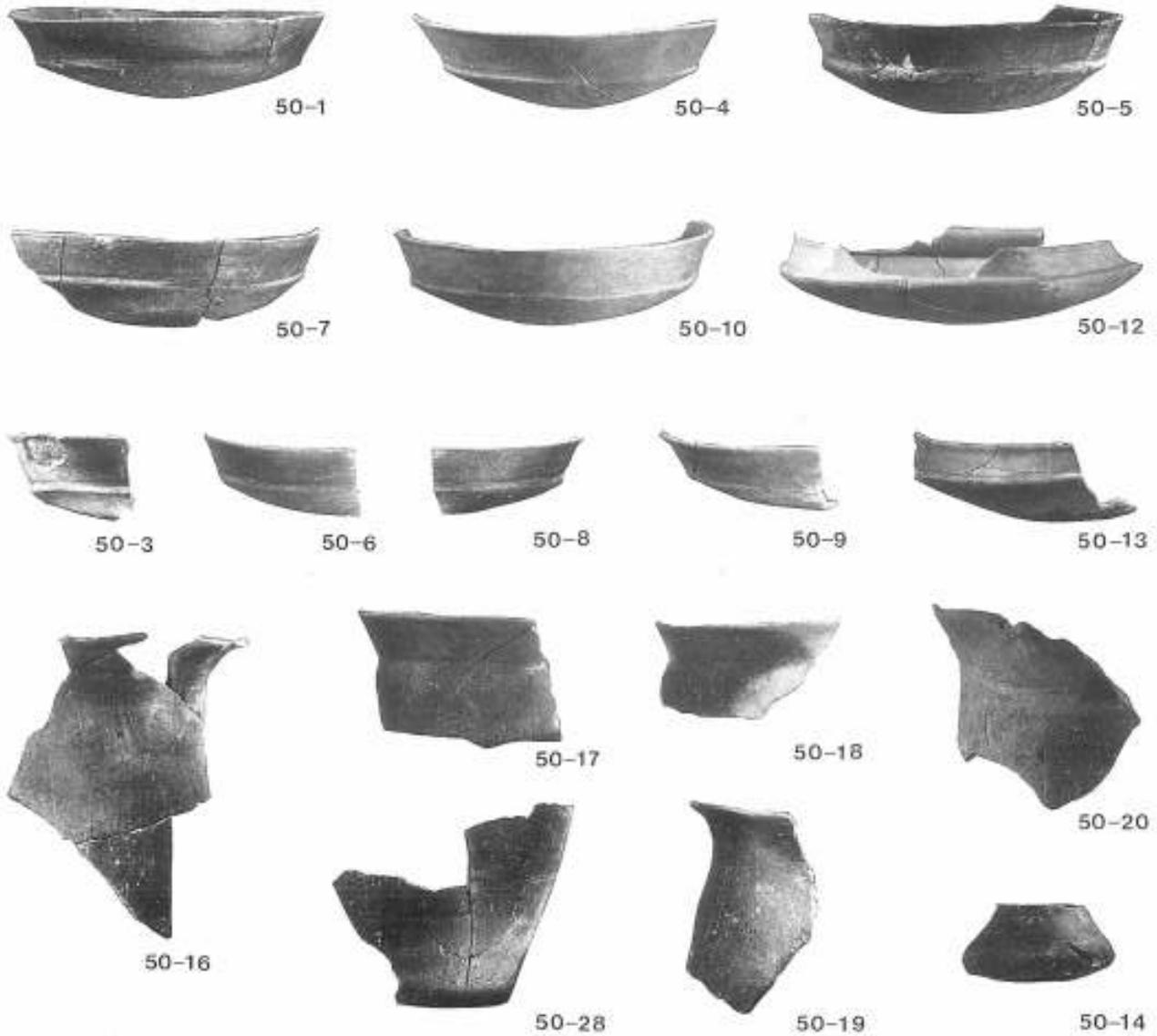
46-50



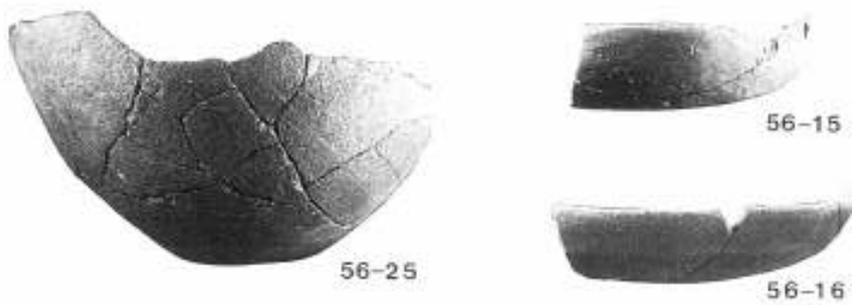
46-52

II区遺構外出土遺物

图版32



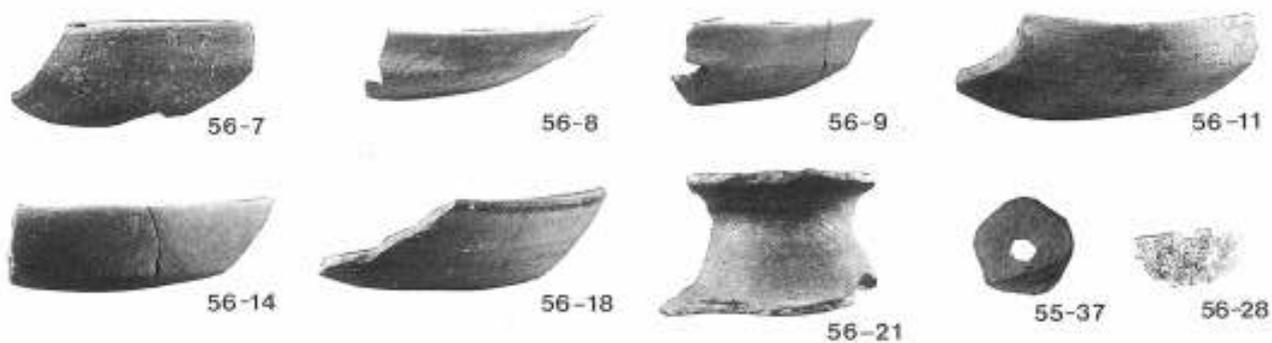
7号住居跡出土遺物



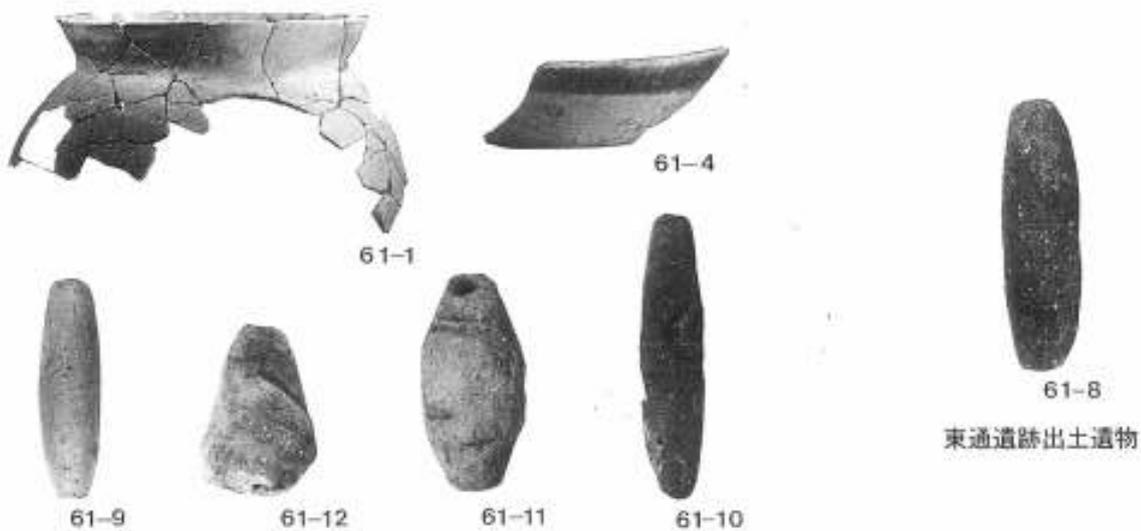
4号土器集中遺構出土遺物



Ⅲ区遺構外出土遺物



8号溝跡出土遺物

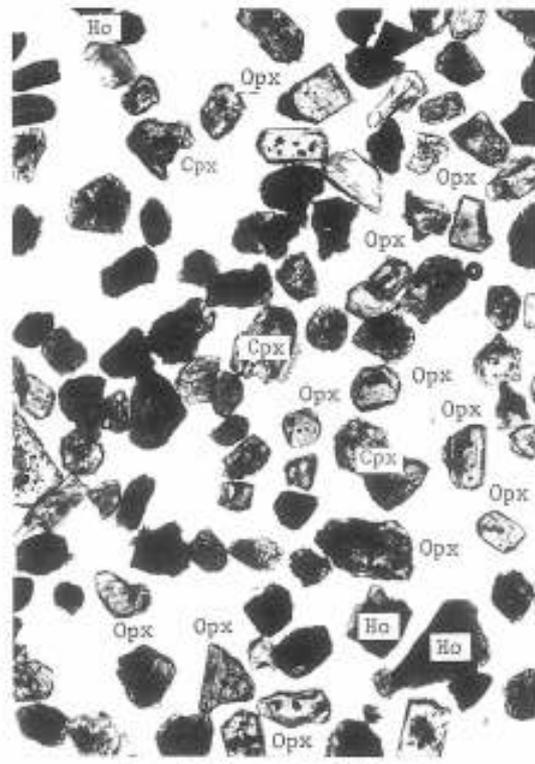


東通道跡出土遺物

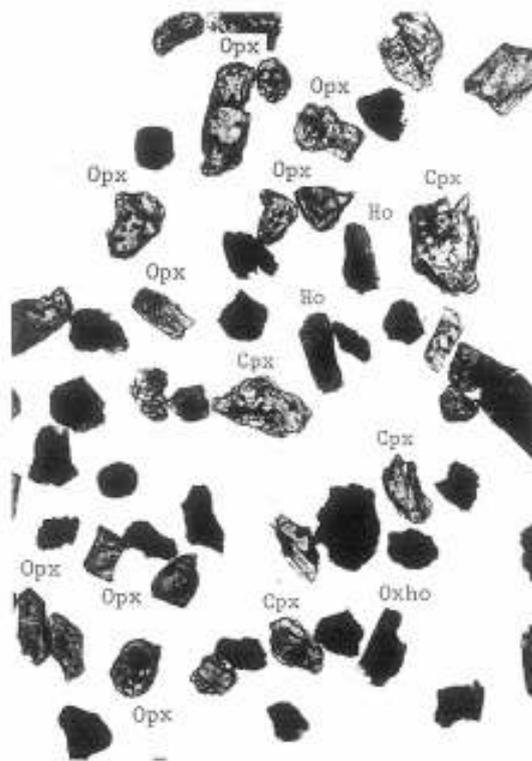
西通道跡出土遺物



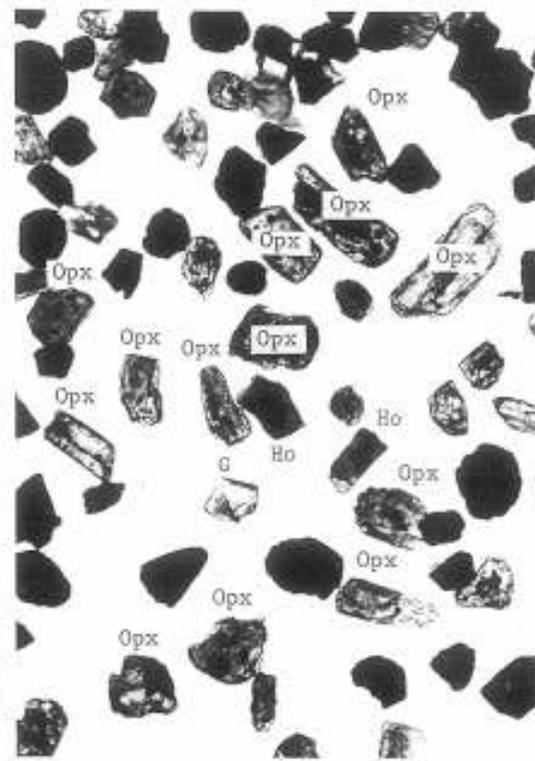
Iグループ (試料No.2)
(ネガNo.1)



II-1グループ (試料No.20)
(ネガNo.4)

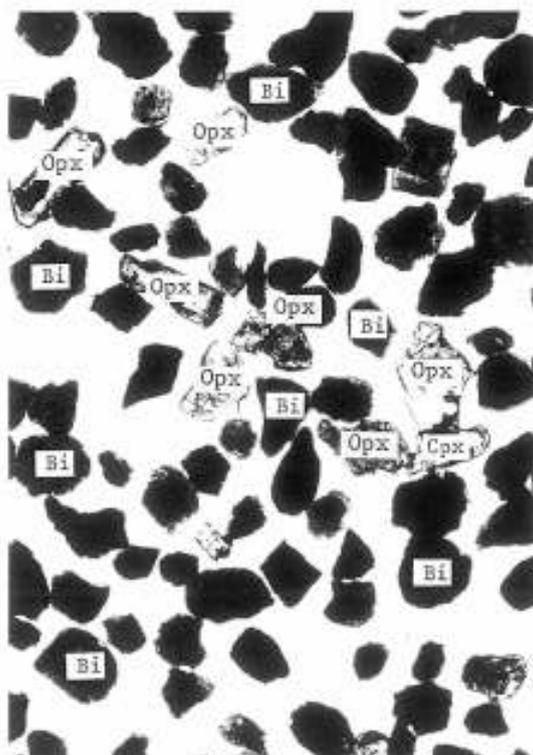


II-2グループ (試料No.25)
(ネガNo.6)



IIIグループ (試料No.15)
(ネガNo.7)

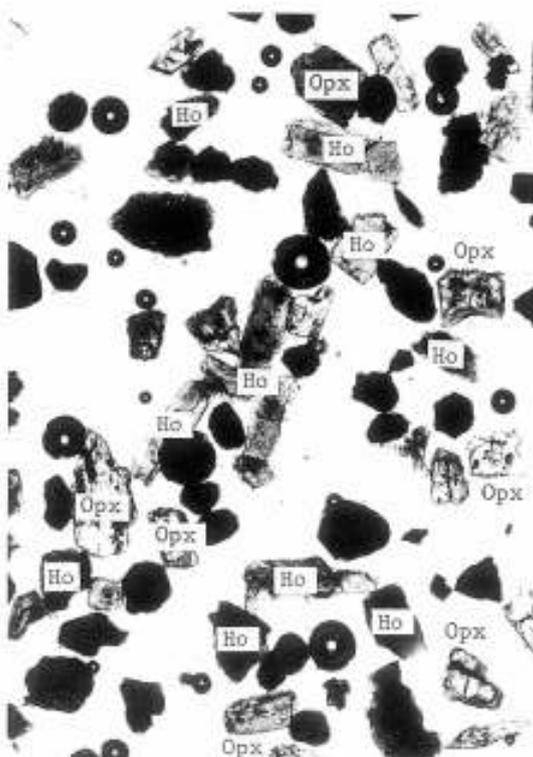
0.5mm



IVグループ (試料No.9)
(ネガNo.10)



Vグループ (試料No.13)
(ネガNo.12)



VIグループ (試料No.43)
(ネガNo.13)

凡例

- OpX : 斜方輝石
- Cpx : 単斜輝石
- Ho : 角閃石
- Oxho : 酸化角閃石
- Bi : 黒雲母
- G : ザクロ石

* 試料No. 2 はCpx以外は全てOpX.

0.5mm

平成元年3月31日発行

昭和63年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

中耕地・西通・東通遺跡

編集発行 埼玉県熊谷市教育委員会

印刷 株式会社博文社



さくらのまち「結谷」